

資料

(平成九年十月)

第四十二回「合宿教室」(厚木)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 42年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤濤吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・山辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
累計・参加人員				11,853名

第四十二回 『合宿教室（厚木）』 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成九年八月八日（金）から十二日（火）まで四泊五日間
 ところ 神奈川県・厚木市・「厚木市立七沢自然教室」
 参加総数 二二三名

目次

「はしがき」に代へて	……………	理事長・小田村寅二郎	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	……………		5
『合宿教室』の日程表（四泊五日）	……………		6
第42回『合宿教室』のあらまし	……………		7
感想文と第二回目の『短歌詠草』	……………	参加者全員	33
短歌詠草	……………	参加者全員	105
あとがき	……………		130
カメラ・レポート30枚（35ページから93ページの左頁に掲載）	……………		

“はしがき”に代へて

小田村寅一郎（數へ八十四歳）

（本会理事長・元亜細亜大学教授）

昭和三十一年（一九五六年）の本会創立以来、毎年八月に、主として九州各地または神奈川県厚木市で、一年もかかさずに続けて来ましたこの「全国学生青年合宿教室」は、今年は第四十二回目といふ年を迎へ、神奈川県厚木市の市立「七澤自然教室」で、八月八日（金）から八月十二日（火）までの四泊五日で開催いたしました。大山連峯の西麓に位置するこの「自然教室」の「朝の集ひの廣場」では、朝の澄み切った大氣を通じての体操によつて、新鮮さが甦り、心のなごむ思ひ一入（ひとしほ）した。往時の市長・足立原茂徳さん以下のスタッフの方々が、心魂を傾けて造営された宿舎だけに、この「合宿教室独自の日程の運び」にも、きはめて好都合な運営ができたことは喜ばしい限りでした。

北は北海道・青森をはじめ、全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（四十九大学から、男女学生一〇一名、社会人二十三名および関係者八十七名、合計二二一名）は、少数ながら精鋭の集まりとなり、充実した合宿運営となりました。たことは、助言者一同の認める所でした。

全員は、旅装を解く間もなく、開会式（八月八日午後二時）に列席し、松岡勲君（東大工学部四年）の力強い「開会の宣言」、続いて国歌斉唱二回、ついで「祖国日本のために尊い生命（いのち）を捧げられたすべての先人の御霊（みたま）」に対し、一分間の黙禱（もくとう）を捧げました。そのあと約二十分間を私が「開会の挨拶」をいたしました。そこでは、四十二年間にわたる合宿教室を回顧しながら、時に「時代の断層」といはれた時期への真剣な対応をはじめとして、全力を傾注して若い人々との交流につとめて今日に到つたものの、もはや日本の過去に目を向けようとはしない日本の国に墮落してしまつた。そのことを思へば、今日まで何のために努力してきたのかさへ疑はれ、何ともやるせない気持ちでいっぱいである。何とかしなければ、先人がたに合は

せる顔もない。そこで迎へるこの「合宿教室」である。「これからの日本を背負ふのは、皆さまがたしかるない。我々はお手伝ひはできるが、主役は皆さんなのです。日本の国の現在の姿を、どうか皆さん各々の胸に蘇らせて頂きたい。そこに生まれる共感こそが、これからの学問の基礎に置いてほしいのです」そして「この合宿教室では、学校や学年の差は問ひません。一人の人間として語り合はうとします。そこに素晴らしいものが生まれるにちがひないのです。それが日本の国を支へる力になります」と。

続いて、参加学生を代表して、浦 義勝君（早大第二文学部二年）が、昨年の合宿での体験を友に語ってくれ、開会式後のオリエンテーションでは、合宿教室・運営委員長の内海勝彦氏（日産自動車勤務）が、「この合宿では初めて聞くことも多く、混乱を覚えることが多いかもしれないが、是非、講師や友人の話しぶり、話す姿勢に心をとめて頂きたい」と訴へた。つづいて指揮班長の大日方学氏（神奈川県立津久井高校教諭）により、合宿期間中の細部にわたる注意が披露された。

今回の「合宿教室」にお招きした講師のおふたかた二人は、第二日の午前が、評論家で電気通信大学教授の西尾幹二先生と、今お一人は、第三日目午前、筑波大学名誉教授、（社）倫理研究所客員教授でフランス文芸御專攻の竹本忠雄先生であられた。西尾先生は「『五箇条の御誓文』にも見られる通り、民主主義の精神は何も戦後アメリカから教はった訳ではない。正義はすべて西洋側にあり日本には民主主義がなかったから戦争を引き起こしたのだ、といふ類ひの戯言は断乎拒否すべきだ」と指摘され、また竹本忠雄先生は「アメリカ文明は所詮唯物文明であつてこのまま世界をコントロールできるとは思へないし、人権を無視し、正義の観念もない中国にも期待できない。残るのは日本である」と今後の世界における日本の使命に言及されました。

この「合宿教室」では、昨年の「合宿」につづいて、「東京裁判史観」から全国民が一日も早く脱皮しなければならぬことが、刻下の急務であることが力説され、それと並行して、大学内での「友だちづき合ひ」は、上うはつらだけの遊び友だち

ではなく、「お互ひに相手の心を許し合ふことのできる友だち」を求め合つていくことこそ、「眞の学問の友」が得られることを、先輩たる助言者たちが訴へてくださったことも有意義でした。「班別討論」「班別輪読」などの時間帯を通じて、参加者諸君は、「この「合宿教室」ならではの数々の収穫」を身につけてくださったことと思ひます。ここに編じた『感想文集』は、全参加者が「解散間きは」に「走り書き」で提出してくださったものです。紙面の都合で全文をそのまま載せ得なかつたことは、お許しをねがふこととし、各人の文の最後に小さい活字で載せてあるのは、各人がこの合宿で第二回目に創作してくださった「和歌」です。合宿中に「短歌相互批評」で身につけられた力がうかがはれる作品と申せませうか。また、この「文集」の編集作業には、原川猛雄氏（本会々員、神奈川県立秦野曾屋高校教諭）をはじめ、二十名前後の方々（巻末の「あとがき」に人名掲載）が、公務・社務・学業の余暇をさいて取り組んでくださったことを、心から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、この「合宿教室事業」を行ふに当たりまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました多大の御支援・御激励に対しまして、会員一同と共に、心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

来年（平成十年）の「第四十三回合宿教室」は、八月七日（金）～八月十一日（火）までの四泊五日間、『熊本県国立阿蘇青年の家』（初めての使用）で開催することが決定し、「合宿教室運営委員長」には、福岡県立嘉穂高等学校教諭の小野吉宣氏（数へ年五十一歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段の御協力を御願ひ申し上げます。



「第42回台宿教室」記念撮影（参加者 213名） 於・厚木市・「厚木市立七沢自然教室」

参加者

（学生班 四十九大学）（洋数字は参加学生数）

酪農学園大 1 東北女子大 4 東北女子短大 2 東北栄養専 2

亜細亜大 4 青山学院大 1 学習院大 2 関東学院大 1

慶応大 3 白百合女子大 1 拓殖大 5 中央大 2

帝京大 1 東京経済大 1 東京工大 1 東京女子大 1

東京大 4 東京都立大 1 日本女子大 1 日本大 5

防衛大 2 法政大 1 武蔵野音大 1 明治大 1 明星大 2

立教大 1 麗澤大 1 早稲田大 6 東京法律専 1

金沢大 1 富山大 2 福井工業大 6 北陸大 1 愛知学泉大 1

近畿大 1 奈良大 2 大阪外大 1 立命館大 1 島根大 3

九州大 4 中村学園大 3 福岡大 1 福岡教育大 5 福岡女子短大 1

佐賀大 2 長崎大 4 熊本大 1 宮崎大 1 鹿児島大 1

計 一〇一名（うち女子三十八名）

（社会人・教員参加者） 二十三名

（高校生参加者） 三名

（招聘講師） 二名（国民文化研究会） 七十八名

（事務局） 四名（写真） 一名

（見学参加者） 一名

総計 二二三名

第42回（平成9年）全国学生青年合宿教室日程表

	8月8日(金) 第1日	8月9日(土) 第2日	8月10日(日) 第3日	8月11日(月) 第4日	8月12日(火) 第5日
6:30	<p>(注意)</p> <p>↓</p> <p>学生参加者は、一班八名前後の班編成です。 会場入口受付で、所属する班を確認のこと。</p> <p>随時受付</p>	—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—
7:00		洗顔・清掃 (7:00)	洗顔・清掃 (7:00)	洗顔・清掃 (7:00)	洗顔・清掃 (7:00)
8:00		朝の集ひ (国旗掲揚・体操)	朝の集ひ (国旗掲揚・体操)	朝の集ひ (国旗掲揚・体操)	朝の集ひ (国旗掲揚・体操)
		朝食 (8:30)	朝食 (8:30)	朝食 (8:30)	朝食 (8:00) 合宿を顧みて 合宿運営委員長 内海勝彦氏 (8:30)
9:00		講義 評論家・電気通信大学教授 西尾幹二先生	講義 文芸・美術評論家 筑波大学名誉教授 竹本忠雄先生	講義 国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎先生	参加者による 全体感想自由発表
10:00			質疑応答 (10:00) (10:10)	質疑応答 (10:10) (10:10)	
11:00		記念写真撮影 (10:40) (11:00)	班別研修	班別研修	感想文執筆 及び 第2回短歌創作
12:00		班別研修	班別研修	班別研修	班別懇談
		昼食 (12:30)	昼食 (12:00) (12:40)	昼食 (12:00)	清掃 (12:00)
1:00		昼食 (13:30)	短歌創作導入講義 山口県立下松高校教諭 實邊丈太郎先生 (13:40) (13:50)	短歌創作 (13:00)	開会式(挨拶) (12:30) 国民文化研究会 副理事長 兼子悦雄(シラカバ)氏 代表取締役事務 山村和洋氏 (13:00)
2:00	古典輪読講義 神奈川県立江南高校校長 国武忠彦先生	レクリエーション	創作短歌全体批評 戸田建設株式会社開発課長 青山直幸先生 (14:00) (14:10)	昼食後随時解散	
3:00	開会式(挨拶) 国民文化研究会・理事長 小田村興二郎氏	散策	班別短歌相互批評		
	オリエンテーション (合宿趣旨説明) 合宿運営委員長 内海勝彦氏 (諸注意伝達) 合宿指揮班長 大日方 学氏 (15:30)	短歌創作			
4:00	班別自己紹介 事務連絡打ち合せ	班別輪読 研修			
5:00				地区別懇談会 (17:30)	
6:00	夕食 入浴	夕食 入浴	夕食 入浴	夕食 入浴	
7:00	合宿導入講義 福岡県立筑紫ヶ丘高校教諭 酒村聡一郎先生	ビデオ上映 (19:40)	体験発表 熊本県立天草高校教諭 今村武人氏 伊佐市一公民館館長 伊佐 裕氏 (20:00)		
8:00		講話 元開発電子技術株式会社取締役 長内俊平先生 (20:30) (20:40)	慰霊祭の説明 精神戸製薬所 北村公一氏 (20:30) (20:40)	班別研修	
9:00	班別研修	班別研修	慰霊祭 (21:30)	班別懇談 (21:40)	
10:00	就床	就床	就床	夜の集ひ (22:30) 就床	

第四十二回 “合宿教室” のあらまし

第一日

(八月八日・金曜日)

第四十二回全国学生青年合宿教室は、丹沢山系の中腹、神奈川県厚木市立自然教室において開催された。猛暑の中、七沢自然教室には、全国各地から学生・社会人が次々に参集し、自然教室進入路に張られた「友よと呼べば友は来たりぬ！」の横断幕に迎へられた。参加者は受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

開会式

第四十二回全国学生青年合宿教室は、東京大学工学部四年・松岡勲君の力強い開会宣言により幕を開けた。

国歌斉唱の後、戦時、平時を問はず、祖国日本のために尊い生命を捧げられた全ての祖先の御霊に対し、黙禱を捧げた。

次に、主催者を代表して登壇された本会理事長の小田村寅二郎先生は、若い学生参加者を前に「これからの日本を背負ふのは皆様方しかゐない。我々はお手伝はするが、主役は皆さんなのです。さういふ気持ちでこの合宿に取組んで頂きたい」と訴へられ、「日本の国を各々の胸に蘇らせて頂きたい。そこに生まれる共感を学問の基礎に置いてほしい」「合宿を楽しく過ごして頂きたい。この合宿では学校や学年の差は問はず、一人の人間として語り合ひます。そこにきつと素晴らしいものが生まれる、それが日本の国を支へて

いく力となると信じます」と結ばれた。

続いて、参加者を代表して、早稲田大学第二文学部二年・浦義勝君が、昨年、この合宿に参加し、真剣に友と語る場を得た喜びを語り、「昨年は私の話を班員が真剣に聞いてくれたが、今年は友人の言葉に耳を傾けたい」と抱負を述べた。

開会式後のオリエンテーションでは、まづ合宿教室運営委員長の内海勝彦氏（日産自動車(株)勤務）が登壇し、「私はこの合宿で一生の友を得、また、これぞと思ふ言葉に触れる経験をしました」と、学生時代に初めて参加した合宿教室での体験を振り返り、「皆さんにとって、この合宿では初めて聞くことも多く、混乱を覚えることが多いかもしれないが、是非、講師や友人の話しぶり、話す姿勢に心を止めて頂きたい」と語り、合宿の趣旨を説明した。続いて指揮班長の大日方学氏（神奈川県立津久井高校教諭）により、合宿期間中の細部にわたる注意事項が伝達された。

合宿導入講義 「学問に志を——国家建設の息吹きにふれて——」

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒村 聰一郎 先生



先生はまづ、日本へ留学予定のマレーシアの学生に日本語を教へる日本政府派遣教師として、二年間マレーシアへ赴任され、そこで、志を持って活き活きと学ぶ学生や、マレーシアにおける「国家建設」の息吹きにふれられた体験を紹介された。異なる三つの民族、言語、宗教を持つこの国の唯一の求心力となるものは、国民の国家意識であり、それぞれの民族が同じマレーシア人である事をお互ひ自覚し合ふ事で国家が成立してゐる事を説明され、国家意識の薄弱な我国との違ひを述べられた。

次に先生は、日本へ来たアジア各国の留学生の目から見た日本及び日本の大学生についての文章や言葉を、新聞等から引用し、紹介された。彼等の目に映つたものは、自分の世界を超えたところでの話（政治、社会、国の問題等）ができない日

本の学生や、外国人に対して話し掛ける自信、誇りを失ってしまったる日本人の姿であった。しかしながら先生は、日本はかつてはアジアの人々の尊敬と称賛の対象であった事を話され、「南方特別留学生」制度（昭和十八年—十九年、日本が占領した東南アジア諸国から学生を日本に留学させた制度）で学び、現在それぞれの国でリーダーとして活躍されてゐる方々をはじめとして、日本を高く評価した外国人の言葉をいくつか紹介された。特にフィリピン・マニラ大学のロスサントス学長の次の言葉は、参加者に驚きと感銘を与へるものであった。

「南方特別留学制度の恩恵は、終戦後五十年を経た今でも続いてをります。……私どもは、郷愁の念と感謝の念を強くしてをります。郷愁の念を覚えるのは、日本で数多くの幸せな経験をし、胸熱くなる思ひ出があり、実り豊かな日本滞在中に培った友情を心の宝としてゐるからであります」

さらに先生は、我々の日常生活から政治外交に至る迄、誇りを失ってしまったる現状を取り上げられ、「自分の考へに誇りを持って堂々と主張するところに真の友情も信頼も生まれてくるのではないか」と訴へられた。そして誇りを持って国家に殉ずるといふ事の一例として、ペルー日本大使公邸占拠事件において殉職された大佐の遺書とその妻の手記を紹介された。

最後に合宿参加者に対する問題提起として、①国家意識を持つ事と国際化とは矛盾する事か、②戦前は悪で戦後は善であるといふのは正しいか、③国家の為に殉ずるとはどういふ事か、命を投げ出してまで守るべきものとはどういふものか、といふ三つを挙げられ、「これらを考へていくともっと知りたいといふ気持ち湧いてくるのではないか。志を込めた学問といふものがあるはずである。それがどういふものか考へてほしい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ皆で講義内容を確認し合ひ、その後講師が一番訴へたかったことは何か、どこが最も重要な点だったかといふことに留意しながら討論が進められた。

なほ、この班別研修は以後の各講義の後に行はれていった。全国から集まった見ず知らずの班友を前にして、最初はやはり緊張の為

か意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひ打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

第二日

(八月九日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。「朝の集ひ」の会場となった「ふれあひ広場」には明治天皇御製「さしのはる朝日のごとくさはやかにたまほしきはこころなりけり」の垂れ幕が掲げられた。緑濃き丹沢の木々に囲まれたさはやかな空の中、国旗掲揚の後、体操を行つて、一日の研修を心新たに迎へた。

講義 「不服従の思想」

評論家・電気通信大学教授 西尾 幹二 先生

先生は、まづ数年前に、サイパンや硫黄島などを巡る洋上研修の講師として、若いエリートサラリーマンを対象に船中で講義された内容について、次のやうに述べられた。



「私たちの心の中には戦争に対する二つの捉へかたがある。一つは戦争を自分とは無関係に、他人事のやうに『戦争一般』として捉へる。もう一つは、サイパンのバンザイクリフから米軍に追ひ詰められ、次々に投身自殺をした人々の思ひに心を馳せるやうに、今次の大戦を『自分の戦争』『自分の敗戦』として受けとめる捉へかたである。日本国民は自分の戦争を戦つて連合国に科学と物量の差で敗れたと信じてきた。しかし、最近では先の敗戦も、戦争一般として語られるようになってしまった。自分の戦争、自分の敗戦は戦争一般とは別だといふことを理解してほしい」

また、「第一次大戦後、ウイルソンが戦争に道徳と正義の観念を持ち込んだ結果、敗戦国ドイツは道義的責任まで問はれた。日本は第一次大戦から第二次大戦の間に、ルールが変更されたことに気付かずうまく適応することができなかった。日米戦争の遠因はそこにある」と、第一次大戦後、欧米が戦争と平和に関するルールを変更したことによって日本が追ひ込まれて行った歴史的過程を説明された。

さらに、戦後の日本について、「自由・民主主義・平和などきれいな言葉を戦勝国に握られてしまひ、検閲などの占領政策の影響もあり、日本は、不自由と不正義と残虐の限りを尽くした国だといふことになってしまった。しかし、『五箇条の御誓文』に見られるやうに、民主主義の精神は何も戦後アメリカに教はったのではない。正義がすべて西欧側にあり、日本が邪悪を全部背負ひ込むといふばかなことはない。日本に民主主義がなかったから戦争を引き起こしたのだといふ類ひのはごとを断固拒否すべきだ」と石橋湛山の言を引用しながら強調された。

そして、洋上研修で以上のやうな話を聞いた一青年からの手紙を紹介された。それは先生のお話の真意を理解せず、祖父の時代の戦争を戦争一般の概念で片付け、それ以上に考へが及んでゐない内容のものであつた。それを讀んだとき、先生は「愕然とし、何を言つても伝はらない空しさと言ひやうのない寂しさを味はつた」と嘆息され、「ここにある皆さんに今日の私の言葉が届いたでせうか」と身を乗り出して訴へかけられた。

その後、ドイツと日本の戦争責任の問題に触れられ、「ドイツは、全ての責任はナチスにあり、ナチスの十二年間はドイツ史の例外であると言つてゐるがそんな馬鹿なことはない」とその欺瞞性を指摘された上で、「日本は国家としてナチスのやうに国家総合犯罪を犯した訳ではない。だから戦争が終つたとき、戦争指導者と自分たちを区別せずにひとまづ一億総懺悔をした。戦争そのものは国際法から言つても犯罪ではない。言葉でケリがつかなくなつて武力に訴へるのが戦争だ。国家間においてなさねばならない謝罪はいくらでもあるが、戦争に関することは断じて謝罪してはならない」と厳しい口調で述べられた。

そして、折しも当日の産経新聞に先生が執筆された「正論」の記事を引用朗読された。

その記事は、本島前長崎市長が書いた、広島原爆ドームの世界遺産登録に反対する内容の論文を厳しく批判するもので、「大方の日本人は、登録は核廃絶への人類の祈願の表現だと言って、自他をごまかしてゐるが、実は、原爆投下によって、日本人をモルモットにして人体実験を行ったアメリカをして、ニュールンベルク裁判の被告席に立たせることであり、戦勝国の軍国主義への初めての世界的次元での告発である」と原爆投下の非道性と、ドームの世界遺産登録の意義を明確に指摘された。

最後に氏は「今日お話したことは、皆さんはこれまで聞いてきたことと逆だと思ふかもしれない。しかし、どちらが真実に裏付けられてゐるのか。それはこれから皆さんが勉強することによって判明するだらうし、歴史の進行が明らかにするでせう」と述べられ、二時間に及ぶ講義を締め括られた。

また、その後の班別研修でも各班を回り、親しく質問にお答へいただき、私たちへの熱い期待をお示し下さった。

古典輪読講義 「吉田松陰『講孟余話』」

神奈川県立江南高校校長 國 武 忠 彦 先生



先生は、年表をもとに吉田松陰の生ひ立ちから話を始められ、松陰の文章を引用されながらご講義をすすめられた。歴史を学ぶことについて、「理想とする人物がはっきりと松陰の心の中に生きて躍動してゐた。例へば天皇に忠節をつくした楠木正成であり、忠臣義士は日本人にとって一番大事なものであった。しかし戦後、皇国史観の名のもとに忠臣義士を葬りさってしまったひ、私達の心の中にも英雄も豪傑も否定し去ってしまった」と指摘された。しかし、「松陰は歴史上の人物を心の中に蘇らせ、自分の生き方を問ひ、正しながら、手に汗を握ってその人物と一喜一憂してゐる。

この困難な時世を打開していく意気軒昂とした力を歴史上の人物から、そして友達との付き合いの中から松陰は得てゐたの

です」と述べられた。さらに先生は、松陰が東北遊歴の際、会沢正志斎に会ひ、これがきっかけとなつて日本書紀を読み、初めて日本の国柄をはつきりと知つたことを鋭く指摘された。「松陰は、私達の先祖が信じ、喜びを持つて大切に伝へてきた天孫降臨の神話を信じたのです。神の子孫である天皇が徳をもつて人民を治め、人民がかういふ天子に親しみを感じて全力を尽くす。かういふ麗しい国柄が万国に卓越するものであり誇るべきものであることを松陰は学び、このやうな国柄のなかに生まれたことを喜び、そして自分の価値を知つた。そこから松陰が自主自立していく力も湧きおこり、彼の原動力はここにあつたのです」と力強く話された。さらに先生は、ペリー来航後の海外渡航失敗・野山獄での「孟子」の講義など松陰の行動について眼前に浮かぶが如くに生き／＼と語られていった。「二十四歳の青年が、国家の危機に敏感に反応し、夜昼となく自分の問題として心を痛めてゐる。国といふものを自分と直結して考へてゐることを皆さんに感じてほしい」、そして、松陰の「体は私なり、心は公なり」といふ言葉を引用されながら、「私の心を働かせながら、決してそれを否定するのではなく、公に殉じる心、さういふ生き方をしなければならないと松陰は教へてゐるのではないでせうか。」と訴へられた。最後に先生は、日本人が大切にしてきた日本の国柄をもう一度よく見つめ、考へていかなければならないと話されてご講義を終へられた。

班別輪読研修

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。國武先生の講義を振り返りながら、紹介された講孟余話の文章、書簡類等を、言葉の意味を一つ一つ押さへながら皆で声に出して読み、そこに込められた吉田松陰の志や思ひを偲んでいった。そして松陰の言葉にふれて、自分達が思ひを至すべきこと、あるひは学ぶべきこと等を班員と語りあつていった。

合宿二日目の夜の日程を貫くテーマを「若人の生き方」と捉へて欲しいとの司会者からの紹介があつて「天翔る青春」のビデオ上映に入った。この映画は、世界各地の大戦でそれらの祖国のために殉じた各国の青年達の紹介に始まり、大東亜戦争中に北の大地・南の海に散った数多くの英霊たちの心情に迫つて行つた。人間魚雷「回天」や、神風特攻隊の出撃間近に綴られた遺書は、戦友や遺族の思ひと共に、初めて観る参加者の胸を揺すつた。また日本軍玉砕の島、南太平洋のベリリュー島での現地パラオの人々や元アメリカ兵へのインタビューを通しても、祖国のために戦ひ、尊い生命を捧げた勇敢な日本兵士達が、同時に肉親や友人思ひの心やさしい青年であつた事も沁みぐくと伝はつて来る映画だつた。参加者一同を大きな感動・畏敬の念が包み込み、終映後暫くの間、満場寂として声なき状況であつた。

講話 「若き友らに語りかける言葉——真に普遍的なもの——」

元開発電子技術(株) 長内俊平 先生

「本来ならば、今のビデオを観た後では一時間でも沈黙して皆さんで英霊たちを偲ぶ時間であつた」と先生は語り始められた。お話は「沖繩の良い所は？」と尋ねられて「さあー？」としか答へのなかつた百一才の長寿者、知念カマさんの味はひ深いエピソードへと続き、「現代の病根は何にでも明快な回答を得ようとする事。知的な領域はともかく、自然・人生の不可思議は心で感ずるしかない」と指摘された。

「言葉の意味は半分わからなくとも心が通ひ合ひ、親しく懐しいと感ずる事は誰にもある」



とのお話の後、キリストの「幸ひなるかな心の貧しき者よ」と聖徳太子憲法第十条の「共に是凡夫のみ」を暗誦されつ、「自

分の心を良く見つめてゐる人々は、洋の東西を問はず、国の違ひを越えて直接通じて合ふもの、「各国が民族の伝統を守つてその国らしい生き方をする。真に普遍なるものはそこに現はれるものです」と示唆された。

最後に再び特攻隊の方々の生き方に触れ、「諸君は自分達も国のために死ぬるかと思ひつめないやうに。心の問題は頭で考へてもわからないから。国に危難の足音が高まれば、諸君の血潮の中に刻まれてゐる祖国の生命・祖先の祈りが甦るものです」と参加者の心の緊張をほぐすやうに語られ、「父母への感謝を素直に表現すること。道はそこから始まります」としめく、られた。

その後の班別討論は「遺書」の一語一語を偲び、同時に若き参加者達に寄せられた講師をはじめ先生方の、温かい期待を確かめ合ふ時間となった。

第三日

(八月十日・日曜日)

講義 「騎士道と日本」

文芸・美術評論家・筑波大学名誉教授 竹本 忠 雄 先生

昨年阿蘇合宿に引き続き登壇された竹本先生は冒頭に「戦後の日本においては、個人にとつて最も貴いものは生命であるといふのが通念となつてゐる。だが、過去の歴史を見ると、最も貴い生命さへもなげうって何かの為に生きた人達が西欧にも日本にもゐた。それが西欧の騎士団であり日本の武士団であつた」とお述べになり、さらに戦争、敗戦、占領を経て、武士道が軍国主義として一片の紙切れとなるといふ一八〇度の価値観の変遷を体験される中で、極東軍事裁判の判決を府立三中時代の教室で涙をこらへつつお聞ききになつたこと、その直後の社会



科の授業の時に学友の一人が「武士道とはそのやうなものではなかったはずだ」と壇上で拳を叩いて訴へたことをお話になり「本日の講義はその学友の問ひかけに答へる場でもある」と述べて本題にはいつていかれた。

先生は「我々が反省してゐるやうには世界は日本を見てゐない。我々は今一度武士道を見直すべきであり、その為には西歐の騎士道がどのやうなものであつたかを明らかにする必要がある」と述べられ、西歐の騎士道、特に仏国の騎士道について、仏国の歴史を繙きながら、西暦四九六年にクロビスが受洗して王に即位してフランク王国が始まつた事、八〇〇年のシャルルマーニュ大帝の仏、独、伊併合による封建制度の発足と騎士の芽生え、一〇五六年の十字軍遠征等を経て、十一世紀末に聖ベルナルが登場して神殿騎士団を創設し、騎士道典範を制定して第二回十字軍遠征でイスラム世界よりエルサレムを奪回した史実等を人類史の観点から詳述された後、それより約百年後に日本で北条泰時により制定された武士の典範である貞永式目と騎士道の典範との違ひについて「騎士道の典範はキリストの信仰抜きでは考へられない。そこには『正義』だけではなくキリストの教の根本である『慈悲』の心があつた」とお述べになつた。

先生は、西歐の騎士団と神々とのかかはりを、ヤーウエ（ユダヤ教の神）、マリア、キリスト及び垂訓を授けられた三人の弟子（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）、更にはヨハネの後継者として出現した聖ベルナルやヨーロッパにおけるいくつかの騎士団についてお話になり「騎士団は、単に剣をとつて戦ふだけではなく、病人と弱者を守る為に戦つた。またフランスも日本も肇国以来神々と人々とのつながりがあり、そこに騎士道が生れ、武士道が生れた」とお述べになつた。

だが、その後封建制度によつて莫大な富と権力を有する事になつた神殿騎士団は、近代君主政治を開始したフィリップ四世に異教徒として捕へられ七年間の拷問を経て火焙りの刑に処せられ（聖ベルナルが登場して百八十年後に）王を呪ひつゝ死ぬといふ悲惨な結末にお触れになり、「神殿騎士団の消滅によつて西歐では神々と人々との絆が断たれてしまつた。日本も武士道が西歐から何故かくも重要視されてきたかといふと、西歐には既に存在しない騎士道の見果てぬ夢を、武士道、即ち乃木大将の殉死、大東亜戦争の決死的行為の数々、特に神風特攻隊の行為に見たからであつて、日本の武士や神風パイロットは死んで名誉を残した。彼らが自分達の死が大死にでないと思つてゐたことは、自分達が死ぬ事によつて魂を残すと

いふことが靖国神社に切々と書き遺されてゐることで明らかではないか」とアイバン・モリスやルネ・セルボワール元駐日大使の言葉を引用しつつ西欧の人達の見方を語られた。

アメリカと欧州と中国との間で日本はどうあれば良いかについて先生は「西欧の人達は、アメリカ文明は所詮唯物文明であつてこのまま世界をコントロールするとは思へないし、人権を無視し、正義の觀念もなく武士道も無い中国にも期待出来ない。残るは日本である。原爆に文化はない。然し神風パイロットは文化として最高の形を遺したではないか。だが今の日本は自分達の宝を埋もれさせたままで何の自覚もなく生きてゐる。日本人は自らの宝を宝として世界に役立てて欲しいと願つてゐる」と述べられた。

日本の現状について先生は「今日の日本は外からの（内からの協力も得て）強い鎖に繋がれてゐる牢獄の中に生きてゐる。神殿騎士団やジャンヌ・ダルクを火焙りにしたものと同じ何かが日本を縛つてゐる。にもかかはらず日本人は羊のやうに沈黙したままである」と憂慮され、続けて「然し我々が今日の状況を牢獄であると認識して立ち上がるならば事情は一変する。例へば、中国が靖国神社について何と言はうと、日本は昔から英霊を神としてお祭りして来た、我々は神々とともに生きて来たと言へば良い。人権についても国内では喧しいが、中国がチベットで行つてゐることをフランスではつぶさに報道してゐるのに日本のマスメディアは何も報道しない。日本のマスコミは日本を無力化しようとする中国に協力してゐる。皆さんには真実が見えるやうになつて欲しい」と述べられた。

「その最も大切な問題に比すれば汚職や神戸のA少年のやうな事件は問題ではない。大本を正すことが最も重要な問題である。そのことを真剣に考へる為はこの合宿がある」と参加者に訴へられ、最後に「西欧の騎士道に比べて日本の武士道が長く続いたのは、ひとへに、天皇のご存在によるものである。何故なら日本では、天皇のご存在を通して神々と人々の絆が保たれて来たからだ。この絆が断たれた事は一度も無い。これからも無い。その限りにおいて武士道は永遠に蘇り続ける。日本が再び真の意味で世界に貢献出来る日を願つて、お互ひに頑張つて生きようではありませんか」と締めくくられた。

山口県立下松高校教諭 寶邊 矢太郎 先生



先生は始めに、自分の学生時代に左翼の学生をこの合宿に誘ったときのことを話され、その学生がその合宿の途中ではもう帰ると言っていたけれども、合宿の最後に、短歌相互批評だけはよかったと言ったことが心に残っていると語られた。そして、「彼がさう言ったのは、短歌によって心が解放される楽しさを感じたからでせう」と、短歌の持つ力について語られた。

続いて、高校の教へ子達が沖繩に修学旅行に行った折に詠んだ短歌を例として採り上げながら、短歌を創る上で留意すべき点をわかりやすく、また、ユーモラスに語られた。そして、歌は理屈ではなく、理屈から脱却し、自分の切実な思ひを形にすることが肝要であると語られた。

そして、先の大戦における沖繩戦のことに話を進められ、丸一日止むことのなかった米軍による凄まじい艦砲射撃のこと、そこで果敢に戦ひ命を落された兵士達と一般の人々の姿を語られた。その沖繩に昭和天皇がお寄せになられた深い思ひを、昭和天皇が御病ひに御倒れになり、沖繩ご訪問を断念なされた折の御製を紹介されながら偲ばれた。

更に、摩文仁の岡の戦ひにおいて、唯一の井戸への坂道で、人影が少しでも動けば砲火を浴びせようと米軍が狙っている中を、学徒たちが決死の思ひで水を汲みに行き、多くの命を失ったことを語られた。そして、今上天皇が皇太子の折に沖繩を御訪問され、その戦ひのことを偲ばれてお詠みになられた短歌を紹介された。更には琉球に古くから伝わる琉歌を自ら学ばれて、その琉歌でその戦ひのことを詠まれたことを紹介されて、今上天皇の沖繩への思ひを偲ばれた。

また、国民文化研究会の小林国男先生、小柳陽太郎先生が摩文仁の岡を訪ねられて詠まれた連作短歌を紹介されて、「これらの歌を読むと両先生の思ひの深さを感じられるでせう。戦争の犠牲者といふ一片の言葉では到底言ひ尽くせない感情が湧いてくるでせう。心の深さを知るといふことは、つらいことでもあります。また、大変楽しいことでもあるのです」と

語られて、講義を終へられた。

レクレーション

講義後、参加者達は厚木の森林公園への散策に出かけた。夏の日ざしの中、汗をかきつつ山道を歩き、班友等との楽しいひとときを過ごした。

体験発表

最初に、熊本県立天草高校教諭の今村武人氏が登壇され、校内で頻発する盗難事件や生徒会の活動を契機に、生徒同士の当たり障りのない「人格不問」の人間関係を痛感され、それを機に「一日一文」と題し、新聞の記事やコラムのコピーを配布し、生徒と共に読むことを行っていると話された。この取り組みは、生徒達の言語能力を高めることにより、思索力、コミュニケーション力を高める必要があると感じられていることである。「大切なことは、賛成とも反対ともつかない、口ごもる友達の言葉に、その友達の真意をくみとり、感情を高ぶらせて何かを話さうとする友達の心に生き生きとした何かをつかまうとする心の訓練ではないか」といふ小柳陽太郎先生の文章を引用され、人の心の真意を推して図ることの大切さを訴へられた。そして、最後に生徒達の「一日一文」に対する感想を紹介し、今後も、生徒達自身の自由闊達な意見交換ができるやうに、言葉の訓練を続けていきたいと語られた。

次に登壇された伊佐ホームズ(株)取締役社長の伊佐裕氏は、十年前に自ら和風住宅設計施工の会社



を設立された経験をもとに、仕事と人生について語られた。

会社の「社」といふ字は社やしろの前で気持ちを示し神に誓ふ事であり、本来さういふ深いまどりの集団であるといふ事を指摘され、「毎日会社の神棚に手を合はせ、神から水が落ちるのを見ると、今日の生命を有難く思ふし、清々しく成ります」と語られた。

また、志を持つといふことに触れられ「心の中にデッサンを描く事が必要であり、描くと中心線 〓 「志」が持て、その志が高みに行かうとする。高い志からは、自分の持てる良い部分が引出され、本物との出会ひがおこり、本物の慶びを感じる」と言はれた。

最後に、客観的に距離をおいて物事を見るのではなく、身を没して主観的に入り込む中で、本物が出て来るといふ確信を持ってゐる、と訴へられて体験発表を終へられた。

慰霊祭

三日目の夜は、慰霊祭が執り行はれたが、それに先立ち、(株)神戸製鋼所資材部勤務の北村公一氏(31歳)によって慰霊祭の説明が行はれた。氏は、自分の持つてゐる考へ方、基準の殻を破つて自分の思ひをもつと飛躍させるには想像力の豊かさが必要であり、また、先人の方々をお偲びするにも想像力が必要であると語られた。また、自らが体験した阪神大震災の街の惨状から、戦争中の空襲直後の人々の思ひを偲んだことを話された。そして、昨日のビデオ映像「天翔る青春」を見て、お祀りする御霊は遠い存在ではなく、吾々の方から思ひを寄せれば、すぐ身近かに感じられるものであると語られ、そのやうな思ひを寄せる場として、我々の身近かにも、靖國神社や護國神社等の多くの場所があると述べられた。その例として、布瀬雅義氏(本会理事、住友電気工業(株)勤務・44歳)の「朝の神社にて」といふ文章を取り上げ、若い皆さんは新入社員になつたつもりで、通勤途中の朝の神社を偲んで下さいと呼びかけ、読んでいかれた。そして、一枚の葉が枝、幹、根につな

がるやうに一人一人の心は家族、民族そして人類につながつてをり、そのことを偲べば、個我のとはれが洗い流されて、新たな生命力を得て、朝の職場に向ふことができるといふ文章を心をこめて読まれた。

次にビデオ映像を用ひながら慰霊祭の意義と祭式次第を説明され、「海ゆかば」の歌を斉唱し、説明を終はられた。

その後参加者は屋外の広場に設けられた祭場に整列し、慰霊祭が厳粛に執り行はれた。

まづお祓に代へて、三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠が長内俊平先生により行はれ、慰霊祭は始められた。



次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、澤部寿孫氏（日商岩井(株)勤務）が祭文を

奏上され、宝辺正久先生が御製拝誦を行はれた。続いて、小田村寅二郎先生（本会理事長）の玉串奉奠と共に一同御霊に対し拝礼ののち、「海ゆかば」を全員で斉唱した。最後に昇神の儀が行はれ、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は終った。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

われらここ さねさし相模 丹沢の山脈に連なる大山の麓に集ひ第四十二回全国学生青年合宿教室を営みて中日の夜を
迎へぬ

今し天つ日は沈みて夕風そよぐ この合宿地のさやけき草原を 斎場ゆにばと定め きよめまつりて とこしへにみ国守りま
す 遠つみ相おたち また み国のために尊たきいのちを捧げましし あまたのはらからのみ霊たまを招おぎまつり なくさめま

つらむと み祭り 仕へまつらむとす

願れば過ぎし大御軍おほみいぐんの敗れし時に 米国の占領政策がもたらせし東京裁判史観によつて 日本の文化伝統の否定され
み国の行く末いよいよ険しく危ふき道を行かむとせしに ひとへに 昭和天皇 今上天皇の御聖徳に導かれ み国の生
命は守られて来ぬ

しかれども まことに口惜きしことに おぞましき自虐史観は マスコミを初めとして 教育界 官界 財界等全国
津々浦々にまではびこり 日本人の誇りと勇氣 心の豊かさは失はれ 日本の教育 外交 国防等に憂ふべき嘆かふべ
きこと打ち重なり み国を危ふき道に立たしむる様に 胸ふたがれ憂ひつきざる日々とはなれり

さはあれど四十二年の年をかさねしこの合宿教室に集ひて 諸々の講義に耳を傾け 天皇の大み歌 聖徳太子のみ言葉
を仰ぎ あるいは古典の言葉に学び ひたすらにみ国の守りを乞ひのみまつり 二百余りの老いも若きも もろ共に心
を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び、共に世に立つべき友となりなむと 朝夕につとめはげむさまをみそなは
し給へ

畏かれども いましみこと達のみたまの大き導きにより み国の行手を守らせ給へと この合宿教室参加者一同に代は
り謹み敬ひ恐みかしこ恐みかしこも白す

澤部 壽孫

明治天皇御製

薄

いづこをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

秋夕

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

子

かなし子に語りきかせよ國のため命すてにし親のいさをを

祝

しるべする人をうれしくみいでけりわが言の葉の道のゆくてに

蟲

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

神祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のでぶりわするなよゆめ

昭和天皇御製

終戦後の御製

身はいかにもなるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

和倉温泉

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

今上天皇御製

苗

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのはる

姿

うち續く田は豊なる緑にて實る稲穂の姿うれしき

講義 「日露戦争における天皇と国民」

国民文化研究会副理事長 小柳 陽太郎 先生



先生は冒頭、若き日のインドの詩人タゴールと明治の大思想家岡倉天心との出会いにふれられ、天心に啓発されたタゴールの「すべての民族は、その民族自身を世界に現す義務を持つ……民族は彼等の最上のものを提出しなければならない」といふ言葉を紹介された。そして日本における最上のものは何かと問はれ、それを皆さんにたどって欲しいといはれて、日露戦争の事にお話を進められた。

先生はまづ明治天皇紀等を紹介されながら日露戦争当時の国内外の情勢の緊迫や開戦に至る経緯、さらには明治天皇のご心痛や中枢の人々の苦心等をたどられ、開戦当日の一寒村の逸話も紹介されて、当時の国民全体が如何に緊張して日露戦争といふ国家存亡の一大事に向かったかを語られた。そして現代の教科書がわづか数行の無味乾燥な叙述を以て日露戦争を解説してゐる事を批判されて「ここには歴史の残骸しか載ってゐない」と断じられ、「歴史は事実に對する知的な理解では決して分からない、どのやうな雰囲気の中でどのやうな言葉が発せられたを受け止め、自分の心に響いてくるものがあって初めて歴史は分かる、さういふ歴史の感覚が忘れられてゐる」と訴へられた。

そして先生は明治天皇御製と山桜集の歌を一首一首読み味はってゆかれ、寝ても醒めても身を削る様にして国民をお思ひになる天皇のお姿、家や肉親を思ひつつも深く戦ひに向かった国民の姿を一つ一つ具体的にたどりながら、日露戦争当時の様子を偲んでゆかれた。特に山桜集の猿田只介さんの七首の歌を読まれて、万葉集の防人の歌に匹敵する歌と評され、「この七首の歌には父母や妻との別れ難さの情と国の為に身を捧げる喜びや決意が、一貫した心の流、非常に緊張した心の流れ

として見事に表現されてゐる」と語られた。そして数々の歌を紹介された後、「天皇と国民の間には対立も懐疑も不信もなかった。それが日本の歴史であり国柄である。タゴールのいふ民族の最上のもので、それは日本においては天皇と国民の君臣の間柄ではなかったか」と訴えられた。

最後に、先生は、岡倉天心の『生命は、つねに、自己への回帰のなかに存する』といふ言葉を紹介され、「現代は自己を見失つてゐる時代。自己を取り戻すべき時代。日露戦争当時の天皇と国民の結びつき、日本を守らんとする激しい思ひに統一された国民的感情の美しく花開いた時代を心の中に蘇らせて欲しい」と訴へられて講義を終へられた。

創作短歌全体批評

戸田建設(株)東京支店開発課長 青山直幸 先生



先生は、まづ、短歌の相互批評に当つては自らを高みに置くのではなく、謙虚に作者の気持ちに心を寄せていくことが大切であり、率直に感想を述べ、作者の思ひを正確な表現に添削する中で、共感共鳴の世界が生まれると、相互批評の意義を語られた。その後、各班から一首づつ取り上げられ、作者の姿を偲ばれながら、時にユーモアも交へつつ、丁寧に添削してゆかれた。先生は短歌を詠むにはそれに相応しい題材を選ぶべきと指摘され、また、題材は完成されたものである必要はなく、苦しみや悩みを打ちつけに述べることも大切であると話された。また、ムードに流された表現に対しては、自分の気持ちを正確に見つめることが重要であると語られた。最後に歌は大きな声で読み上げ、歌の調べを感じとつてほしいと締めくくられた。

全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。各班毎に班員一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿つた正確な表現を求めて皆

が心をくだいた。内心の思ひを十分に歌によみおほせた時、大きな感動が生まる。お互ひの心が通ひ合ふ充実した一時であった。

夜の集ひ

厳しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」の時間がやってきた。

最初に小田村寅二郎先生の音頭により、坂東一男氏（株アサヒビール飲料常務取締役）から今年も届けられたビールで乾杯した。応援団の力強い演舞に始まり、班別や大学別に楽しい出し物が続いた。母校の校歌を声高らかに歌うグループ、合宿中の出来事をユーモラスに演じた寸劇、「水師営の会見」の斉唱など、様々な趣向に興じ、時に場内は爆笑に包まれた。中でも母校の踊りに若い学生と共に熱演される先生方の姿に大きな拍手が沸いた。最後に、寶邊正久先生（社国民文化研究会・副理事長）より「神洲不滅」と「進めこの道」のご説明があり、国民文化研究会の会員のリードで全員が唱和し、宴が閉ぢられた。

合宿を顧みて

合宿運営委員長・日産自動車(株)勤務 内海勝彦氏



氏は、合宿初日からの講義の中で述べられた言葉を丁寧に通訳しながら、「その底流に流れてゐた共通のテーマは、小柳陽太郎先生が言はれた『自分自身に出会ふことがこの合宿の目的です』といふ言葉に収斂されるのではないでせうか」と述べられ、「この合宿で学んだことは、新しい物の見方ではなく、これまで覆ひ隠されてゐた本来あるべき日本人の生き方そのものではないでせうか。ここで得た喜びや感動を共に分かち合へる友人を、これからも大切にしてみらひたい」と力強く訴へられた。

参加者感想自由発表

続いて、参加者全員による感想自由発表の時間に移った。講義に関する感想では、「明治天皇の御製に初めて触れたが、国民のことを心配される明治天皇が、子供を思ふ母親のやうに感じられた」「さはやかな明治の精神が感じられ、みづみづしい歴史の息吹を蘇らせることの大切さを学んだ」と語る参加者。班別研修では、「特攻隊の方々の遺書に書かれてある『ありがたう』の言葉を班員皆で心を傾けて読んでいくうちに、心が一つになった」とその喜びを語る参加者もゐた。また短歌創作では「短歌は自分の心をさらけ出さなければならず、それができずに苦しんでゐたら、班長さんから『表現していくこ

とで自分自身が見えてくるよ」と言はれ、素直に詠めるやうになった」とその時の思ひを述べてくれた。さらに初めて慰霊祭を体験した参加者からは、「先生方は亡くなった方々を偲びつつ、自分たちはどう生きればよいのかをずっと考へながら慰霊祭を続けて来られてゐるんだなあと思つた」と語つてくれた。

閉会式

国歌斉唱の後、参加者を代表して早稲田大学政経学部二年の伊藤俊介君が「班別研修や全体感想発表を通して、真の友達を得るとはかういふことだったのかと実感することができた」と合宿に参加した喜びを語つた。引き続き主催者を代表し国民文化研究会副理事長の上村和男先生が、「我が国を取り巻く情勢は極めて厳しくなつてゐます。今後とも友を求めて互ひに励まし合ひながら日本を感じる学問を続けて戴きたいと願ひます」と挨拶された。「神洲不滅」「進めこのみち」を全員で唱和した後、東京大学文工一年の楠田大蔵君が閉会を宣言し、合宿教室全日程の幕が閉ぢられた。

助言者の紹介

拓殖大学 総長

元・尚綱学園 監事

日商岩井(株) ガス・石炭本部 副本部長

方栄産商(株) 石油部部长

新日本製鐵(株) プラント事業部

機械製造素材材部

日本アムウェイ(株) デイストリビューター

神奈川県立厚木南高等学校 教諭

(株)講談社 宣伝局次長兼宣伝企画部長

(株)竹中工務店 プラントエンジニアリング本部

部長 稲津利比古

東急建設(株) 東京支店 建築部 工務部 次長 奥富 修一

福岡県立嘉穂高等学校 教諭

中島法律事務所 弁護士

(社)国民文化研究会 事務局長

熊本市役所 企画調査局 情報企画部 情報企画課

折田 豊生

熊本県立第二高等学校 教諭

住友電気工業(株) 生産技術部 主幹

(株)中央塩ビ製作所 代表取締役会長

不動産鑑定士

元・日特金属工業(株) 常務取締役

小田村四郎

徳永 正巳

澤部 壽孫

柴田 悌輔

今林 賢郁

古川 修

山内 健生

磯貝 保博

市ヶ谷漢方クリニック 院長

元・法政大学 人事部長

舞岡八幡宮 宮司

元・福岡県立若松商業高等学校 校長

元・高千穂商科大学 教授

元・佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭

元サンデン交通(株) 取締役

航空自衛隊 航空教育隊 生徒隊 第一教育科

乃木神社 宮司

キューピー(株) 管理本部 プロジェクトリーダー

川崎重工業(株) 環境装置第二事業部 品質保証部

小田原市立足柄小学校 教頭

三菱重工業(株) 監査役室 室長

国立病院九州医療センター 臨床研究部長

神奈川県立 秦野曾屋高校 教諭

大成建設(株) 東京支店・作業所長

久留米大学附属高校 教諭

防衛庁 調達実施本部 東京支部 検査二課

検査官

亜細亜大学 総合企画部 広報課

(株)日本興業銀行 市場投資調査部 課長

福岡県立水産高校 教諭

羽後信用金庫 象潟支店 渉外係長

防衛施設庁 施設部 施設企画課

桑本 崇秀

香川 亮二

関 正臣

小林 国男

名越 荒之助

末次 祐司

加藤 善之

村上 寿彦

松吉 宣和

山本 茂夫

山本 博資

岩越 豊雄

島津 正数

小柳 左門

原川 猛雄

川井 泰彦

名和 長泰

鏡 信弘

平楨 明人

小柳志乃夫

菅原 亨二

須田 清文

山根 清

日産自動車(株) 人材開発部 人事教育グループ課長

(株)青森銀行 野辺地支店

奈良崎修二
斎藤 勝

防衛庁航空幕僚監部 防衛部 通信電子課

神谷 正一

(株)日立製作所 日立研究所 エネルギー第一部

松井 哲也

タマポリ(株) ラミネート営業部主任

吉川 理夫

出光興産(株) 人事部店主室

山田 幸治

学校法人 拓殖大学 秘書室

服部 朋秋

安信住宅販売(株) 新宿センター係長

松吉 基光

(株)新井組 千葉営業所

垣迫 太市

福岡県立春日高校 教諭

與島 誠央

神奈川県立津久井高校 教諭 (東洋信託銀行にて研修中)

大日方 学

船橋市立法典小学校 教諭

竹内 孝彦

(株)アキタ・アダマンド 通信機器部

真田 博之

福岡県 労働部 雇用保険課 収納係

古川 広治

日本青年協議会

清水久仁子

(株)東芝 製造システム 営業第一部

丹羽冬紀子

東急工建(株) (東急建設(株)情報システム部へ派遣)

茅野 輝章

日本青年協議会

松岡 篤志

日本青年協議会

大葉勢清英

アサヒ飲料(株) 首都圏支社 守谷支店

澤部 和道

星野有佳子

合宿運営本部 内海 勝彦・酒村聰一郎・北村 公一

指揮班 大日方 学・菅原 亨二・垣迫 太市

竹内 孝彦・茅野 輝章・澤部 和道

事務局 奥富 修一・関口 靖枝・蘇原 幸枝

亀井 正弘

慶応義塾湘南藤沢高等部二年 山口 蝶子

都立新宿高校 一年 伊佐 直子

放送・記録班 松吉 基光

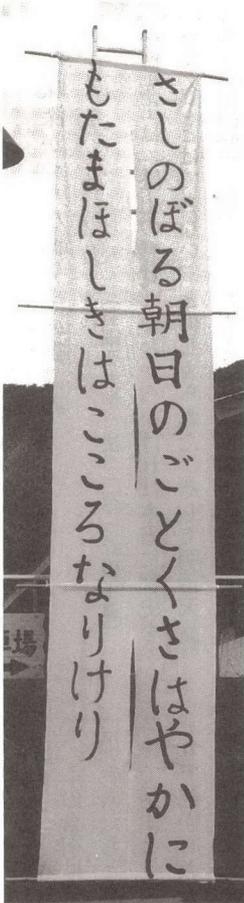
医務班 小柳 左門

写真班 拓殖大学 政経学部四年 小林 貴由

走り書きの

感想文集

（各班別に収録）



これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままに掲載してあります。
なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもです。

第一班—男子学生—

興味深かった小柳先生の御講義

(重細聖大学 法 二年 森田了導)

小柳先生は「歴史の感覚」がわからなければ本当に歴史を理解することはできない、と仰しやられた。そして明治天皇御製と日露戦争に従軍された方々の和歌がおさめられた歌集「山桜集」を示されたが、なぜ、和歌を「歴史の感覚」とむすびつけるのか、理解できなかった。

しかし、その後の班別研修において、素直な気持ちで読み直してみると、それらの和歌にあらわれている詠者の心に共感し納得することができた。和歌というものがすべて真実を詠じたものであることに気づかされた。そしてその詠者たちが生きた時代に国中にみなぎっていた空気が、すなわち「歴史の感覚」というものを感じることでできたような気がしたのである。

合宿を終へて

五日間ともに学びし御友らを我は生涯心に留めむ

合宿にて学びしことを糧としてたゆまずおのれを高めてゆきたし

一生の宝

(慶応義塾大学 商 一年 斎藤一佐)

以前から真面目な話をしたいという気持はありましたので、この合宿は楽しみにしていました。実際、日を追うごとに班の人たちと話ができるようになり、三日目の夜は朝の四時まで話すようになったのです。それだけではなく班の友人それぞれから教えられる毎日でした。一人で自論を温めておくくと独善的になりがちで、私の発言の断定的すぎる点を指摘して下さった山内君、興味を持っていない人に興味を持たせることについて語って下さった佐藤君、友人の死についての話で共感することのすばらしさを感じさせて下さった海津君、浦さんには熱意、森田さんには勉強量に驚かされました。四泊五日の合宿はあつという間であったというのが正直な思いです。班員の方々とお会いできたことは一生の宝です。

合宿にて始めて会ひし人々と語りふことこそ楽しかりけれ

みんなが心を開いてくれた

(早稲田大学 第二文 二年 浦 義勝)

「今年の合宿は何かが違う、何かが起こる」、そう信じ、実際にその空気をずっとはだで感じていた。今年は昨年の合宿以上の学生側の意識の高揚があったのではないかと思う。

三日目の夜、我々は夜を徹して語り合った。床についての朝の五時位であった。皆は本当に生き生きとしていた。真

剣に今の日本の事、そして今後我々は何が出来るかを語り合った。その夜の語らいには昼間の班別討論では、ほとんどものを言わない人までもが積極的の言葉を投げかけていた。とにかくその時の状態は文章では表しようがない。とにかく、とにかくうれしかった。僕の周りにいる人みんなが心を開いてくれたのだ。僕達六人は絶対、一生の友となれるだろう。

信ずればひとりを動かし貫けばいつかは思ひ万民に通ぜむ

「人の話を聞く」ということ

(日本大学 文理 二年 山内暁生)

「学問というものは知識をつめこむことが重要であるし、「自分はすごい勉強をした」「すごい知識をもっている」ということを誇りに思うことはいいことだと思ふ。

しかしだからといって学問にあまり興味がない人に対して、相手と自分を比べて、知識量が自分の方が多く、自分の方がよく勉強しているからといって、相手を見下したり、相手に対し心を閉ざしてしまうことはいけない。ましてや自分の考えをおしつけることは絶対にあつてはならない。

合宿中の班別研修の話し合いの中で相手の意見と自分の意見が違つても、相手の主張を聞いてみる、「人の話を聞く」ということの重要性を再確認できてよかった。

五日間あまたの事がありぬれと思ひ浮かぶは友らの笑顔

カメラ・レポート1



開会式。主催者を代表して、(社)国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「戦後の成り行きのままになって来た日本を、どのやうに正しい国に持ち直していくかといふ課題が、皆さんと我々の上に被さってきているのです。私たちもお手伝いはします。しかし、これから先の日本を背負っていくのは皆様方しかゐない。どうかさういふ意味で合宿教室に取り組んで頂きたい」と挨拶された。

今まであまりにも無関心すぎた

(福井工業大学 工 二年 海津貴史)

この合宿に参加するにあたり、正直言って最初は行きたくないという思いが強かったのですが、この五日間という有意義な日を過ごした今、何となく自分の中で何かが変わった気がしています。何が変わったのかはまだ自分では、はっきりとはしていません。政治や国家、戦争等について全くといっていい程、今まであまりにもそれらに対して無関心すぎたと思っています。

またこの合宿で何でも話し合える友人を得る事が出来たという事が何より良かったような気がします。自分は思っている事を口に出して言う事があまり得意でないので、班員が自分の意見も聞いてくれるので、自分も苦手なりにがんばって思っている事を表現してきました。本当にこの合宿に参加して良かったと心から思っています。

福工大我らの応援いさましき母校の伝統ここにありたり

歴史に対する意識が変わった

(拓殖大学 商 一年 佐藤和統)

私はいままで歴史書物を読んだ事はないし、学校の歴史の授業等、全く興味がない。この合宿の講義では歴史中心に話を進めている為、私には全く理解出来なかった。

しかし同じ班で歴史に詳しい人がたくさんいたから、そ

の人に教えてもらいながら話を聞いていたが、私にはどうしても歴史に興味を持つという事が出来なかった。三日目の夜だったか、皆で講義について討論していた時、むかしの出来事を今、現代に置き換えればいいんだという事に気づき、それからの合宿は有意義なものになった。

もちろん歴史について詳しい人がいなくてはならない。しかし、皆が皆歴史に興味を持たなくてもよいと思う。日本をよりよい国にしたいと思う心は誰しもある心で、その心が一番大切なのだと思う。私はこの合宿で得たものを決して忘れず、すこしでも私の様な人間に合宿で教えてもらった事を伝えていきたいと思う。

ふとしたるきつかけで我はかほりたり友にめぐまれしこの合宿にきて

第二班 男子学生

あまりにも物を知らなさすぎたと痛感

(東京経済大学 経営 二年 松村希一)

今回の参加のきっかけは、ささいなもので、とりあえずちよつとでも何か得られればという感じだった。しかし自分が思っていた以上のことを得られたと思う。講義にしても今までとは違う方面からの内容が多く、学校教科書、受験知識で止まっていた自分には、新鮮に思いつつ、あまりにも物を知らなさすぎたというのを痛感させられた。周りの人たちが

それぞれ色々な方面に興味を持っていて、真剣に物を考えている人に久しぶりに会った気がする。本当に感じたのは、自分は今まで何げなく過ごして来たんだなということだ。これからはまず少しでも気を入れ直して、学校の授業、サークルなど日々意識をもってやっていきたいと思う。本当にたくさんの先生、様々な人に会えてよかったと思う。

最後にこの合宿を紹介して下さった加納先生に感謝したいと思います。

久方にまめに語れし人々に会へしが時は早すぎるなり

遺書から両親への感謝の気持ちを感じた

(奈良大学 社会 二年 安納慎人)

直接、戦争を体験していない現代の学生(私を含め)は、あたかも他の国で起こった戦争の事のように、日本の戦争をとらえがちだ。この様な思想は戦後の情報操作によって作られた事であり、私達がその事に気づくには、現代の日本社会においては機会があまりにも少なすぎるように思う。

しかし、私は、合宿教室を通して、戦争中の人々の自分自身についての思想を遺書や和歌を通して感じ取れた様に思う。遺書からは、両親への感謝の気持ちを感じ、和歌からはその時代の人々の素直な気持ちを感じ取れた。実際に和歌も自分の手で創作したが、いつも飾りをつけがちな私にとって、感じた物事を感じたままに伝える事は困難であった。私は物事を自らの目で自らの問題としてとらえ、そうした上で、

カメラ・レポート2



「去年は私の話を班員の皆様が一生懸命聞いてくれましたが、今年は私が一生懸命に皆の言葉に耳を傾けたい」と参加者を代表して合宿の抱負を語る早稲田大学第二文学部二年・浦義勝君。

素直な気持ちを持ってたならば、再び日本人の心が取り戻せると思う。

わかれぎはに語りし友と握手して次回の縁に会ふを願ふも

自分の意見をもっている友の姿に自らを顧みた

(島根大学 理 三年 小西秀太郎)

最も印象に残っていることは、班員の方々をはじめ、みんな勉強しているということだった。いろいろな雑誌や新聞、知識人の書いた著書を読んで、日本やそれを取りまく諸国の政治、外交、思想などを勉強し、それに対する自分の意見を明確に持っている人が多かつたということだ。自分はそれらに対して、受け身的に物事を知ることだけだったように思う。これから社会に出る者として、自分の考えをはっきりさせて人々と議論していくことがいかに重要であるかを知った。

またこの合宿に参加して、自分と同じ大学生とだけでなく、世代を越えていろいろな人々と話げできたこともよかつた。全体的に、これだけ幅広い年齢層が同じ場所に集まって考えるという今回のような合宿は、自分としては初めての体験であり、自分が話を聞いていて思ったことを人に伝えることの意義を確認できたように思う。

休憩時班員とともに談笑し会話もはずみ気分さはやか

天皇と国民との信頼関係が非常に厚いことに驚いた

(重細亜大学 法 三年 西村敏記)

この四泊五日の合宿によって得たものは多い。その中でも大きいのは日本の武士道という日本精神を知ったことである。これまでに今の日本は何かおかしいと思っていたが、自分はどこか遠いところから見ている第三者としての視点であった。しかし、この合宿での各講義の先生方のお話を聞くにつれ、自分自身が三千年の歴史を持つ日本人であることを自覚した。また天皇と国民との間の信頼関係が非常に厚いことを知り、驚かされた。また慰霊祭も非常に神秘的であつた。祖国の為に散つた英霊の為に日本を再生させなくてはと思う。

先人の国の為にと散りけるを無駄にせじとぞ心に誓ふ

お国の為に魂を残してくださいと兵隊さんに応えたい

(拓殖大学 政経 一年 恩慈国典)

この合宿を通じて、私の心の中に、あらたなる素晴らしい先輩、友人、そして吉田松陰が引越してきました。この方を通じて、合宿前、全く詳しくなかった政治、日本文化、思想に興味が生まれ、また違う人生観を感じたと思う。

まさに、この講義は吉田松陰に教えられた、そのような複雑な気持ちがある。

日本国民は、天皇を神様とし、天皇と国民は、深い信頼感

に結ばれている。この関係は、非常にかたい絆で結ばれている。

お国のために、命を捨て、魂を残してくださいだった兵隊さんの方々に思いをいたし、さらに日本の事を勉強し、愛国心を深めたいと思う。

班員と日があつにつれてなごやかに気づいてみれば愛甲石田

日々忙しくて充実して過ごした

(慶応義塾大学 法 二年 萩原俊雄)

自分自身が参加した動機は、各種の講演が用意されている合宿なので得る所が大きいと期待したからです。

生活時間のスケジュールは十分に構成されていて、日々忙しく充実して過ごしました。政治を熱心に説く者も多く、彼らからもまた刺激を得ました。

朝に起き目覚めし時のつらさあれどセミ鳴く声が我を迎ふる

言葉を正確にすることは難しい

(福井工業大学 工 四年 増村博文)

個性の強い班員だったと感じている。その個性が諸先生の御講話をお聞きして、各々の感じた事を述べる。その意見は尊重され、又批評され、次第に自身でも驚く程洗練されてくる。古い時代から、人の出す言葉は、今の合宿の時と同じく、有志の者が集まり、聞き、話し、評していたものと感じた。吉田松陰はこの事を繰り返し繰り返し、死の際までも考え、



オリエンテーション。合宿運営委員長の日産自動車株勤務・内海勝彦氏が四泊五日の研修を過ごす上での心得を述べた。

又、楽しんでいた事であろう。

言葉で考えを的確に表わす事は可能なようだが、実際、言葉を正確にする事は至難であると合宿中に気が付く。この考えを正しく言葉にする為に苦しみ悩むのは何とも楽しい。自分の心を削り、その極細のエッセンスを取り出した時の喜び、感動は、他に類を見ないものであると思う。

中田先輩を思ふ

厚木より良き友達を得たる事病の兄に知らせんとす

第三班—男子学生—

学問の本当の喜びを知った

(立教大学 文 二年 上村隆倫)

心と心が通い合う空間がこの合宿教室にありました。初めての参加でしたが、こんなに初対面の班員と打ち解けられたのは意外でした。この合宿で一番重要だったのは、やはり班別研修でした。講義をして下さった先生の言わんとするところを考え、自分が心に感じたことを素直に表現し、かつ相手の言わんとするところを聞くという作業を通して初めて自己研鑽ができるんですよ。「彼はこんなことを思っていたのか」という新しい発見があり、心が熱くなり、班員一人一人との距離が縮まってくるのです。特に短歌創作は互いの心そして自分の心を理解できるものだ。言葉の一つ一つに心を配

るか配らないかは短歌の出来ですぐわかる。自分の心の中を見透かされてしまうのです。

この短歌創作、相互批評を通じて、明治天皇さまの心のかさ愛の深さが心に深く刻まれました。私は天皇陛下がおられるこの日本に生れたことに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は教育学を専攻しておりまして、将来は人を教育する仕事につき、この日本人であることのすばらしさを伝えていきたいと思っております。そのためにも、もっともっと研鑽に励まなければなりません。でも学問の本当の喜びを知ったのでプレッシャーよりも嬉しい気持ちでいっぱいです。

君臣の心を結ぶ歌の道学がしことに胸熱くなる

真心を通ひ合はせし友どちを得る喜びに勝るものなし

学生に真心こめて諭す師に出会へしことはありがたきかな

日の本に生まれしことの喜びを伝へてゆくが我が使命なり

“真の友”を得た

(拓殖大学 政経 二年 石沢興二)

色々な情報が飛び交いあふれている中、何が真実なのか何を信じれば良いのかを見定めることがとても難しくなっている。我々学生は学校で教わった知識がベースとなつて物事を判断しているが、もしその知識が真実ではないものであつたならば……。この様な不安を抱きながら、この合宿を知り参加させていただきました。

初めての参加だったので始めはとても不安でしたが、班の仲間が皆腹を割って話せる人であり、同じような不安を抱いていたりしてすぐにうち溶け合うことができた。時には激論になり、時には励まし合い、こういう付き合いができる人間を「真の友」と呼べるのだと思った。

講義や班別研修で、今後の勉強していく上での方向づけができた。自分の知識不足を反省して来年も合宿に参加したい。

歴史が体感できた

(中央大学 商 一年 八幡 雄)

今回この合宿に参加でき「本当の勉強」というものに出会えた気がします。僕は日本の歴史が好きで興味があり勉強してきました。しかし合宿の五日間をふり返って今までの勉強していたつもりだけだったと気が付きました。つまり、というのはただ教科書に出てくる重要用語をおぼえてそれをテストに役立てていただけということです。

講義の中で日露戦争に関する教科書をコピーしたレジュメがありました。中味といえはたったの七、八行だけのものであり、当時の国民の気持ちを汲みとることなど、到底出来ないと思いました。

合宿では歴史というものを勉強するのにビデオを見たり明治天皇様の御製を目にしたり、実際に戦争に行かれた方の貴重なお話を聞いたりして「学校で習った歴史とは何だったのか」と思わされました。



合宿導入講義。福岡県立筑紫丘高校教諭・酒村総一郎先生はマレーシアへの二年間の赴任の経験から、「現在の日本人は誇りを失ってをり、むしろアジアの人々に対して、後ろめたさへ感じてゐるのではないか。決して謝ることがお互ひの友情を深める事ではない。むしろ堂々と自分の考えを主張する事によって真の友情が芽生えていくのではないか」と語られた。

この合宿では一つ一つの勉強に「感動」することができました。ビデオを見て涙が出たり、短歌を読み心の底から力がわいてきたりしました。「歴史は体で感じるものだ」というのは今回の合宿のようなどころでないかと体験できなくなっています。この合宿を僕に紹介して下さった国文研の山口秀範さんに感謝いたします。

父と班の仲間へ感謝

(関東学院大学 法 二年 稲津利昭)

私は今回初めて国文研の合宿に参加して、自分の気持ちの変化に気付きました。私は最初この合宿に参加する意味が理解できず、一日目と二日目のころは何故こんな合宿に参加したんだろうなどと考えていました。

しかし班の人々と話し合うにつれて私の考えを自分のことのように聞いてくれる仲間に大変感動しました。今回の合宿で人に自分の意見を伝える大切さや人の意見を受け入れる大切さを知りました。本当に班の人達に感謝しています。これからもどの生活にもどってからも自分の考えを伝えることに努力していきたいと思います。また自分の知識を広げていく為にももっと様々なことを学んでいこうと思います。

最後に暖かく接してくれた仲間と共にこの合宿を勤めてくれた父に感謝したいと思います。

語り合ひ互ひに気持かよはせば久しく続く友となるらむ

民族の精神を感得

(九州大学 文 四年 井野口武志)

今回で合宿教室は三度目となりました。参加する度にこの合宿の心が通ひ合ふ雰囲気が一層ありがたく感じられてくる、本当にしみじみとしたい班でした。

講義では小柳陽太郎先生のお話が心に残りました。「オウヤツカ」「ハイヤリマシタ」との間髪入れぬやりとりにより、明治といふ時代の張りつめた空気、生気あふるる民族の精神がはつきりと迫ってくるやうに思へました。

昨日の夜の集ひでは宝辺先生が「神州不滅」こそ昭和の民族精神を高らかにうたひあげた歌であると言はれました。全員で歌ふと何か胸の内より熱いものがこみ上げて参りました。腹の底から力が湧いてきました。

歴史教科書は歴史の残骸であるといはれましたが今私達のなすべきは歴史を私たちの手で歌ひあげていくことであると思ひました。私自身が防人となつて生きねばと思ひます。

戦争は好きで始めたのではない

(福井工業大学 工 三年 久保博之)

自分は今回の参加で二度目となります。戦中の様々な人々の心、考えに触れる御講話をお聞きし、再び自分は戦争中の人々に対し、失礼な考えを持っていたなと感じました。又御講話の中に再三出て参りました『情報』は数々あるがそのなか

「正しい情報を選びなさい」というお言葉がございました。今回の合宿で一番強く思い、感じた事はこのお言葉でした。マスコミ各社の間違った報道・論説により「戦争はただ悪」と思いこんでいた自分は、二度の合宿により戦争は好きで始めるのではなく、国どうしの外交交渉のこじれが武力行使につながった事と、そしてそれぞれの正義を掛けて戦いが起きた事、更に日本は、自国の為だけでなくアジア各国の自由を求め、大東亜戦争を戦いぬいたのだと知りました。そしてその為に命を御国に捧げられた先人達の心の強さを感じました。

この場を紹介して下さった中田先輩に心から感謝申し上げます。

霧晴れて向かふの景色見えだしぬただ今是我前すがし

同信の友と語りて五日間忘れられなき思ひ出となる

本当の心の豊かさとは

(北陸大学 法 三年 長田昇大)

今回初めてこの国文研の合宿に参加してわかったことが一つありました。

それは僕の考え方の基本に相手に共感したり、自分の気持ちを表現するという様な自然の感情を否定する強い働きがあるということなのです。

短歌創作の時間に、僕も歌を詠んだのですが、散策の時に感じた開放感を表現しようとしてもうまく出来ず、焦れば焦



合宿の一日は「朝のつどひ」から始まる。七沢の清々しい朝の空気を胸一杯に吸ってラジオ体操。

るほど、自然な感情から遠い作爲的な歌になつてしまうので
す。

大変悩みながらも、班員のみなどと一緒に夜遅くまで短歌
批評をすることで、表現することの楽しさ、美しいしらべを
感じる心の豊かさというものが大切なのだと思います。

最後にこの僕の三班のみんなは大変すばらしい人達ばかり
であつたことを嬉しく思います。

第四班 男子学生

戦後失われたものを求めて

(島根大学 理 三年 新宮 一)

昨年参加したとき、この合宿は、戦後世代の学生青年と戦
前の世代の人達との距離を縮めようというところから始まっ
たと聞いた。これまで、戦後の日本人は何か変わつてしま
たと聞かされてきたが、今回の合宿には、戦後、私達が失っ
てしまった何かを取り戻したいという思いで参加した。

私は、長内先生のお話の中で、父母を大切にすることが何
事においても根本だということを、御製を交えて教えていた
だき、襟を正される思いがした。班付の折田先生から、父母
に対するそのような姿勢が武士道なのだと言われたとき、私
は、武士道というものを実感するとともに、戦後失われたも
のが自分の中に蘇つたような気がした。そして、長内先生の

姿を思い返して、戦前の美しいものを本当に強い思いで伝え
ようとされているのだと感じた。三日目の夜、慰霊祭の後の
懇談で、班長の本多さんが、国文研の先生方は共に戦つた友
を毎年お祭りしているんだ、と言われたときにも、ハッと気
づかされたものがあつた。

小柳陽太郎先生は、明治天皇と国民との結びつきや明治の
精神について話されたが、明治の精神を失つてしまつた今の
日本の状況を本当に憂えておられるように感じ、明治の精神
というものに、あらためて興味を覚えた。

私は、大学に、先輩方の息吹きをぜひとも伝え、広めてい
きたいと思つた。

慰霊祭にて

戦友をおまつりされし大人達の思ひと我は一つになれり

合宿の経験をベストに生かしたい

(酪農学園大学 酪農 四年 南 邦彦)

この合宿に参加した事が良かったかどうかは、自分次第で
ある。四泊五日過ごした日々をベストにすることも出来るし、
反対の事もありうる。私は、合宿での経験を生かし、参加し
たことがベストだと思える様、今後、行動していきたい。

私は、祖父、祖母を昨年亡くした。もし生きているならば、
北海道に帰つてすぐに戦時中の事を聞いただろう。それが今
は出来ない。祖父、祖母を大切にすることも。

しかし、私には両親がいる。祖父、祖母を思う様に、両親

に接していききたいと思う。

厚木にて学びし事を語りむと祖父母の墓を訪ね行きたし

人生を変えるような合宿だった

(拓殖大学 外国語 一年 産方弘二)

今回始めて、この合宿に参加させていただいたのですが、私にとって、これからの人生を変えるような、すばらしい合宿でした。また、今まで知らなかった事実を教えていただくとともに、先生方のさまざまな思いに胸うたれ、今までの自分に恥を感じる思いです。

そして、過去を振り返りつつ、これからの日本や世界のあり方を考え、今の若者達が、歴史を守り、歴史をつくっていくかなければならないと思います。

最後に、小田村寅二郎先生をはじめ、国文研のみなさん、合宿に参加されたみなさん、ありがとうございました。

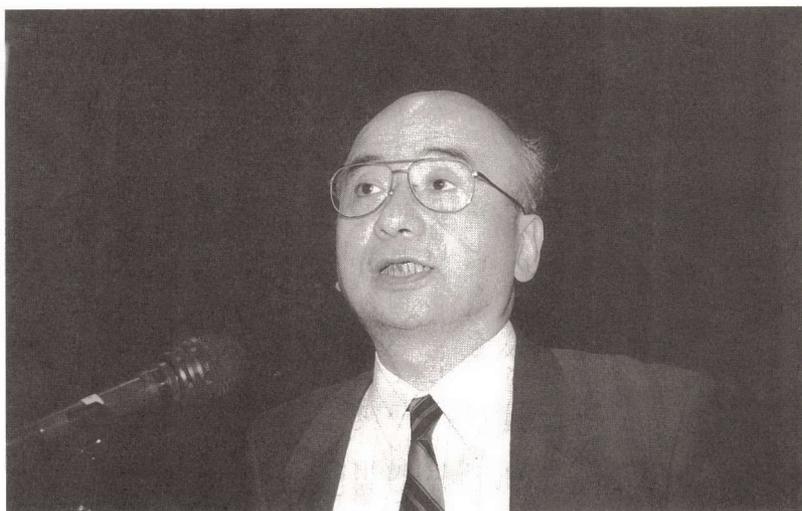
先人の思ひを偲びて

我が胸にしみわたりゆくこの思ひ胸にきざみて生きてゆきたし

真実の歴史を教えられた

(東北栄養専門学校 二年 金野拓見)

今回、この合宿に初めて参加させて頂き、先生方の御講義を通して得た事は、今まで経験してきた事とは比較にならない程、私にとっては新鮮であり、今後の人生に大きな影響を与えるものに相違ありません。特に、西尾先生の御講義で、



二日目の午前、評論家・電気通信大学教授・西尾幹二先生による「不服従の思想」と題する御講義が行なはれ、先生は「『五箇条の御誓文』に見られるやうに、民主主義の精神は何も戦後アメリカに教はったのではない。正義がすべて西欧側にあり、日本が邪悪を全部背負ひ込むといふばかなことはない」と訴へられた。

日本を敵国から守る為に命をかけて戦いぬいたと話された先人の精神は、正に武士道の流れを受け継ぐものだったのではないのでしょうか。

戦後世代の私共に、先人の勇姿や誇り、真実の歴史を教え下さいまして、本当にありがとうございます。

今回の合宿で学んだ真実は学校で教へぬ歴史なりけり

日本を考えることが日本を救うことにつながる

(明治大学 文 二年 秋元俊洋)

第一日目の導入講義から考えさせられることが多い合宿でした。西尾幹二さんは「正論」や「諸君」などでよく知っている人でしたが、生の声で講義をお聞きして、受ける印象がちがうなと感じました。また、講義の内容を班別研修などで話し合う中で、皆がいろいろな考えを持ち、いろいろなことを知っていることに気づかされるとともに、さまざまなことを教えられ、私にとって非常に貴重な体験となりました。

若い人々の政治離れや無関心が問題にされていますが、頭のいい悪いではなく、一生懸命日本のことを考えることが大切で、少しでもこのようなことに目を向け、関心を持つことが、今の日本を救うことにつながるのではないかと思います。

合宿は講義多くてつらかりしも終りてみればさみしさありけり

実感ある喜びの共有

(長崎大学 教育 四年 本多康弘)

今回の合宿で感じたことは「実感ある喜びの共有」ということでした。特に慰霊祭と小柳先生のご講義の中でそのことを強く実感しました。厳粛に慰霊祭をとり行われる国文研の先生方のお姿を拝見しながら、毎年この慰霊祭において戦友の方々にご自身の決意を誓ってこられたのだと思い、そのご姿勢を本当に尊く感じるとともに、戦友の方々とは一体となって生きておられる姿に感動しました。

また、小柳先生のご講義をお聴きして、日露戦争という国家危急のときの明治天皇と国民、また、国民どうしのあたたかく真摯なつながり合いを感じました。先生は、我々の世代が戦後教育の中で「美しいものを美しいと感じる心」を失なっている指摘なさいましたが、本当に美しいものを美しいと感じ、そのことを共有できる喜びを共に味わうことができる同志が同胞とよばれるのだと実感しました。

第五班—男子学生—

僕自身の中にも日本人の血潮がある

(島根大学 教育 三年 三島 明)

アメリカの言っていること、やっていることをおかしいと

思わないのか、君たち頼むよ、しっかりとやってくれよ、日本の言葉を取り戻そう、という西尾氏の願いが胸に迫って来ました。また、「自分達の戦争」ということを言われました。ビデオや御講義の中に登場された、家族への愛と祖国への忠己が任務への使命という矛盾の中で強く逞しく生きられた方々や国文研の先生方の戦友を偲ぶ御姿に思いを寄せる時、あの戦争を含め、日本の歴史自体を、過去の遠いものでなく、僕自身の信ずる、自分とは切っても切れないものだと感じました。そして、長内先生や竹本先生の言われた様に、僕自身の中にも武士道精神、日本人の血潮があるのだと思うと、喜びと同時に一体感を感じました。

全体感想発表の折に

こみ上げる思ひのことばにならずともいざと手を挙げ胸内述べき

今まで経験したことのない満足感があつた

(奈良大学 社会 二年 赤山幸満)

私はこの全国学生青年合宿教室にこれといって強い意志で来たわけではありませんでした。というのもこの合宿に参加したのが友人の父親からのすすめで、まさに安易な気持ちでした。ふだんごくありふれた大学生活を送っていて、自分自身その生活に何の疑問もおぼえず、ただ馴れあいの日々に満足していた所があった。けれどもこの合宿はそういう生活に活を入れるものであり、とりあえず、日頃使つてなかつた頭をフル回転して頭の痛い場面の連続でした。しかし、そうい

カメラ・レポート7



御講義の後、各班室に入られて、学生の質問に丁寧に応へられる西尾先生。

う私も日を追うごとに班員との関係がいつしか班友となり、そこにはちゃんと自分の場所があり、今まで経験したことのない満足感があった。これをきっかけに私はこの合宿を忘れることなく、また新たな生活を送ってみようと思った。

研修の経験いかさむ明日からはおのが心に変化ありせば

まず足元を見つめて

(鹿児島大学 農 四年 織地孝幸)

僕は今まで祖国を思うとはどういうことかと悩んでいました。しかし今回、講義中に「何もそう難しく考える必要はない。まず親や友達を大切にすればよい。」と聞いた時、ハッとさせられました。僕は本当に親や友達を大切にしているんだろうか、と。口では国だ、国だと良いことを言っているけど、そこが出来ていなければ駄目なんだ、何にもならないんだと思いました。

僕にとって国とは、結局自分の住んでいる町であり、学校であり、親であり、今日の前にいる人達なんだと思いました。まず足元を見つめてもう一度、一から始めようと思えました。班友の皆様、班付の先生方、どうもありがとうございます。

道

両親や友どちのこと大切に大切に生きて進んでゆかむ

学ぶきっかけを得ることができた

(日本大学 芸術 三年 結束一成)

私は、平和・人権・正義に基づくいわゆる戦後民主主義の日本に大きな疑問を抱き続けてきた。そしてそれらに対し、「日本の心」を説いて反論を試みようと思ったが、適当な表現や言葉が見つからず、断念せざるを得ず、悔しい思いをしてきた。しかし、今回のこの合宿に参加して、「日本の心」について学ぶきっかけを得ることができた。なぜきっかけと書いたかという点、今までの教育の影響からか、素直に頭に入ることがなかったからだ。また、自分なりにまとめることができずにこの五日間、起きてる時は、ずっと何かしら考えていたため、気の休まる時間がなかった。非常に辛かった。最終日になり、ようやく自分の心に平静を取り戻しつつあるので、この合宿で得た情報を再考し、理解し、後世に伝えていける様になりたい。

国思ふ友らの声に目覚まる眠りつづけし大和魂

先生方の姿に感動した

(近畿大学 理工 一年 藤山武志)

僕が今回の合宿に参加した一番大きな理由は、西尾幹二先生が講義に来られるということでした。僕は西尾先生の大ファンで、先生の本を読むとそのすさまじい知識量に驚くのはもちろんのことですが、なんととも言えない情の深さが伝

わってきます。そして僕はこの合宿で、西尾先生の国を思う気持ちに勝るとも劣らない先生方のお話を聞くことができました。非常にすばらしい先生方であるにもかかわらず、自分を高みに置かず、僕たちに語りかけてくださるその姿にも感動しました。

今日本は立ち直りつつあると思います。先生方もおっしゃってこられた様に、日本人の中に流れる民族の血は脈々と受け継がれており、それがいわゆる進歩的な考えや活動にやられてしまうはずがない、と思うからです。

今回の合宿では、短歌のすばらしさにもふれることができ、非常に有意義な五日間を過ごせ、感謝しています。

居眠りしてすばらしき御講義聞きもらすを今にして思へばくやしかりしも

来年も合宿に来てほしい

(東京大学 工 四年 松岡 勲)

僕はどうしても心で勉強するというのが苦手です。先生方の御講義も、つじつまが合い、筋が通っているかということを考えてしまいます。この合宿に対する僕のどこか冷めた姿勢も感受性がたりないからかもしれません。四回目の参加にもかかわらず、この合宿に参加することは七月末まで迷ってました。心で勉強するのが苦手であるからといって、悩むのはみっともないですから、あまり深く考えない様にしていきますが、班員たちには本当に申し訳なかつたと思います。僕は合宿の良さを伝えることができないので、とにかく来年も合



真剣な眼差しで御講義に聞き入る参加者。

宿に来てもらう様にすることが自分の役目だと思いました。また、痛切に感じたことは人の話を聞く集中力に欠けているということでした。

この班でまだまだ合宿続けたし四泊五日のできごと思へば

慰霊祭、短歌、友人との出会いが心に残った

(福井工業大学 工 二年 林 貴幸)

この合宿教室で色々な体験をしました。その中でも心に残る事は、慰霊祭と短歌そして友人が出来た事です。五班の中では僕が一番年齢が下なのに、まるつきりタメ口(注・対等の話し方)をしてくれて、古くからの友人である様な気さえます。またこの合宿に来る機会があるか分らないけれど、この四泊五日の出来事を大切にしたいと思います。

刻々と閉会式の近づきてうれしくもありさみしくもあり

第六班 男子学生

人生で大切なことがわかった

(福井工業大学 工 一年 鈴木慎二)

最初、この合宿の意味を全然知らず、初日、二日目は、先生の御講話をお聞きしてもさっぱりわかりませんでした。しかし、班別研修で班員の意見や感想を聞き、わからない点を質問することにより、三日目からは、先生方の言わんとす

るところがなんとなく理解でき、自分の意見を持てるようになりました。

自分は、この合宿でたくさんのことを学び、考えました。そして、これから人生を生きていく上で大切なことがわかったと思います。それは、自分のビジョンをしっかりと持ち、目標を立てることで感謝の気持ちを忘れないことです。

国思ふ心と人を恋ふる心ともに似たりと我は思ひぬ

有意義な時間を過ごせた

(日本大学 文理 三年 阿部友則)

私は、講義の中で話されていたようなことは、今までほとんど考えたことがありませんでした。そのため、講義を理解できないことも多々ありました。そのような時でも、班別研修で友達から助言をもらい、完全といかないまでも、自分の考えを述べる事ができたと思います。とても有意義な時間を過ごすことができました。

現在の日本はとても複雑で自分自身を見失いがちですが、自分を見つめ直すいい機会にもなったと思います。講義でのお話や班別研修でのことを活かし、これから自分で、これらの日本、過去の日本、そして自分自身のことを考えていくべきだと感じるようになりました。

このような貴重な体験に感謝したいと思います。

さまざまに他人の思ひの違へども我が行く道は一つなりけり

合宿に参加して自分は変わった

(東京大学 教養 二年 加藤邦夫)

この合宿に参加して自分は何か変わったと思います。自分を考え直すことができた。諸先生方の御講義を聞き、また、班のメンバーといろいろ議論して、自分は今まであまり考えてこなかったのではないかと感じた。班のメンバーは、日本について深く勉強しており、自分なりにいろいろ考えているようで、私は多くの点で触発されました。

この合宿で得られたことをいかして、これからいろいろ考えていって自分自身を求めていきたいと思っています。

すばらしい班のみんなと出会えて幸せでした。

心から友と語りし五日間のあつといふ間に過ぎ去りにけり

わづかにも五日なりけり旧くより知りたるやうな班友らと出会ひて

ゆるがぬ信を持ちたい

(早稲田大学 政経 七年 田中裕二)

大学二年生のとき以来、この合宿には今度で五回目の参加となる。ここで教へられたことと言へば、祖国日本への信を気付かせていただいた、その一点につきるのである。神洲不滅の一節にあるやうに我が国は皇神の見はるかす国、たとへ目に見える姿がどんなに見えやうとも、皇祖天照大神様はいつもこの日本国を見護っていらっしやるのである。

特攻隊に出撃された方の顔は、にっこりと晴れやかであら



二日目の午後、「吉田松陰『講孟余話』」と題して、神奈川県立平塚江南高校校長・国武忠彦先生による、古典輪読講義が行はれた。先生は松陰の年譜を丁寧ながら御講義をされ、「二十四歳の青年が、国家の危機に敏感に反応し、昼夜となく自分の問題として心を痛めてゐる。国といふものを自分と直結して考へてあることを皆さんに感じてほしい」と述べられた。

れた。はた目には苛酷な環境の中にた、かはれ、しかも、環境に打ち克つて信を貫かれた方々であられた。私も英霊に恥ぢざるゆるがぬ信を持って「情況」にあたりたいと思ふ。

また、明治天皇の御製から、天皇陛下がすべての国民を我が子のやうに見ていらつしやるのだなと思はれ、自分も天皇陛下のみ心を体し、本当にみともらを慈しみ愛することができやうになりたい。

もろともに陛下の赤子兄弟とみ友らを思ふ我となりたし

共に偲ぶといふ素晴らしい空間

(九州大学 法 二年 星原大輔)

今回の合宿で印象に残つたのは、ビデオ「天翔ける青春」観賞の後の班別研修だった。ビデオの中で「今の日本になくなくなったのではないでせうか。」と語られる英霊の遺書の中の「ありがたう」の一言について、班員みんなで偲んでいった。みんなと共に偲ぶといふ空間が非常に素晴らしいものを感じられた。翌日の小柳先生の講義でも、明治天皇の御製や「山櫻集」の和歌について共に偲び、感じたことを述べあった。四日前に初めて出會つた人たちと御製や和歌を通じて共感できる、偲ぶことができるといふことが心に残つた。

自分の感動を信じ、周りの人たちの心の奥に眠つてゐる日本人の精神、心を信じて、これからも研鑽にはげんでいきたいと思ふ。

全體感想發表にて

「ありがたう」と共に過ごしし班員に思ひを込めて語る友はも

五日間共に思ひをかたらしし友の姿を忘れざらめや

班員の心が一つに結ばれた

(東京工科大学 工 四年 石澤 寛)

合宿の中で私が一番心に深く感じ入りましたことは、班別研修で特攻隊の方々の遺書について考え合つた時でした。何を思つて「ありがたう」と書かれたのか。このことについて、最初、班の皆でそれぞれが真剣に先人のお気持ちに迫つて行きました。すると、私には不思議な事が感じられました。それは、この皆で真剣に考え合つている沈黙した空間の中で、班員同志の心が一つに結ばれていくのを感じたのです。お互い何の言葉も発していないのに、言葉を使つていない無言のうちにお互いの心を共有しているということを感じ、その様な中にいることがたまたまなく嬉しい気持ちになりました。

この合宿で、心が結ばれるという意味、又、特攻隊の方々から学んだ「生命の尊さ」について、本当に深く感じ入ることが出来ました。

み友らに拙き歌を直さるる相互批評の気恥づかしくも

日本らしい日本に

(明星大学 人文 四年 高橋幹人)

私達の意志は固まった。国のあるべき姿、個人のあるべき

姿、歴史とは何たるべきか。戦後五十年過ぎても米国の洗脳計画に今だにかかっている人達。そして欧米的な生活にあらがれ、あらゆる社会的問題を引き起こす日本。今こそ日本国民立ち上がり、日本らしい日本にし、世界のために和を広げていくべきなのだ。

そのためには、国民一人一人、現在の日本の社会状況をふまえて変えるべき点をひとつひとつ確認していき、日本の御魂を磨くがごとく未来の素晴らしい社会のために進もう。ここにいた同志を忘れず勇ましく生きよう。

日本を思ひ愛でんや樹々の根の地にはるごとく思ひ定めて

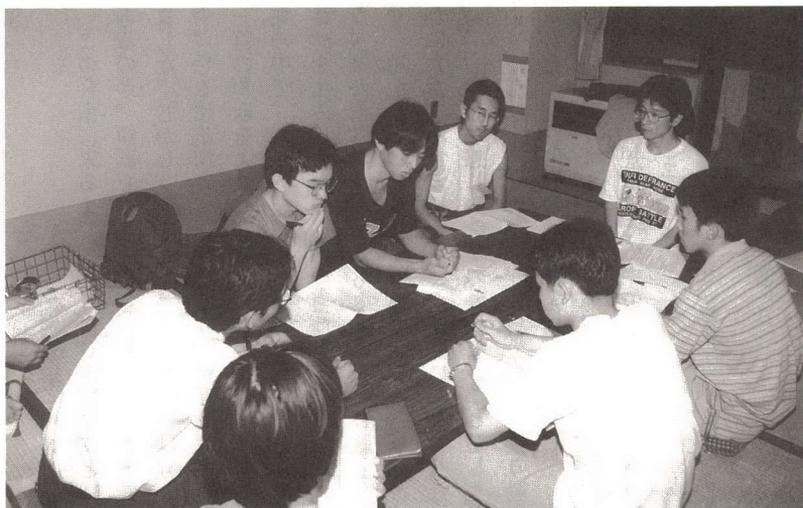
第七班—男子学生—

自分を見つめ直した合宿

(亜細亜大学 経済 一年 前原隆三)

この合宿で一番心に残ったことは、短歌の班別相互批評のときに、短歌が抽象的で具体性がなく、理屈っぽいと言われたことです。短歌は自分の感じていることがそのまま出るもので、私は、すべてのことを抽象的に捉え、理屈や頭の中だけでは物事を考えることができない自分を知りました。

講義の中で、物事を心で捉えなければならぬとか、日本人の心を知ることが大切だなどと「頭」で分かった気でしたが、本当の意味で理解ができていなかったことを短歌を實際



講義の後は各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら感想や疑問を語り合ふ。

に作ってみて初めて気付ききました。短歌創作など意味がない
と思っていた自分にとって、班列相互批評はとても新鮮でし
た。そして、短歌を多く詠み学ぶことが、今の自分にとって
とても重要なものだと感じ、それが日本人の純粹な心になる
具体的な事だと思いました。

非常に疲れたけれど、それ以上に感じる人が多い合宿で
した。

先輩が語ることは耳聞き我になきと身にしみるかも

班員との生活が楽しかった

（福井工業大学 工 一年 東山敏之）

この合宿の事を知ったのは応援団の先輩からだだった。何も
知らぬまま、特に日本の歴史に興味があったわけではなかつ
たが厚木まで来た。班員は皆気さくな人達だった。班での討
論は話ごとだえずに、予定時間を超えるほどだった。交わさ
れる話はためになったし、口べたの私の話を皆熱心に聞いて
くれた。ただ、最近の生活習慣から、六時三十分起床はつら
かった。眠い目をこすりながらの講義室移動の日もあった。
日が経つにつれて来年も来ようなんて気が出てきた。この
五日間は、大学の三カ月から半年の価値はあっただろう。

写真機に写りし顔をのぞいては翌年に来る時の顔かな

短歌によって心が通じ合った

（早稲田大学 政経 二年 伊藤俊介）

この合宿に来るまで、自分自身本当に友と呼べる友人がで
きるのか、短歌を創って楽しいのだろうかと疑問に思ってい
ました。しかし、何事もやってみなければ分からないもので
す。恐る恐る初めて短歌を創り、相互批評で班員皆で真剣に
一首の短歌をより良いものにしてゆこうと努力する。この作
業の中で、人の心をお互いに知ろうとし合う姿勢が班員に一
体感を生み、心が通い合う喜びを感じました。と同時に適切
な言葉が湧き出てこないもどかしさも体験しました。頭ばか
りを働かせるのではなく、強く念ずる、思うということがい
かに大変であり大切なことが身にしました。目に見えな
い、心でしか感じることでできないことがしっかり存在して
いて、しかも、それがいかに自分自身を揺り動かすものであ
るかを、短歌創作の過程で発見しました。

この合宿ではさまざまな場面でこのようなことがたくさん
ありました。短歌は其中でも皆に共通に身近に感じられた
ものだと思います。

たのむぞの我が師の言葉胸にしみ道ゆくのみと身の引きしまる

人の心の温かさを感じた

（金沢大学 工 三年 濱田豊富）

僕は正直に言うともものすごく不安でした。でも、一日二日

とたつうちに、班の人や国文研の人達の心の温かさ、誠実に心を揺り動かされました。そして、日本人であることへの誇りを感じました。特に班別短歌相互批評は良かったです。楽しさ、悩み、感動を偲びあう、まさにそのことに飲びを感じるということを初めて知り、それだけでも来た甲斐があったと思います。

さらに、合宿中はクーラーもあり、食事も美味しく講義に集中することができました。この合宿に誘ってくださった坂東さんや国文研の方々には感謝の気持ちで一杯です。

合宿で清き心を教へられ受けた感動伝へに戻らむ

心を寄せ、耳を傾けることに専念した

(日本大学 通信教育 四年 石井信博)

開会の挨拶で小田村寅二郎先生が、また、西尾幹二先生がご講義の中で、「私の言っている言葉がきちんと届いているだろうか」とおっしゃったことが非常に印象的でした。また、このお言葉が合宿中ずっと私自身の心の中にあつたような気がしました。

今回、私は班長をつとめさせていただきました。班員と接している中でいろいろ考えさせられることもありました。ご講義を受けて班別討論を行う。皆感動しているのが伝わって来ました。しかしながらなかなか感動が言葉にならずに苦しんでいる様子も分かりました。言葉にならず苦しくて、頭の中で抽象的、概括的にとらえ、それを言葉として発してしま



ビデオ「天翔る青春」を観賞した後、長内俊平先生の講話が行はれた。先生は「今のビデオを観た後では、沈黙して皆で英霊たちを偲びたい」と語り始められた。「自然、人生の不可思議は心で感ずるしかない」「心の問題は頭で考へてもわからない。国に危難の足音が高まれば、諸君の血潮の中に刻まれてゐる祖国の生命、祖先の祈りが甦へるものです」と訴へられた。

う。

私自身も思い返してみれば、合宿初参加のときは天皇陛下のお姿にふれてもなかなか感動が言葉にならず苦しんでいました。ですから今回は班長として班の仲間たちが「いったい何を伝えようとしているのか」ということに徹底して心を寄せ、耳を傾けることに専念しました。短歌相互批評の時間に、班の仲間のある一人が「自分は今まで常に抽象的に概括的に物事をとらえていたことが分かりました。何とか自分の感動を言葉にしてゆきたい」と言ってくれたことが非常に心に残りました。

み友らの語るる言葉やうやうといきいきするはうれしかりけり

「本物の友」ができた

（福岡教育大学 教育 一年 井上裕介）

ここに来ての第一印象は、話していることが堅くて難しいということでした。でも、皆心から話しているのだなあと思いました。そして、今まで習って来た歴史とは全く正反対の歴史というのがなんとなく分かったような気がしてきました。

また、四泊五日という短い期間で本当の友ができたような気がします。そしてその友が自分の意見を本気で聞き、自分の短歌をどういう心で詠んだのか本気で考えてくれました。自分も友が何を言っているのかと考えました。そうしてできた友は「本物の友」といえる友だと思いました。

短い期間で普通の大学にはない講義を聴いて、今までいなかった本当の友人ができたことに心から感謝しています。何をと言われたらはずきりとは言えないけれども、本当に大切な勉強をしたと思います。

全体感想自由発表にて

班長が何度も手を挙げる時も指してもらえず我は聞きたし

短歌のすばらしさをしみじみ実感した

（佐賀大学 理工 三年 和田晃次）

この合宿で最も印象にのこったのは、短歌相互批評でした。ある班員は親が家で自分を待つていてくれているのでは、と親の気持ちに思いをはせていった。短歌を詠み恥ずかしいと言いながらもすがすがしい晴れた顔をしていた。また、ある班員は、分裂し何が言いたいのか分からないような歌を詠んでいたが、ほとんど原型をとどめなくなったが、本当に自分が感じていたことを詠みきった。

和歌ができたとき、もつとも自分の感情を顔に出しながら生き生きとしていた。皆が和歌の奥深い世界、喜びを実感し、理屈でなく心がつながった世界にのめり込んで行つた瞬間だったと思った。皆、本当によかったという喜びをかみしめた顔をしていた。班員一人一人の最良の自分らしさを引き出してくれたのが短歌であつたと思う。短歌のすばらしさをしみじみ実感した合宿となりました。

短歌相互批評のをりに

抽象にしか考へてをらぬ自己に気づき晴れ晴れとせし友の姿うれしき

第八班―男子学生―

班別短歌相互批評にて

(立命館大学 経営 一年 北条 忍)

僕の印象に残っているのは、四日目の班別短歌相互批評です。結局終わったのは午前二時位になりました。しかも午前零時位から僕の短歌のためだけに、みんな眠いのには頑張ってくれたのです。それに、徹夜してもいいとまで言ってくれました。また、濱田さんや別府さんが参加者による全体感想自由発表の時、その事に触れてくれたのがまたうれしかったです。驚いたことは、全然知らない他人どうしが、四、五日でこれほどまでにうちとけられたことです。

今はみなさんとはなれるのがとてもさみしいです。

真夜中の短歌相互批評会にて

友の愛体全身受け止めて心全部が熱くなりけり

物事の本質を捉える努力をして行きたい

(富山大学 理 二年 塩谷芳正)

自分がこの合宿に来る時は非常に不安でした。全く勉強不足であった自分はこの集りが右がかった物なのではないか、よくわからない話が続くのではないかと思ったりもしまし



三日目の午前、「騎士道と日本」と題する文芸美術評論家・筑波大学名誉教授・竹本忠雄先生の御講義。先生は「西欧の騎士道に比べて日本の武士道が長く続いたのは、天皇の御存在を通して神々と人々の絆が保たれて来たからだ。武士道は永遠に蘇り続ける。日本が真の意味で世界に貢献出来る日を願って、お互ひ頑張って生きようではありませんか」と訴へかけられた。

た。しかし実際にはそのような事は全くなく偏っていたのは自分の方だったと思ひ知らされました。まるで両目で物を見ていたつもりが実は半分閉じた片目で見ていたというように。しかし、今回の合宿で片目が開く、もしくは開く準備ができたのではないかと思ひます。これからは確たる意志を持ち、両目で物を見るごとく物事の本質を捉える努力をして行きたい。

最後に自らの勉強不足による拙い意識にも憤る事なく、物事の本質へとつながる道を示してくださった班員の方々に深く感謝したいと思います。

洗面所で傷口より流れる血を見て思ふ

流れ出る血を見て思ふ^{せんじん}先人の国を守りし熱き血潮を

同じ血を持ちたる先人の心ばへ我も持ちたしと切に願はむ

和歌を詠むことのすばらしさ

(東京法律専門学校 三年 濱田和彦)

私は今年の合宿教室で三回目の参加となります。一年生の時から三年連続の参加ですが、毎回参加する毎に気づかされる事が数多くあります。今回も新たな発見の連続でした。特に今回の合宿では和歌を詠むことのすばらしさと、御製を学ぶことよって、明治天皇を始めとする天皇陛下の大御心を知ることが出来たことが何よりの収穫でした。前回までの合宿教室では私は、新たな知識を得ることが出来たということとを主眼に置いて参加していましたが、今回の合宿教室では

短歌相互批評の時にやったように、先ず自分を捨てて相手の立場に立つて物事を考える思いやりの心を持つことの大切さを学びました。また、「後に続く者を信じて」亡くなられた特攻隊の方々の思いを偲ぶことが出来たのは大変良かったです。今回で学生としての参加は最後となりますが今後社会人になっても出来る限り参加したいと思ひます。

明治天皇の御製を拝誦して

子を思ふ親のごとくに国民をいつくしみたまふ大御心よ

竹本先生の御講義を聞きて

日の本は天皇のみませば滅びずと語られし言の葉胸にせまりぬ

合宿最終日

五日間心開きて語り来し友とのしばしの別れを惜しむ

日本民族にある最上のもの

(早稲田大学 第二文 一年 松下文彦)

今回、この合宿に初めて参加させて頂きました。五日目をむかえ考えさせられていることは「民族は彼らの中にある最上のものを提出しなければなりません。」と言うタゴールの言葉です。私自身、世界に示すべく日本民族の最上のものとは何かと考えると、天皇陛下のご存在と特攻隊で亡くなられた方の精神だと思ひます。特攻隊の方は誰も恨まず、自分の死を以てして祖国を救い再建のために命を捧げられました。こういった精神を最も持たれている方はやはり天皇陛下だと思ひます。明治天皇の御製を拝誦しますと、天皇が国民を思

われる慈悲深さ、天皇と国民の一体感を感じました。こういった君民一体の国柄、無私の精神と言った日本最上のものを時代の風潮を理由に封じ込めていいのかもしれない。今まで、「国のため国のため」と頭の中だけで考えているむきが自分にはあったと思います。長内先生が言われたように頭の中だけで考えていては抽象的・観念的になってしまいます。しかし、日本文化に触れることで日本民族の最上のものが見えてきたと思います。

「天翔る青春」で特攻隊の方の遺書を拝読して

今日の日の本あるは国のため命捧げし御霊あればこそ

小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して

我が国の誇りとなるは天皇の無私に国民思ふことなり

国のいのちを感じることに

(福岡県労働部雇用保険課 古川広治 31歳)

例年になくテーマのしぼられた合宿の内容であったと思ふ。先輩方がよく「国のいのちを感じる」と言はれるが、どういふことなのかわからなかった。講義や諸先生方のお話を聞いて、それがわかるやうになるためのヒントをいただきたいやうに思ふ。志のある学問や生き方をして行きたいと思ふ。班長をさせていただいたが、今回も力不足であった。班友や班付の方々に助けていただき感謝してゐる。

ありがとうございました。

合宿最終日の朝の集ひにて



御講義の後、各班を回られた竹本先生。

のほりゆく日の丸の旗仰ぎつつ悔ひなき一日をすこさむと思ふ

歴史は美しい

(福岡教育大学 小学社会 三年 別府正智)

長内先生が心で感じたことをすべて明瞭に頭言葉で表わさず、大事にしなさいと言われた言葉が合宿を受けるにあつたの姿勢となつた。小柳先生のご講義において、歴史は感覚であり美しいものであると言われた時、正直ピンとこなかつた。そのわからないということ世代間のギャップだという頭言葉で切り離そうとしていた。しかし、その想いをそのまま素直に受けとめ、御講義を聴いていく内に、歴史は美しいものであると実感した。明治天皇の御製であり、国民の御歌である。その精神、明治の精神の現われ出たるところに美しさを感じ、事実ではなく、感覚が歴史の中にあると言われた。小柳先生は日本民族最上のもは君民関係であると言われた。私は連綿と続く天皇の姿、心だと思っていたが、そこに相伴う国民があるところに、日本民族の最上なる貴さがあることがわかつた。古典輪読においての、山川草木、国民、天皇、みな一つの生命の分けへだてであるとの言葉が蘇えつてきた。この感動を共有する友をより多く作り出すことが小田村寅二郎先生の言われたる救国の道につながると思う。この救国への道を行んでいくことの喜びと誇りと使命をしっかりと胸に刻みつつ頑張っていきたい。

己を知ること

(防衛大学 人文社会 二年 清水洋平)

私にとって今回の合宿で得られた一番の意義は、「己を知ることが出来た点である。班別研修において、自分自身の意見をなかなか表しきれない自分に大変もどかしさを覚えたが、なぜこうした状況に陥ってしまったのかと考えた。つまり、自分自身というものが一体どういったものであるのかについての理解が欠如しているのである。そういった理解の欠如を補完してくれたものが今回の合宿の諸講義であり、班員との討論であつたと思う。

小柳先生のお話に出てきた、岡倉天心の「生命は常に自己への回帰の中に存在する」この言葉を胸に刻み、これから私自身が果たすべき使命を完遂していかなければと強く感じる合宿であつた。

慰霊祭にて思ふ

亡き祖父の御姿胸に抱いだければ奥より力こみ上げて来ぬ

いかにても吾が責務をば果さむと祖父の御魂に誓ひしわれは

長内先生のお言葉に救われた

(大阪外国語大学 外国語 三年 原川貴郎)

長内先生のご講義で「心で感じるべき問題を頭で考えても堂々めぐりで、しまいにはノイローゼになってしまうから、どうか自分は本当に国の大事に命をかけることができるのだろうか、ということに悩まないでくれよ」とおっしゃって、僕自身、非常に救われたというか、気持ちが楽になった感じがしました。まさに僕は心の問題を頭で考えていて、よく悩むことがありましたが、これからはあまり悩まずに、ひたすらに日本再建に邁進していけることと思います。

最後の感想自由発表を聞くなかで、発表している人がうらやましく思えました。僕自身この合宿で色々な体験や勉強をさせてもらいましたが、感極って泣くほどまでに感動したわけではなかったからです。自分自身の聴く姿勢に問題があったのではないかと思います。

次回参加の折には今回の反省を生かして、より実りある合宿生活を送りたいと思いました。

長内先生のご講義を思ひ出しながら

「悩むな」と我らに語らるる先生の優しきお心ありがたきかな



三日目の午後、短歌創作の前の「短歌創作導入講義」に於いて、山口県立下松高校教諭・寶邊矢太郎先生は、短歌創作の意義、作り方の基本などを具体例を挙げながら判りやすく説明された。

自分は日本人だと再認識した

(富士大学 人文 四年 山田浩司)

自分は、この国文研の合宿には初参加でほとんど初めて聞くことばかりでした。自分の班の残りの人達は、日々勉強されている方々ばかりで、無知の自分にとても分かりやすく説明して頂き、誠に有難く思っております。

この合宿に参加した事により、自分は日本人だということ再認識させられ、日本人とはどうあるべきか、日本の将来また過去について自分達若者が考えねばならないと思いました。

合宿を過ごす間に日本に生まれし喜び次第に感じぬ

先生方の息吹きにふれることが出来た

(九州大学 経 二年 石井英俊)

合宿に来て何よりも良かったと思うのは、国文研の先生方の息吹きに直かにふれることが出来たことです。小田村先生が開会の御挨拶で、「この国を救うことができるのは、みなさんしかいないんです」とおっしゃられた言葉がとても心に残って、小田村先生が自分達にかけられている願いというものを本当に受けとめていける自分でありたいなあと思いました。又、『天翔る青春』の後、長内先生が講話のはじめに「本当は一時間ぐらい、亡くなられた方々を偲ぶ時間になりたい」と言われた姿に、本当に当時の方々はどれ程の思いをこめて

戦われたのだろうと偲ばれてきました。

神州不滅を歌ひて

心より「祖国日本」と歌ひ上ぐれば同志らと二つになる心地しぬ

友らと熱く語った

(拓殖大学 政経 一年 鹿志村 裕)

真の討論の場を求めて参加したこの合宿も、もう最終日をむかえました。この合宿で得たものは多くあり、日本人であるという事の尊さ、和の心の強さを知りました。各講義で語られた先生方のお話は身にしみることばかりでした。そしてその後の班別研修で友らと熱く語ったことは忘れなれないと思います。

四日目の「夜の集ひ」の時、疲れもピークに達し、寝不足もあって、今まではりつめていた糸がアルコールの力で切れてしまい、国文研のみなさまを始め、班の方々には多大な迷惑をかけてしまい、申し訳ありませんでした。

夜もすがらかなしくもなく蟬しぐれ我らの別れ惜しむばかりに

自分を、自国をあたたかい目で見たい

(明星大学 人文 二年 小林春輝)

今回、初めて国文研合宿に参加しましたが、四泊五日という短い間にとても充実した時間を過ごせたと思います。しかし、「本当の自分自身に出会う」ということは、この合宿でもできなかったように思えます。私は自身をかなり冷ややか

な目で見ています。ゆえに何かにつけて強い感動を与えられるということがあまりありません。すばらしい先生方の生き方には敬意の念を抱いています。国文研で出会った友人のように熱くなく、和歌にも「心」の躍動が現れません。そのような自分が情なく、つらく感じています。来年も参加したいと思っていますので、それまでに自分をあたたかい目で見、自国をもっとあたたかい目で見られるようになりたい、そして、日本の熱血漢として留学生と交流し、日本精神を伝えていきたいと思っています。

明治帝の民への思ひを詠まれたる御歌をよめばありがたきかな

“この道”を進みたい

(株)日本興業銀行 小柳志乃夫 43歳

伊佐裕さんの体験発表の中で、志を立てると生き方に中心線が生まれる、といふお話がありました。その中心線がふらついてあると思はしめられました。日々多忙の職場生活の中でやらねばならぬことのみ多く、何を求めて生きてゐるのか、それを問ひ直すことなく時を過ごしてをりました。宝辺先生が仰言った、余計な修飾語を要しない“神の開きしこの道”といふ簡明で素直な道を進むべく、ゼロに戻ってスタートしたいと思ひます。

内海運営委員長「合宿を願ひて」を聞き

合宿運営に心くだきし我が友が語る言葉に力こもれる

一語一語確かむること心こめ君若さらに語りゆきます



食事も各班毎に食卓を囲む。おいしい料理をいただきながら、話も弾む。

我ら今「同信の友」を得たりしと語る言葉の力強しも

第十班—男子学生—

歴史を背負い受継いでいくことが必要だ

（帝京大学 法 二年 横畑雄基）

もともと、問題意識は持つており、多くの勉強会にも参加してきたが、今回のように「心で分かる」事がなかったような気がする。多くのいわゆる保守系の学習会では精神の大切さを訴えているが、やはり、戦後生まれの我々としては、戦前戦中を生きてこられた先生方のお話を自分の事として感じ取る事をしなければいけないのではないかと思いました。ことに左翼勢力が増えてきた国内で、我々のような中道派が、「右翼」になってしまふこの祖国を今後どのように守っていくのか。やはり、「歴史を背負い受け継いでいく事」が必要であると感じた。心から話せる友、こういった仲間をもっと増やし、我が國を普通の國にもどしていきたいと思う。

合宿を終へるにあたり

御國知り喜び覚えし松陰の想ひ味はひ得しこの研修で

深夜まで心より話せし班友有りて別れの惜しく離れ難かり

出逢ひあれば別れがあると知りつつも班員とすごし日々は忘れじ

日本人としての誇りを取り戻すことができた

（東京大学 文工 二年 楠田大蔵）

決して積極的な理由から参加した合宿ではなかった。実際どんな活動をするのかも全く知らなかった。だが純粹な気持ちで接しようという心掛けはあった。開会式での小田村先生のお言葉は多少びつくりした。私の最近の生活では聞きなれない救国といふ言葉を使つてをられたからだ。今では失礼な臆測をしたりもした。だが、先生方の御講義を聞き、班別討論をするにつれて、そういふ気持ちは薄れて行つた。何故なら誰も思想的なものを押し付けたりするのでなく、やさしいお言葉で、心から語りかけて下さるからだ。当然話の筋も通つてをり十分になるほど納得させて下さつた。僕は嬉しかつた。子供の頃親から聞いていた日本人としての誇りを私は忘れつつあったのに、それをしっかりと私自身に取り戻すことができた思いがしたからだ。

明治天皇の御製をよみて

國民を案じてやまぬ御心は子を思はるるはほごころかも

初めて心で感じられるようになった

（法政大学 経済 三年 土生直樹）

今回で三回目、初めて分かつた事がありました。それは心で理解するという事です。毎回、真心で語り合う事、人の心を汲み取ろうとする心の大切さを学べと言われてきたが、今

回、長内先生の御講義と短歌創作で、やっとそのニュアンスが分かった気がしました。短歌の自分の一言一句が、頭から出た言葉か、心の受け取った感動を表わしているか、ようやく少し判断がつくようになり、班友の心も分かってきたような気がしました。歴史においても頭で理屈をつけるのは簡単で心でその時代を汲み取ることは難かしく、一番大切なものである事が分りました。今まで、知識と心を別々に考えていたが、知識と心が繋がりが、歴史を学んだような気がします。

合宿最後の夜を迎へて

遅くまで語らふ友の心より出づる言葉を胸に刻みぬ

武士道の正義も慈悲もありければ慈悲の心を我忘れめや

壇上でおのが心を素直まっすぐに友らの語るは嬉しかりけり

合宿の終はりにのぞみて班友ともちとまた云ふ契りを結ぶは嬉し

長内先生の御講義をお聞きして

友らへと語りかけらるる御言葉の心せまりて言葉失ひぬ

友どちに誠を尽せと語らるる師の御言葉の胸にせまりく

友どちに誠を尽して国難に立ち上がり得る人となりたし

血の通った生きた歴史を学んだ

(学習院大学 文 一年 濱田英毅)

私がこの合宿に来た理由は、現在大学で史学科に在籍しており、専攻も、今盛んに論議が湧き起っている日本近現代史で興味を持ったことと、学会を占める大部分の反対意見に抗して戦われている先生方のご意見を聞きたかったからです。



レクリエーションでは県立七沢森林公園の「おほやま広場」まで歩きました。

酒村先生、西尾先生始め先生方の御講義は、私の知識欲を満たしただけでなく、血の通った生きた歴史を学んだ気が致しました。今までの私は知識を得るのみで、人間を忘れていました。明治天皇の御製を拝誦し、特攻隊の遺書を読むことで自分の中に文章では表わせない色々な感情が湧き昇ったのでした。

もし、この合宿に來なかつたらと思うと、ぞっとします。自分を救つてくれたこの合宿に感謝します。

有意義なる国文研合宿も終はり近くなりて

合宿の最終日となり寢食を共にせし友との別れぞつらき

素晴らしき先生居らるる合宿の終るを厭ふは我独りやは

心で感じ取ることができた

(早稲田大学 商 六年 青木雅弘)

長内先生が「知るといふことは頭ではなく心で感じ取ることなのだ」とおっしゃっていた言葉が一番印象に残っています。私も国や日本文化を自分の問題としてどうとらえるかを合宿の目標としていました。従軍慰安婦や尖閣諸島の問題を本で読んで賛同していても、自分は流行思想に乗っているだけではないか。これでは一昔前の左翼活動家と同じではないかと考えていました。合宿でも各講師の問いかけを全て自分の問題として消化できたかどうか自信がありません。ただ、「天翔る青春」のビデオを見た時には、涙が頬を流れ落ちました。その時だけは、長内先生の教えを体感でき、国を思ふ

気持ちを理屈でなく、心から自分の問題として消化できたと確信しています。

夜の集ひの出し物にて

新たなる友と初めて歌ひける出陣賦の声夜に響きけり

肩を組み汗を交へて我々は皆旧友のごとくなりけり

広やかな世界に連なつた

(株)日立製作所 松井哲也 三十九歳

四日目、小柳陽太郎先生の御講義での明治天皇の御製や山桜集の歌にふれ、また短歌相互批評で一人一人の歌を皆で直し合つていく中で、まだ自分の中に閉ぢこもつてゐた班員の心が、皆の方へと広がつてゆくのが感じられた。そのとき、伏目がちだったまなざしがすつと前を向き、背筋もおのづから伸びてゐた。孤我に執着する心が広やかな世界に連なつたのだと思はれた。いい合宿になったと思へた。言葉あるいは言葉の力と、人の心の不可思議をあらためて思はされた。

班別短歌相互批評

伏せ目がちの友のまなざし真直にて背筋も伸びて皆と真向ひぬ

くぐもれる思ひいつしか晴れたるか友の顔かんばせ輝くこと見ゆ

まっすぐに我を見つめる友もありて我的心も正さるる思ひす

言葉の奇しき力かみ友らの心いつしか晴れわたりたる

第十一班—女子学生—

相手を思いやる気持ちを感じた

(武蔵野音楽大学 器楽 二年 小林祐子)

班長をさせて頂いたことで、本当に様々な事を感じることが出来ました。初めは、戸惑うことばかりで、第一日の班別研修では、どの様にしたら、班員の皆に、意見や思ったことを述べてもらえるのか分からず、自然に涙が出てきてしまいました。この様な頼りない班長で、四泊五日を過ごしているのかと思うと、益々自信が失くなりました。しかし、この様な私を、班の皆や、班付の先生が優しく見守って下さり、温かな雰囲気の中で、話し合いが進められる様になりました。私は、友達の思いやりの心によって、班長の仕事をする事が出来ました。班員の一人一人から、相手を思いやる気持ちを感じました。細やかな心遣いの出来る友と同じ班で、楽しく過ごす事が出来たことを、有難く思っています。

静かなるしじまの中ゆ浮かびくる心に迫りし友らの言の葉

新しい自分を発見できた

(東北女子大学 家政 二年 新松美代子)

合宿の意味も知らぬままに厚木まで来て、正直言えば、三日目ぐらいいまでもとても憂鬱な気分だった。班別研修では、自



「みはらしの丘」でのスナップ・ショット。

分の意見をはっきり言えない自分に、苛立ちさえ感じ、この繰返して合宿が終ってしまうのではないかと不安で一杯だった。しかし、四日目の班別短歌相互批評の時間は違った。一番内容の濃い時間であった。もつとこんな表現にした方がいいのではないか、私はこんな印象を受けるからこんな言葉で表す、などと班員みんなが自分の意見を心から言い合うことができた。友達の短歌を一所懸命になって考えている、今まではなかった自分に気がついた。この自分を発見できたということは、私自身にとつて、とても大きな収穫となったと思う。素晴らしい友達、先生と出逢い、語り過ぎた時間を大切にしたいと思う。

七沢の 蝸ひぐらし 告げる別れかな友との語らひ永遠とほにころろに
新たなる我を見つけし我が面おもては自信に満ちて太陽のこと

自分わたしに託たくされた願ねがいに応こたえたい

(福岡教育大学 教育 二年 龍 雅子)

合宿二日目のビデオ上映「天翔る青春」の中に出てくる、ある特攻隊の方の「後に続くものを信じてぶつかっているのです」と書かれた遺書の中の言葉が非常に胸に迫ってきました。この時に、ふと浮かんだのが、国文研の先生方の御姿でした。家族や友人、恋人そして日本を思い、断ち難き思いを断ち、戦われていった仲間の思いに今もなお応え続けようと思える思いを、講義の中で語られる御姿に感じさせていただけました。次は、私達がその思いを引きつがなければならな

いのだと深く感じました。私達に思いを託されようと懸命に語られる姿に接し、私はその先生方の思いに伝えてゆきたいと思いました。私の中には、毎日私達国民を思われお祭をされる天皇陛下、先人の方々、英霊様、国文研の先生方、父、母、友人など多くの方々の願いがたくさんつまっています。尊さを失うことなく本当の日本人の清き心が自分の中にあります。「民族は彼等の中にある最上のものを提出しなければならぬ」とのタゴールの言葉を小柳先生のご講義で学びました。自分の中にある最上のものとは正に自分自身の感動だと思えます。この感動を自分の中に温め、言葉にしていこうと、自分の使命であるし、自分に託された願ねがいに応こたえることだと思えます。

最終日になりて

み友らと思ひのたけを語りゆけば時の過ぐるを忘れけるかな

胸内に宿るまごころ温めて語りてゆかむ己が言葉を

英霊の願ねがひし思ひ受けつぎて応へてゆかむ若き我らは

合宿前の自分わたしとは違ちがう

(九州大学 農 一年 志賀慈子)

この合宿に参加して一番良かったと思うことは、相手の話を聞いた上で自分の意見を述べることが出来たということでした。私は、今迄人の話を聞けばばかりで終っていたので、自分の意見を持つということがあまり有りませんでした。しかし、ここでは、先生の御講義を聞き、友達と話し合い、共に

理解を深めていくことができました。色々な先生方の御講義や班でのお話の中で、沢山のことを学びましたが、その中でも最も印象的だったのが、長内先生の「講義の全てが解るわけではない。その中の一つを心に止めて、ずっと温めていけば、いつか、ふっと解る日がやって来る」というお言葉でした。この言葉のおかげで、その後の講義での話を聞く姿勢が変わりました。この合宿で学んだことはとても言い尽くすことはできませんが、合宿前の自分と違うことは明らかです。これから家に帰っても、この合宿のことを思い出し、更に理解を深めていきたいと思っています。

七沢の山に抱かれ夏は過ぐ友と学びし時間とともに

いかに言葉を知らないか実感した

(愛知学泉大学 経営 一年 星野 望)

この合宿に参加して、講義で聞いたことは、私にとつて、新鮮なものでした。講義の内容は、私には難しく、ほとんど理解できませんでしたが、少しは得るものがあったと思います。又、班別研修で、私の全く気付かなかったことを、他の人たちから気付かされ、とても楽しく、勉強になりました。自分の気持ちを、言葉に表わすことができないとき、自分の表現力のなさ、いかに言葉を知らないか、ということを実感しました。短歌相互批評のときに、自分の拙い歌を、皆がきちんとした歌にしてくれて、とてもうれしく思いました。又、歌をつくった人と同じ気持ちになって、歌を考えることは、



「慰霊祭」。戦時・平時を問はず、祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の御魂を心静かにお慰めた。

とても楽しいことでした。

気がつけば別れのときも近づき、友らの顔を忘れじと思ふ

短歌の相互批評は楽しかった

(宮崎大学 教育 二年 高尾泰子)

ゆとりのない生活を送りながらも、大学では大勢の友だちと知り合い、彼ら一人一人が、誰ひとり同じ様な生き方は、していないなど、解った様な口を聞いて、傍観者的に眺めていました。自分が考えていることの、深いところまでを話せる友人は、彼らの中でも、本当に少数になってしまっています。合宿で出会える友人の様に、国のこと等を話し合い続けられる友人に、他の場所に出会うことは難しいことです。この合宿では、相手の話を聴き、相手の気持ちを解ろうとする、人同士が理解するために必要な基本的なものがあります。短歌相互批評のときには、「こうしたらもつとこの気持ちが出せるかも」「ああこれはこういう場面なのね」と、皆で言い合いました。在り来りの会話なのですが、その時が、本当に楽しかったです。

つらかりしことはあれども学べよと師の励ましの有難きかな
師となれど幾年経ても学ぶべきことはつきずと笑み語られり

第十二班—女子学生—

この合宿で数々の美しいダイヤモンドを見れた

(東京大学 文 四年 山口花子)

班別研修の折、長内先生の「ダイヤモンドの鑑定士は本物と偽物のダイヤモンドを見分けるために本物だけを幾つも幾つも見ると、美しいものだけを沢山見ると、自然と偽物を見抜き、真実が見えてくるんだよ」というお言葉が一番印象に残っています。国文研の合宿にはいつも本物のダイヤモンドが一杯詰まっていると思います。

今年も先生方の素晴らしい御講義、国のために命を捧げられた先人の遺書、歴代天皇の御製、旧友や班員のまごころなど、数々の美しいダイヤモンドを見ることができました。これからも学び続けることで真実を見ることが出来る日本人になりたいと思います。

また、とても一所懸命に合宿に取組んでくれる班員に恵まれ、特に短歌相互批評ではお互いの気持ちを思い、共に考える楽しい時間を過ごすことができました。穏やかな目で暖かく見守って下さった班付の稲津さん、貴重なお話をさせて頂いた先生方、ありがとうございました。そして二人の妹と一緒に参加できたことを父に心から感謝します。

七沢に集ひし友らとまごころを持ちて語りし四泊五日

歴史を正しく学ぶ大切さを教わった

(麗澤大学 外国語 三年 田中美智代)

今回の合宿に参加することになった切っ掛けは大学の先生
の紹介です。合宿の内容が正に私の学びたいことと一致して
いたので参加を決めました。

四泊五日の合宿を通して、日本の歴史を正しく学び直すこ
との大切さをしみじみと感じました。日常生活に戻っても合
宿で学んだことを心に止め、更に紹介して頂いた書籍を読ん
で正しい知識を身につけたいと思います。そして一人でも多
くの人に歴史の真実を知ってほしいと思います。

班員の優しき心に支へられ気負はず過ごせし四泊五日

「侵略」と言う前に、祖先の心を偲ぼう

(亜細亜大学 法 二年 斎藤百合香)

今年で合宿参加二回目になります。そのため班別研修のや
り方や進行の仕方が分かっていたので安心してセミナーに臨
めました。今年語り合う班員の顔振れはどのような人達なの
だろうと、参加前から心がわくわくしていました。そして去
年と同様に今年も自分の考えをしつかりと持ち、本心を打ち
開けられる友と交流を持つことができとても嬉しかったです。

竹本先生の御講義では騎士道と武士道を比較しながら日本
の独自性、特殊性を述べて下さいました。また、小柳先生は



四日目の午前、国民文化研究会副理事長・小柳陽太郎先生は「すべての民族は、その民族
自身を世界に現す義務を持つ……民族は彼等の最上のものを提出しなければならない」とい
ふインドの詩人タゴールの言葉を紹介され「天皇と国民の間には対立も懐疑も不信もなかつ
た。それが日本の歴史であり国柄である。タゴールのいふ民族の最上のもの、それは日本に
おいては天皇と国民の君臣の間柄ではなかったか」訴へられた。

明治天皇御製と戦時中の兵士の和歌を紹介して下さいました。この和歌にも武士道にも共通して慈悲の心が底流に流れています。和歌を詠み味わうことで詠み手のその時の心情がどのようなであったかを想像することができました。これは和歌の素晴らしさで、この合宿で私達も和歌を詠み、班員の心情を味わい得たのだと思います。

「太平洋戦争は侵略戦争だった」という考えが現在支配的です。私も二年前までは正にそのように考えていました。でも本当にそうなのだろうかと疑問を持つ切っ掛けになったのは去年の合宿セミナーでした。相手国が酷い被害を被ったこと（という情報）に対して、「私達が反省・謝罪をしなければならぬ侵略戦争だったのだ」と主張する方々がそう思う根底には相手を思いやる慈悲の心が存在しています。その行動の結果がその方々を売国奴にさせますが、その方々が売国奴だとは思いません。ただ、相手国の人々の方に慈悲の心が傾き過ぎていると思います。そうであるならば傾むいている時点で、その感情は本当の慈悲の心だとは言えないのかもしれない。相手国を思いやるのと同じく戦争を闘ってこられた先人の心情へ思いを馳せることが大切だと思います。そうではなく一面的な情報を信じ込むあまり、結果的に「侵略」戦争の言葉が出てくるのだと思います。

戦中の兵士の詠みし和歌にふれ清水のごとき御心感ず

真実の歴史は人物を学ぶことだと実感した

（佐賀大学 教 二年 橋本さつき）

加納先生が紹介して下さいました「日本人は水と安全はただだと思つてゐるが、もう一つただだと思つてゐるのは日本人であることだ」といふ石川好よしみさんの言葉にはとさせられました。酒村先生の講義の中でノンチック氏の詩に「かつて日本人は清らかで美しかった。かつて日本人は親切でこころ豊かだった」とあります。また、ポール・クロードルが「私がその滅亡するのをどうしても欲しない一つの民族がある。それは日本人だ」とも。だが「かつて」の日本人であつて今の私たちではない。日本で生まれ育つたから日本人だとは言へない。

竹本忠雄先生は御講義で「何か大事なものを失ってきたんだ」と強く仰言いました。大事なものは何か。私はそれは「真実の歴史」だと思ひます。「教科書で習ふ歴史は歴史ではない。歴史とは感覚的なものである」との小柳先生のお言葉のやうに心の琴線に響く歴史こそ本物だと思ひます。長内先生が「ダイヤモンドの鑑定士になるには本物のダイヤをずっと見つけばいいことによつて本物を見分けることができず。色んなダイヤの中から本物だけを選びとることはできない。美しいもの、本物に沢山触れることで正しく判断できる目が養はれるんだ」と仰言いました。真の日本人になるためには、日本の素晴らしいもの、美しいものに触れる、つまり

真実の歴史に触れることだと思ひます。真実の歴史は歴史上の人物にあり、どういふ思ひで使命を感じてをられたのかに思ひを馳せる学問することだと思ひます。

最後に、小田村先生をはじめとする国文研の先生方が私たちを信頼し、期待して下さい下さって本当に有難く思ひます。私は日本人として先づ何をなすべきかを考へて大学の学生にも語りかけて行きたいと思ひます。

小柳先生の御講義を聞きて

「歴史とは感覚的なもの」とお言葉は今も鮮やかに耳に残れり

この合宿で大切なことを沢山学べた

(東北女子大学 家政 二年 松田英理子)

私にとって今回が初めての合宿参加だったので、参加する前はとても不安で気が重かったのですが、今合宿を終えてみると、とても大切なことを沢山学べた五日間だったなと思つていきます。また、普段あまり触れることのない「和歌」についても学ぶことができて良かったです。

先人が出征時に詠まれた和歌に大変感動致しました。そしてこの合宿で諸先生はじめ班員の方々と出会えたことが大変嬉しく思ひます。そしてこの合宿で学んだことを家族・友人・子供達に伝えて行きたいと思ひます。

すばらしき班員ともと過ごせし合宿の得難き体験わが宝もの



「夜のつどひ」では有志班、大学、地区別に思ひ思ひの出し物が披露された。合宿教室の最後の一夜、心の通ひ会った友等と楽しむつろぎの一時。

考えを言葉にする難しさを痛感した

(東京女子大学 現代文化 一年 安東直美)

今回初めて合宿に参加して一番心に残ったのは、短歌相互批評でした。和歌は今まで何度か作ったことはありませんでしたが、それを皆で考え直していくというのは初めての経験でした。皆でその人の気持ちを推し測り、その人の気持ちに一番よく合った和歌ができあがっていくのは、楽しくも嬉しくもありました。

班別研修では、班員の方が良く考えられた上で意見を発表されることに驚くとともに、自分の考えを言葉にすることの難しさ、自分の知識のなさを痛感しました。

また、素晴らしい班長さん・班員の方に会えたことは本当に良かったと思います。

班別研修にて

講義終へ友の語りを聞きをれば我が考への浅さを知らざる

第十三班—女子学生—

日本の歴史や精神について理解を深めることができた

(中村学園大学 家政 四年 前田美幸)

今回は班員と何でも語り合ふなかで、日本の歴史や精神について理解を深めることができました。友との語り合ひの

中で、自国の歴史や精神を真剣に話し合ふことにより友との絆が始まる事を実感しました。

小柳先生の御講義の中で、明治天皇御製と山櫻集の歌が非常に心に残りました。いかなるときも、人としての真心を尽くしていかれた先人のお姿が甦ってきました。先人達と心がつながった気がしました。夜の集ひの出し物で、私達は「水師營の会見」を国文研の先生方と共に歌はせて頂きました。この合宿でしか得られない貴重な経験をしたと思ひ感謝してゐます。

明治天皇御製

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

この御製に詠まれてゐることを実感することができました。友との出合ひ、友との語らひを大切にしていき、共に研鑽を積んでいきたく思ひます。

「水師營の会見」を共に歌ひて

思ひがけず多くの人の集りて心一つに歌ふはうれしき
もろともに歌ひし人と両将の尊き姿を胸にきざみぬ

良い友と遭うことができた

(熊本大学 文 四年 渡邊 愛)

日本青年協議会がやっている富士の研鑽合宿に一昨年の冬参加したのに続き二度目の経験だった。精神的にも肉体的に

も大きな負担となる合宿には気が重かった。

今回の合宿で私は共同生活ができるまでに成長した自分を発見した。驚きもし、嬉しくもあった。良い友と遭うことができた。私の班は最高の班だったと思う。ぶつかりあい、語り合いながら、心を削られたり、えぐられることなく、互いを高め合えた仲間だった。勉強において、私は頭でなく体で感じていこうとしているが、この合宿で、今後の勉強をしていく上で有効な空気を吸うことができた気がする。再び自分の中で時が実ったら、合宿に参加しようと思う。

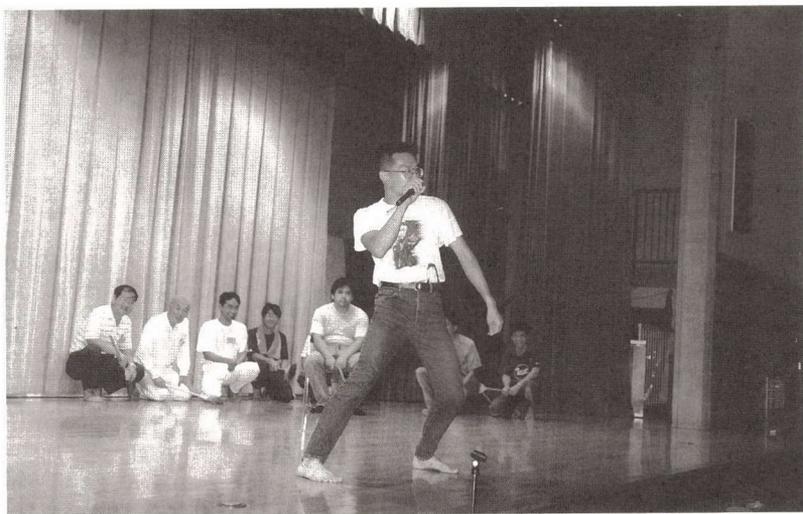
友とちと夜を徹して語り合ひふらふれども力沸き出づ

天皇様と国民の脈々たるつながりを知った

(長崎大学 教 三年 馬場麗子)

ご講義の中で印象に残ったのは小柳陽太郎先生のお話でした。私は 昭和天皇様は非常に身近に感じられるようになりましたが、明治天皇様については、どういうお方であられたかを知りませんでした。しかし神様をゆり動かすようなお歌の強さ、国民の上を思われるお気持、馬や自然に対する慈愛、そして御製に対し国民もまた、天皇様のことをお歌いしたものがあり、天皇様と国民がつながり合う日本の国がらが脈々とつながってきていることを知りました。

花の美しさは誰かに聞いてから感じるものではない。自分で決めるのだ。本当に美しいものを美しいと感じる感性を身につけたいと思います。それは身近なところ、友の真心や、



「夜のつどひ」の一コマ。

親の姿など、そういうところから感じるものではないかと思
います。それを戦争にもつなげていく努力が、私のできるこ
とだと思いました。竹本先生が「天皇陛下のご存在がある限
り、武士道は蘇りつつける」と言われたのが、心を打ち本当
に力づけられました。本当に信じつつけてゆきたいと思いま
した。

また、日本女性の生き方を追求していきたいと思いました。
自分自身それが見えてこない部分もあるし、これからの国文
研の合宿の中に女性の生き様、婦道等を取り入れていただけ
ればと思いました。

私達の班員同士と真剣に論議したり、相手の思いを考える
ことが本当に楽しかったと思いました。また夜の集いで、国
文研の先生方と世代を超え「水師宮の会見」を歌うことがで
きたことが、一体となったようで本当に嬉しかったです。

日の本をつくりこられし先人を偲びしのびつ日々を過こさむ

真の友を得ることが出来た

(東北女子短期大学 生活 二年 留目郁子)

私は、今回初めての参加で、学長先生のお薦めにより参加
させて頂きました。パンフレットで拝見した以上に友から学
んだことや、今後の日本はどうあるべきか考えさせられた。

特に心に強く感じたことは、友と心が通いあえたことでし
た。私はこの合宿に参加しなければ得ることのできない真の
友を得ることができました。まさしく一生の友を私は得まし

た。私はたくさんのおい出を作ることができた合宿に感謝致
します。また真剣に私の話に耳を傾け、一緒に悩み考えてく
れた友に感謝します。私はこの合宿に参加できたことを誇り
に思います。学校生活最後のよき思い出となりました。班員
のみなさん、諸先生ありがとうございました。

わが心友とわかれるさびしさに涙となりてながれいづるも

日本国を背負い世界に翔いていきたい

(青山学院大学 国際政経 二年 武市紫麻)

今まで日本の精神の教育を受けていなかった自分にとっ
て、この合宿は発見と不満の連続でした。

発見には、天皇の良さの再認識と、祖先への祭りの意義と
いう二つの面がありました。短歌を通して今まで縁遠い存在
だった天皇のお気持が身近に感じられました。文化的、歴史
的、精神的見地から見て、大変大切な存在だったということ
が分かりました。祖先へのお祭りということも認識が変わり
ました。

一方不満というのは、日本国に思いをはせて日本人として
の誇りを持ちながら、日本以外の国の価値観を受け入れてい
く姿勢がこれからの時代に必要だと思ふことです。お互いが
自国の良い面、悪い面両方を認識し、相手国に対する尊敬の
念を持つてこそ国際理解は深まるのです。

私自身としては、日本のことはもちろんですが、諸外国の
伝統、文化、歴史、宗教といった様々な面からの理解を深め

ることによって、日本国を背負い世界に翔いていくつもりです。

熱弁と討論により生まれしは年代超えた絆なりけり

素直に語り合える友達ができた

(東北女子大学 家政 二年 伊藤 玲)

私は今回の合宿はもちろんこのような合宿に参加したことがありませんでした。そのため先生方や国文研の方々の話される事に何度も驚き、又私にはなじめない内容も多くあったのでいろいろと悩んでしまうこともありました。

しかし、友達に救われました。自分の気持を素直に語り、語られていくうちに人の意見や考えというのは、それぞれに異なり、異なるからこそ人間というものはおもしろく、又成長していくのではないかと思うようになりました。

正直にいつて、このように話し合える友達ができるとは思っていませんでした。しかし終ってみると今までにはなかった素直に語り合える友達ができていたのです。このような友達ができたことは私にとって大きなプラスとと思っています。

様々の考へを持つ友がきと語り語られ夜はふけてゆく

人生の中心線を見つけることができた

(学習院大学 文 一年 坂東幸子)

「心の中にデッサン、構築がないと人生はできない。心の中



戸田建設機勤務・青山直幸先生による「創作短歌全体批評」。先生は参加者全員の短歌が掲載された「歌稿」の中から数十首について、作者の姿を偲べながら、時にユーモアも交へつつ、丁寧に添削していかれた。

にデッサン、構築ができると中心線が見えてくる」

この合宿の講義の中で一番頭に残っている言葉である。ものには全て中心線があり、その中心線を基にして成り立っている。それがものだけに限らず、人生においても、精神においても、同じであるということに私は気付いていなかった。だからこの言葉に強く魅せられた。私はよく自分がどうありたいのか、どうしたいのか分らなくなり、行き詰ってしまつた。その解決策を得たというわけではないが、この合宿に参加したこと、新しい視点を得ることができた。合宿に参加させて頂いた両親に感謝します。

最後に、班員の皆様、諸先生有難うございました。

寝つけぬ夜に

蒼き空に流れる黒雲眺めつつほのかに家族を恋しく思ふ

第十四班 — 女子学生 —

友情という宝物

(東北女子短期大学 生活 二年 中野渡えみ)

私は四泊五日を過ごしているうちに班員との絆が深まり、本音と本音で語り合うことのすばらしさを知りました。そして親身になって人の意見に耳を傾けてくれる班員の姿勢にか熱いものを感じ、真の友情を見ることができた気がします。十四班の皆との出会いが私に友情というすばらしい宝物を与

えてくれました。また、先生方の講義では日本の真の歴史を知りました。日本人としての誇り、魂のようなものを奮いおこさせ、今の私たちのような若い世代に課せられている、過去を正しく知り、それを後世に伝えていくという使命も感じました。この合宿はこれからの私の人生を大きく左右していくと思います。この合宿に参加して本当に良かったと思います。

友と寝る合宿最後の夜なれば時間を^{とよ}を^{とよ}しみて語り合ひぬ

日を追ひて友との語らひす、みゆきつりのりし思ひに離れがたしも

日本人として生きる

(長崎大学 教育 三年 山田光子)

この合宿で私は共感できない苦しさで共感できた喜びを味わわせてもらった。班別研修の折、私と考えの全く違う人と語り合っていていく中、初めは考えが違うから苦しいんだと思っていたが、感動を語ってもそれをなかなか共感しあえないところに苦しさがあると気付いた。私の感動は相手にちゃんと伝わっていて相手も共感しているのだが、その感動を言葉にせず「それはわかる、でも…」と頭言葉でしか語ることで、きかない中にあることにも気付かされ、このままではいけないと感じた。そのような中、長内先生が班の中に入って下さり、今上天皇の御製を紹介され、私は心が本当にあたたかくなつた。私はこの感覚を信じていいんだと思った。美しいものを美しいと感じ、それを皆で共感しあえたならどんなにうれし

いことだろう。戦いに征かれた方の和歌を鑑賞し、その人の心をいいなあと感じる友がいた。私の気持ちを伝えそれがその友に伝わったと知り、うれしく思った。その友とつながれたような気がした。考えが違う友であっても共感し、より強いつながりを覚えることにとても感動した。私たちはもともと自分の抱く美しいなあと思う感情を大切にしたいと思う。大切にすることこそ、自分の生き方も美しくありたいと思うし、努力しようとする。それが日本人として生きていることであるし、その中に日本を見ることができると思う。私は常に日本の美しさを感じ、唄んでいく自分でありたい。

素直なる思ひをぶつけあひてこそ心は強く結び合ふなり

美しと思ひしことを言の葉にあらはしゆくを日々行なはむ

美しいものは美しい

(日本女子大学 人間社会 二年 青山詩野)

班別研修ではただ感動するだけでなく、試行錯誤の連続でしたが、班の全員と同じ心になった時がありました。それは、皆で山櫻集の短歌をよんだ時です。小柳先生が「美しいものは美しい」と言われたように心が洗われるような気がしました。そして天皇陛下に対して何ら感動を持たない私が御製をよんで、日本国民に対する熱い思いを感じとることができたのです。私は日本が過去にしてきた過ちを正面から見捉えたいと思います。なぜなら神風特攻隊で亡くなった人の命も、中国で殺された罪なき中国人の命もその重みは同等であると



「班別短歌相互批評」。友の作った歌を班員の皆で気持ちを推しはかりながらもう一度作り直してみる。お互ひの心が交ひ、思はず笑みがこぼれる。

考えるからです。そして私は「わび」「さび」に代表されるような日本の情緒と文化と伝統を大切にしていきたいと思えます。

合宿での班別研修に参加して

異なりし考へ抱く班員が短歌をよみて心ひとつに

きつかれどあつという間の五日にて語りたきこと多く残れり

心に残ったこと

(中村学園大学 家政 四年 丸山順子)

この合宿で一番心に残っているのは、国文研の先生方の語られる姿だ。私たち若者に、よりよい日本を築いていってほしいという願いが感じられた。今私たちがこうして生きていられるのも戦争で戦われた方々の命があるからだなあとと思うと、自分にできる役割を果たしていきたいと思った。また天皇陛下のご存在が、私たちの国の歴史に深く関わっていることを知り、本当に有り難いなあと思う。班別討論で初めは戦争や天皇陛下の表面の知識や事実が論ぜられて空論に終わっていたが、一步踏みこんで先生方の言いたいことや、先人の方々の心を偲ぼうと心が一つになったとき、生き生きしてくるのを感じた。これから家に帰ってもまず身近な家族・友人の心に近づいていきたいと思う。

誰にでもまことばで語りゆけばいつしか必ず心は通ず

両親のことが好きだと語らるる友のみこころいと美しき

美しき言の葉聞けば自らわが心までさはやかになる

友の美しい心に感謝した

(早稲田大学 教育 三年 久保田陽子)

私がこの合宿で感動したことは数多くある。その中でも次のことを文章に残したいと思う。それは班別討論の時である。私が勉強不足で稚拙な意見を論じていると、それと真向から反する論を真剣に私に訴えてくる友がいた。その友の姿に私は感動せずにいられなかった。その姿から感じとれるのは真心そのものだったからだ。普段、他人との対話に深い交流を持ちたいと願いつつも表面的なもので終わってしまっていた自分に、この合宿の友らとの語らいは一種の癒しを与えてくれたように思える。暗中模索で突き進んでいた私に光を射し込んでくれたのが友の心だったのである。その美しい心にはただただ感謝するばかりである。

美しき心もちたるわが友のそのありがたさ胸にしみたり

心で感じるということ

(福岡女子短期大学 秘書 一年 諫山由紀)

私は長内先生の「頭で考えちゃいかん、心で感じないといけん」という言葉がとても心に残りました。私達は何かと理由づけをしてしまい、心で感じる素直な気持ちを表さずに頭言葉で議論していましたが、本当に大切なのは特攻隊の方の生き方、天皇陛下の国民を想われる御心に触れた時の胸の底から込み上げてくる感動だと思いました。美しい生き方を信

じ、自分もかくありたしとの思いにどこまで立てるかだと思
いました。またお互いの想いを語り、解り合いたい時、ここ
だけはゆずれないという想いを持っていたいと思いました。
これからは先人の方の残された私達への願いを偲び、学んで
いきたいです。

小田村先生、山田先生の和歌を読んで

明日はいかになりゆくらむかと日本のこと憂ひて和歌を詠まれたるかも

毎日をいかなる思ひで過ごさるか思へば胸のせまりくるなり

この和歌に込められし思ひを先人も抱かるるかと感じられけり

四度目の合宿参加

(国文研会員 星野有佳子)

今年国文研会員としての参加だったので、学生のみんな
にたくさん話をしてもらはうと思ひ、班長の役目もそのやう
につとめるつもりだったのですが、私はでしゃばって結局一
人でたくさん話をしてしまひました。でもそれはけつして悪
いことではなく、みんなが心を開くきっかけになったと思ひ
ます。何年も合宿に来てるからと言って深く理解できるとは
限らないと私は思ひます。常にこの合宿に参加する人々から
何かを学びとれるからです。だから私は班員たちが話せるや
うにするまへに自分が心を開いて話すべきだと気づきまし
た。来年もまたこの班の仲間にあふことができればいいと思
ひます。

反発をしつつも毎年参加せし青年合宿四度になりぬ

カメラ・レポート 24



今回、初めての試みとして高校生の参加者による高校生班が編成された。

第十五班—女子学生—

本気で意見を言い合えた合宿

(東北女子大学 家政 二年 山田美美)

私は、今回が初参加で、この合宿の内容も全然分からないまま来ました。はじめに参加者の名簿を見ていて、周りが優秀な人達ばかりで「こんな中で自分はやって行けるんだろうか」と不安で、班別研修の時も自分の意見に自信がもてませんでした。でも私の班員は、そういう私の意見をしっかりと聞いてくれ、おかげで自分も精一杯の考えを堂々と言うことができました。この合宿では戦争のことについて、今の私達は本当のことは何も学んでいなく、当時の日本人の心も忘れられていることに気付かされました。又、明治天皇御集での明治天皇の国を思う深さとあたたかい心に触れ、改めて国民にとっての天皇の存在の重さを実感しました。特攻隊のビデオもとても印象的で、同世代とは思えない程、親兄弟のことを大切に思い、日本を誇りに思っていた姿に感動しました。その他、短歌創作が苦手だったので大変だったのですが、作り終えた後の班別批評でみんなそれぞれの心に触れることができ、とてもいいものだったと思います。本当に本気で意見を言い合えるものかと思っていたのですが、初対面とは思えない程真剣に語り合い、とても充実した合宿でした。

初参加不安と緊張する我はみんなの笑顔みて安心す

学問をすることの意義を感じさせられた

(白百合女子大学 文 二年 磯貝綾子)

私は祖父母の生きてきた若き時代を、過去の世界と無意識的に抱いていたと思います。だから素晴らしき点も悲しき点も両方ともに無関心であつたと、今恥かしさと残念さを感じています。この合宿で学んできた事は、私がすでに学校で学んだはずの日本文化と歴史であるにもかかわらず、全く別の歴史のあり様でした。それは驚きに値するぐらいです。多分、着眼点がちがうと言うのも一つの理由ですが、物(教科書)ではなく、過去を生きてきた生身の経験者と、同じ空間の中で話を聴くというリアルタイムの出来事だからだと思います。小柳先生もおっしゃっていましたが、美しいものは美しいのであり、それに肯定も否定もありません。それは個人が感じる感性の問題であり、個性にもなります。だから私はいつの時代が一番よき日本だったか断定することはできないと思います。今回の合宿で本当のことを知らなくてはいいけないと強く感じました。良し悪しはおいておいて、本当のことを私達は知らなければ何も語れないと。学問をすることの重要さと意義を感じさせられました。又、自分の心を赤裸々に表す短歌、その短歌づくりを班の友達と心を打ち開き、照らし出して、述べにくい感情を輪の中に出し合って作り上げた時の感動、そして短歌のあり方の美しさを知ったと思いま

す。最後に正直に言つて長くて厳しかった四泊五日のこの合宿を楽しく素敵な思い出にしてくれたのは班の人々のおかげです。何かの縁で同じ班になった偶然性に感謝し、四泊五日を一緒に乗り越えることができ、自分の気持ちはうれしさで一杯です。

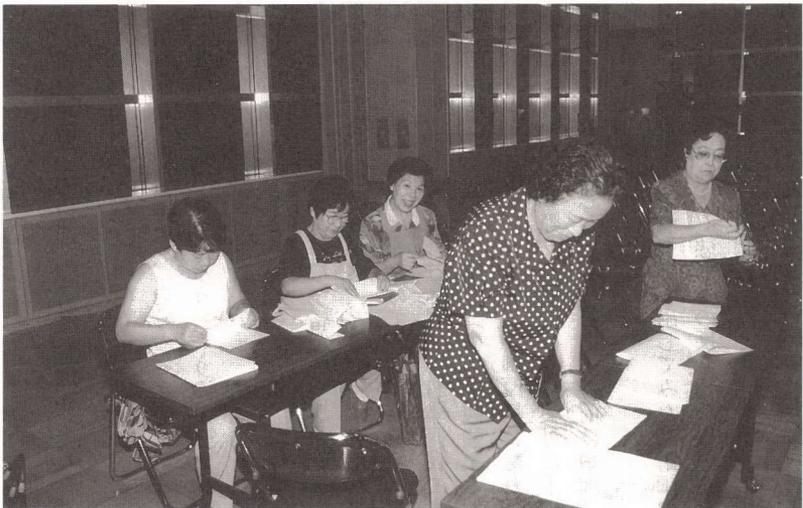
最後まで共にがんばりし友どちに感謝の気持ち語りたきかな

抵抗あるものが多い合宿でした

(福岡大学 二年 葉 秀島里沙)

この合宿に参加してみて、様々な人の考えを聞くことができて良かった。世の中にはこういう考えをもった人もいるんだなあと感じることも連続だった。その考えの中にはよく理解できるものもあれば、全く理解できないものもあった。中でもここで知ることができて良かったと思うのは、皇后陛下御集「瀬音」であり、これまでは雲の上の存在の皇室が非常に身近に感じられ、感動を覚えた。また「山櫻集」では、気持ち率が率直に詠まれており、分かりやすかった。講義では竹本先生の考えが一番素直に受け入れることができた。その理由としては竹本先生が日本の文化を完全に理解しておきながら、他の国(フランス)の文化も理解していると感じたことが挙げられる。真の国際人と言え人物であると思った。

私がとても抵抗があった話は「戦前は善、戦後は悪」という話である。戦前は善ということは大和魂を皆が持っていたという点や、戦争へ行かれた先生方の話から納得はできるの



合宿教室運営に日頃からご支援頂いてある地元の団体の方々に講義資料の製本、袋詰めなどのご協力をいただいた。

だが、戦後は悪ということがどうしても分らなかった。確かに大和魂が薄れつつあることは良くないことだと思うけれど、女性が男性と同等に進出している現代において、大和魂と言われてもいまいちピンとこないのが実際のところである。しかしだからと言って私は人生をあやふやに生きていないし、むしろ将来の夢を現実のものとなるよう一所懸命頑張っているつもりだ。それなのに戦後の教育を受けているからという理由で悪であると言われても全く意味が分からない。こういうこともあり、今合宿の講義はとてども抵抗あるものが多かった。最後になりますが、たくさんの友ができたことは本当に良かったと思います。

「瀬音」にて皇后陛下の歌聞きて母の思ひに感動しにけり

班長の責任の重さを感じる合宿でした

（日本青年協議会 清水久仁子）

今回の合宿でも班長という大役を任かせていただき緊張してのぞみました。班長の心が班員に移ると言われるため、その責任の重さに不安の連続でしたが、私の方がみんなに見守られ、支えてもらった気がします。班別でみんなの言葉を聞いていると、それぞれの持ち味のおもしろさに時間を取られ、まだ十分に理解が深まっていないのですが、一人一人の尊さを学ばせていただく毎日でした。武士道を生きた先人の高い志と愛をお偲びする時、班のみんなに精一杯の誠が尽せたのか、そして十分語り合えたのか、まだまだ満足できませんが、

これからも少しでも誠を尽くせるよう、少しずつ、地道に努力してゆきたいと思います。

自信を持って自分の感動を述べる人々に感動した

（防衛大学 人文社会 四年 横山尚子）

全体発表を聞きながら、自分の考えが次第にまとまってきた。まずもう合宿も終わろうというのに、私は自分の学んだこと、合宿に参加した意義がいま一つ見出せないでいた。そのようなしつくりしない気持ちに焦り、不安、不満が絡み合っていた。自分以外の人はどう思っているのかとても知りたかった。発表を聞きながら、とり合えず合宿に来て学んだこと、心動かされたことを挙げてみた。自分達は期待されているのだという背すじの伸びる思い、日本国民であることを誇りに思ったこと、歴史の感覚（事実を勉強するだけでなく）を味わうこと、そして天皇陛下の御厚情に触れ、その偉大さに敬意を払ったこと等々。帰宅したら父母に手について感謝の念を述べようと思ったし、帰省する前に靖国神社に参拝して帰ろうとも思った。

その後、自分の不満を書き出してみた。講師の現代日本を現代日本人が批判する態度への反発。そういった態度に対する学生の冷めた目に同調しつつそれにまた馴染め切れず、班長と班員の間で板挟みになるような息苦しさには耐えられなかった。

しかしながら、発表で生き生きと目を輝かせて発表する学

生を見てみるとそのような不満が潮のように引いていった。私は彼らが羨しかった。そして今までの不満が何だったのがわかった。私は本当は彼らのように生々と語りたかったのだ。心を開いて話せる人を求めていたのだと。日々の些細な出来事に不満を抱き、苦しんでいた自分が恥ずかしかった。自信を持って堂々と自分の感動を述べる凜とした姿勢の人々に感動した。自分に足りないものは何なのか、それは自信、そしてそれを支える揺るぎない信念である。何かをしつかりと学ぼうという信念があれば不安や不満を抱くこともなかったろう。ただ漫然と来てしまったから不満が溢れたのだ。

ここまで考えて全体発表の時間残りあと十五分。一言この思いを班員、そして班長に伝えたいと思いつつ、手を上げそびれ時間終了。せめてこの思いを歌に詠み皆に伝えたい。この合宿に関わった全ての皆様どうも有難うございました。立派な日本人になろうと思う。

全体感想発表を終へて

伝へたき思ひを残し七沢を旅立つことの口惜しきかな

輝ける瞳をしたる友達と学びしことは数多なりけり

飛び立ちてゆく我等の進む道陽のどこまでも照らしゆくらむ

声をつまらせ御製を詠むお気持ち解った

(福岡教育大学 教 一年 相浦佐知子)

私は大学に入って、サークルで初めてこのような学びに触れました。この合宿がどのようなものかはよく分かっていな



五日目午前、合宿運営委員長・内海勝彦氏による「合宿を顧みて」。内海氏は「ここで得た喜びや感動を共に分ち合へる友人を、これからも大切にしてもらひたい」と述べられた。

第十六班―女子学生―

かったのですが、班に入ると周りの人達はサークルとはちが
い、反発ぎみの意見が多かったように思いました。四カ月の
サークル活動を通して、私の頭の中もかなり変化していたん
だなあと感じました。そんな班の中でどっちかずというか、
はつきりした自分の意見がないことを痛感しました。

この合宿で一番学びたいと思っていたことは和歌だったの
ですが、天皇陛下や皇后様や戦争に行かれた人達の和歌をよ
めたことが本当によかったです。テレビで見るとぐらいいしか天
皇陛下を知ることができないのに、どうして他の人は大切な
存在だとか、尊敬しているなどと言えるのかと疑問に思っ
ていました。また、先生方が声をつまらせながら御製を詠まれ
る姿を見ると、増々不思議に感じました。しかし、班別研修
で御製をよんでいるとき、ふっと詠まれた御製で、天皇陛下
の思いがわかるというか、姿が浮かんできました。その時に
先生が声をつまらせるお気持ちちが解りました。私の解らな
かった気持ちちというのは、心の鏡と言えるような和歌を思ん
でいくことよって、少しずつ解ってゆけそうな気がします。
もつと学んで、私も日本文化を伝えていけるような一人にな
りたいと思いました。

初めての合宿長しと思ひても友との別れはさびしきものかな

特攻隊員の生き方が心に響いた

(慶応義塾大学 哲学 二年 山口園子)

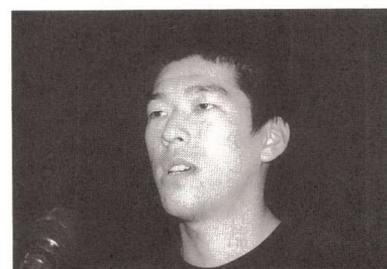
私は前々から父や母や先に合宿に参加していた姉から今回
合宿で学んだようなことの大切さについての話を聞かされて
いました。しかし、その考えは余りにも世間一般の思想から
かけ離れていたし、第一とても古くさいように思えました。

しかし、先生方のご講義をお聞きし、またビデオ「天翔け
る青春」を観て、特攻隊員の生き方にとっても心に響くもの
感じました。彼らは、私と同じ年代の若者だったので、共感
しやすかったです。彼らの書き残した遺書を読み、それぞ
れ、父母・妻・子供・恋人・友人・国と思いは異なってい
ても、「愛するものを守る」という共通の使命感が感じられま
した。その気持ちならば、私にもわかります。私の愛するもの
はたくさんあるけれど、その中の大きな一つに家族がありま
す。「愛するものを守る」という時、気持ちが優しくなります。
特攻隊員達の遺書には、優しさがあふれていました。

父のうたをよんで

忙しく言葉交すこと少なかれど私の姿を見守りし父

妹に何か得るものあらむこと願ひし姉の心のやさしさ



「全体感想自由発表」。次々に登壇する友らは、合宿教室を振り返って感想を湧き上がる
思ひそのままに率直に語ってくれた。

先人達の願いを後世に伝えたい

(中村学園大学 家政 二年 松永美香)

私は「天翔ける青春」を見て大きな衝撃を受け、言葉が出なかった。これまでは神風特攻隊について、残酷だ、何故あんな悲惨なことができるのかと思っていた。班に来て下さった先生が、「自分は行き残った。とても悲しくたまらない思いだ」「自分は本気で国のために死のうと思つた。『何故か』と聞かれても理屈では答えられない」とかみしめるように話された。それをお聴きした時、軽々しく感想を述べる事ができなかった。考えれば考える程、一般的観念の中で批判していた今までの自分を自覚してしまい、ただただため息が出るばかりだった。この時、はっきりと確信したことがある。戦いにゆかれた人達の願いをしっかりと受けとめ、後世に伝えていかねばならぬという強い使命感だ。戦争について生のお話を聞くことができるのは、私達で最後なのだ、今私達が真実をしつかりと受けとめなければ、後に続く日本を信じて命を失った先人達の願い、思いを誰が引き継いでいけようか。彼らを犬死させたくないと心から思つた。大東亜戦争で戦い、亡くなられた先人達により生かされている自分を意識した。

短歌相互批評にて

御友らが心を込めて我が和歌を詠まむとするはただただうれし

和歌創作を通して言葉の大切さを痛感した

(中央大学 法 四年 松浦美枝)

私は今まで父や母から、日本は侵略戦争をしたのではなく、アジアの平和のためにやむをえず戦争をしたこと、また日本には、武士の精神があつたこと等を教えられ、日本が好きでほこりに思っていました。しかし、神話や天皇については冷めていて、父母の気持ちを理解することができませんでした。しかし今回の合宿で長く続いてきたものには必ず意味があるということに気づき、また過去の日本人が命をかけて守ってきたものは自分達も日本人として継承していかなければならないという事を強く感じました。今回の合宿で一番印象的だったのは和歌作りでした。初めて作つたのですが、これによつて言葉の大切さを痛感すると同時に日本語の繊細さに改めて気づかされ、日本語が好きになりました。日本の文化の大事さ、素晴らしさを実感できた五日間でした。帰つてさっそく父母にその想いを伝えたいと思います。

七沢の空見上げつつ思ふかな我が志果たす未来を

自分が日本人であることを誇りに思つた

(東京都立大学 人文 一年 小田村明子)

この合宿には父の強い勧めにより、視野を広げられたらと思ひ初めて参加しました。この合宿に参加する前は自分が生まれ育ち住んでいる安全で快適な日本は好きでしたが、愛し

ではいかなかったと思います。しかし、先生方の講義を聴くに
つれ、先生方が日本を愛し、これからの日本について真剣に
考えていらつしやることが本当によく伝わってきました。古
くから伝えられてきている伝統の大切さ、兵士がどのような
気持で戦場に赴いて行つたか、武士道のことなど戦後の学校
教育では教わらない、日本人として大切なものを多く学びま
した。特に神風特攻隊員の出撃直前の遺書を見て自分の愛す
る者を守るという使命を果たそうとする彼らの尊く気高い精
神、家族への愛、愛国心に心を打たれました。私は今まで日
本に誇りを感じたことはありませんでしたが、特攻隊の人々
を誇らしく思い、自分が日本人であることを誇りに思いまし
た。

合宿で初めて出会ひしみ友らとわかり合へたることの喜び

天皇と国民のつながりは美しい

(長崎大学 教育 聴講生 白石由美子)

小田村先生の「世代間の断層」という言葉を聞き、世代を
超えて日本人が大切にしてきたものへのしみじみとした共感
ができないことへの憂い、悲しみのないところでこの合宿で
学ぶことはできないと思つた。私の班で、「世代の断層」を
自覚し、そこに「大変なことだなあ」という気持が共有され
たのは、明治天皇御製と山櫻集に見られる明治天皇と国民の
つながりに気付いた時だった。天皇と国民のつながり、まご
ころの通い合いを皆が、「美しい」と感じていた。「そんなの



閉会式で学生を代表して挨拶をする早稲田大学政経学部二年の伊藤俊介君。「真の友達を得るとはかういふことだったのかと実感することができた」と語ってくれた。

無意味だ」というような冷やかな発言はなく、その美しさに心は満たされていた。そして、班がひとつになっていった。班の皆さんが、それぞれ自分の考えをしつかりと持ち、妥協せずこの合宿に取り組んだお蔭で、自分の思いを深くみつめられたように思う。

相互批評で自分の気持ちに妥協せず、とことんピツタリと心情にあてはまる言葉を選んで四十分ほどかけてやっと一首ができたとき、全員が「よかった」「詠めたね」「すつとした」という気持ちになれ、本当にながった思いがした。つい四日前に出会えた仲間とつながれたことによるこびは言葉には表せない。本当によかった。

合宿で出会ひし班友と語りあふこのひとときをいとはしく思ふ

今までに経験したことのないうれしさ

（日本大学 短期 一年 島村裕美）

私は、何か特別の団体の様な気がして、この合宿に参加する事にもすごく抵抗がありました。初日は講義や班別討論にも身が入りませんでした。一日、三日と経つうちに班の人達の熱心さや心の温かさに触れ、今まで抵抗している心を持っていて自分が恥ずかしくなりました。そして班員の皆も国や天皇や戦争の事など全くといって良いほど考えた事のない無知な私の意見にも熱心に耳を傾けてくれ、短歌相互批評の時間にも一生懸命になって私の短歌を直してくれたりなど今まで経験したことのないうれしさがありました。先生方の

お話も初めて聴くことばかりで感動もありませんでしたが、班員が心に残った事、感動した事などを聞いてゆくうちに私の心にも何か残るものがあるという事を感じました。今まで知らなかった世界が学べ、とても密度の濃い五日間になりました。この合宿に参加できたことを今はずっとうれしく感じました。

合宿終へ得るもの多き五日間師の志しかと受け止めむ

日本を理解しようとする心を得た

（東北栄養専門学校 二年 福澤果織）

開会式の小田村理事長のお話の意味もほとんど理解できませんでした。全く知らない所で、全く知らない人ばかりなので、一日目の夜は緊張のあまり睡眠も不十分でした。こんな事で果たして班員と心を通じ合わせる事、講義を理解する事は不可能ではないかと思っていました。合宿を終えるに当り、私ができる事ができたのは「日本について私はほとんど知らなかったんだなあ」という事です。はつきり言って、講義内容は理解しきれいていません。ただ日本を理解しようとする心を得る事ができました。心が刺激され学ぼうという気持ちの泉が今溢れんばかりです。偶然出会った人々と日本について語り考えた五日間は今後自分の生活の主たるものとはならなくともそばになくはならない薬味的存在として生きてくることを確信しています。

日の本の慈愛に満ちた先人の尊き御心受け継ぎゆかむ

これまでにない充実感を得た

(小馬谷秀吉 71歳)

私にとって六度目の合宿が終わりました。年一回の「身心のみそぎ」のつもりで参加してきましたが、七十一歳の今、何かこれまでにない充実感を得た気がしております。まだ、若い人達には負けないぞという、気持を新たにしております。参加でもありましたが、現今の世情、目にあまるような政治社会状況への根源について、改めて目を開かせられたことによるものだと思います。特に、竹本忠雄先生が「これからも本場の日本の姿が作り出されることを楽しみに力を尽しているのです」という言葉には涙のこみ上げる思いでした。全体感想発表でもその思いが共有されていることが感じられ、心強く思いました。合宿で学んだことを糧として私自身さらに研鑽しながら充実した人生への努力を続けたいという思いであふれております。

丹沢の山懐につどひ来て学びし幸はせしみじみと思ふ

正しい日本に戻す為になんか出来るかが課題だ

(みどり汽船株式会社 白石義器 52歳)

初めてこの合宿に参加させていただきました事、心より厚



主催者を代表して(社)国民文化研究会副理事長の上村和男先生が「今後とも友を求めて互ひに励まし合ひながら日本を感じる学問を続けて頂きたい」と語られた。

家庭と仕事「両方一番」のお言葉が、心に残った

(出光興産(株)人事部店主室 山田幸治 36歳)

班員として自問自答しながら、また班友との十分なる話し合いを通じて「自らを顧みて恥ずかしくないよう努力し、かつ家族との絆をより強くしていきたい」と思いました。

更に会社での職務にまい進し、心を公に向けてゆくことがごく自然で当りまえの感情として育って来ている自分を見つめることができました。「体験発表」で伊佐裕氏が語った「家庭と仕事、両方が大事、両方一番!」とお言葉が印象に残っています。

今、心が洗われた様なすがすがしさと、明日から頑張ろうという決意が漲っております。この決意を実践することは容易なことではありません。ともすると我執に苛まれてしまいますが、粛々と日本人らしく行動していきたいと思えます。

小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して

つきつきにあなたの短歌うたを読みたまふみ声の響き深く身にしむ

昨年、一昨年、一昨々年と合宿でお世話になった

中田一義さんの病ひを知りて

いちにちも早くやまひのいえませとひたに折りぬ七沢の地で



別れの時は来た。「お元気で!また会ひませう」再会を期して、温かく友らを見送る。

簡単に心を開けなかつた……

(キヤノン販売(株)名古屋支店 石黒勝己 31歳)

ついで皆様方の期待に反して心を開けなかつたということがわかりました。とはいってもそんなに簡単に心を開くことはしてはならないと思います。それが大人の思考だと思えます。「特攻隊の青年が美しい国のために死んだ」などというのは人間の本質の半分しか見ていない綺麗事でしょう。あの状況では「母ちゃん俺は死にたくないぜ」というのがはばかられ、しようがなく「天皇陛下万歳」といつて死んでいく他はなかつたというのがリアルズムだと思われまふ。

プログラムの流れや講師の方々の講義の底流にあるロマンチズム・熱狂・郷愁を察知する度に増々、己れの思想を鍛えあげねばならぬと考えた次第であります。

とはいえ、短歌創作及び班での相互批評はとても良かったです。世代を超えた語らいもとても楽しかったです。気遣いにあふれた事務局の方々のお仕事ぶりに感謝いたします。

若者の心の動くを見るにつけ山降りてぞ自己を追ひつめん

新たなスタートを踏み出したい

(森村学園中等部高等部教諭 林 宏之 36歳)

日常の「閉ざされた言語空間」に息苦しさを覚えていましたので、この合宿に参加させていただき久しぶりに開放感を味わうことができました。同班の皆さんとは初日から昔なじ

みの知己のようにおつき合いをさせていただき、気がねなく過ごせたことにも感謝しております。

職業柄、幅広い業種の方々とおつき合いが乏しく「教員の常識は世間の非常識」を自戒している私にとつては、下山後、日常に戻ってからが勉強の始まりだと考えております。頭で考えることよりも心で感ずること、深く思いをいたすことを主眼に新たなスタートを踏み出して参ります。

貴重な経験の場を提供して下さった国民文化研究会の皆様
に深く御礼申し上げます。

わが心澄まして去ぬる七沢にわたる涼風いと心地良し

七沢につどひ来ることなかりせば今ひとりの我見出でざらまし

日本文化の勉強が大切だ

(株)アキタ・アダマンド通信機器部 真田博之 32歳

卒業後、初めて班に入つて勉強させて頂いた。班長初め班員の方々の忌憚のない意見交換やお話を夢中で聞いてゐた。話し合ひに参加してゐるのだと思ふとうれしくなつた。

竹本忠雄先生が「武士道が世界から大事にされてゐる」旨を語られたが、なかなか自信が持てないである日本文化が、世界の目からは別に見えてゐるのではないかと改めて考へさせられた。西欧の騎士道もわが国の武士道も「正義だけでなく弱者(貧者・病者)を救ふ」といった宗教的側面があつた」
とのお言葉は印象的だつた。

日頃をかしいと思つてゐる事を、なかなか説明できなくて

そのままにしてしまひがちだが、日本文化を勉強していくことにより自信を持つてかうだと示せるやうになるのではないかと思つた。

率直に思ひを述ぶる班員の話を開けば楽しかりけり

年齢の差を意識せずに話し合つた

(神奈川県立厚木南高等学校教諭 山内健生 52歳)

社会人班長とは名ばかりで、積極的に考へ発言する班員諸氏のお蔭で、私自身にとつても稔り多い合宿となつた。ひと廻り以上も若い人達と一緒だったが、年齢の差は全く意識しなかつた。各地でそれぞれのお仕事をこなしながら、やはり国のあり方、自らの生き方について真正面から考へてをられる姿を現実に目にして私自身が鞭打たれる思ひだつた。

班別研修では直接的には講義等に関して討論がなされたが当然に合宿全体が日常の自分自身の生活を考へさせてもゐるのだといふことを感じた。関正臣先生がいつも言はれる「合宿は私にとつて正月で一年の始りです」とは、かういふことなのだなあと感じた次第である。

「参加者による全体感想自由発表」にて

み友らに交りて挙手して壇上に吾子の立てるを驚きて見ゆ

氣負ひなく拙なきままに語りゆく吾子の姿をうつつに目にす

言の葉はつたなけれども語り得てその胸内はさはやかなるらん

昨夏に續きて加はる合宿で去年より少しく得るものあるらん

第二十三班—社会人—

タゴールの言葉に感銘を受けた

(亞細亞大學勤務 平横明人 44歳)

班長を勤めさせて頂いた。班付きの松吉基順先生の御存在は非常に有難かつた。

御講義のレジメ以外に、引用された言葉や文章が印刷物として直ちに配布された事は、非常に有難く思つた。

タゴールの言葉「すべての民族は、その民族自身を世界に現す義務を持つてゐます」には、非常に感銘を受けた。まはりの人々に傳へて行きたい。

對外的には、共産支那に對し戦後五十年に互り、何も手打つて來なかつた爲に、今後重大な問題となつて來るであらうと思はれる。

又我國の使命として、チベットに関心を注ぎたい。

全體感想自由発表を聴きて

先人の信頼に應へまつらむとふ若きの言の葉胸にせまりき

我々の役割は甚大である

(学校法人拓殖大学勤務 服部朋秋 37歳)

先生方の御講義を拝聴後、班別研修で討議する事により、内容を一層深く理解し、問題点を把握できた。又「語らひ」

を通じて心の通ふ友を得られたことも、喜びの一つだ。この合宿で得たものを大切にして行きたい。

常々抱いてきた数々の疑問を、解り易く数へて戴いた先生方に感謝すると共に、我国の現状を憂ひ、まともな国にすべく微力ながらも頑張らねばならないと痛感した。次代の青年が健全に育つて行く為にも、生を享受する我々の役割は甚大であると思ふ。

合宿教室最終日の全体感想発表で、素直な言葉で発表する学生の姿を見て、大変心強く思つた。

目を覆ふ疊り晴れしか我が生くるまことの道の見えはじむなり
み國をば覆ふ黒雲打ち払ひ青きみそらををろがみ仰がむ
集ひにて学びし素直な思ひをば述べし若きら姿りりしき

御製拝誦と短歌創作を決意

(株)青森銀行野辺地支店勤務 斎藤 勝 40歳

十四年振りの参加となりました。今回の合宿では、社会人班に入れて戴き、とても感謝しております。

日頃仕事にかまけて、自分自身を見つめる学問が疎かになつてゐることを痛感致しました。御製の拝誦と、自分の生活での感動を短歌に詠むことを再度始めたいと思います。

青森に帰りましたら、長内先生のお宅での聖徳太子の御本の輪読に心を尽したいと思つております。新しい仲間を一人でも多く増やし、輪読を続けたいと思います。

合宿最後の夜松吉先生が来て下さりて

さ夜更けて車座になり語りあふ今宵の集ひの何と楽しき

「手を合せ神々み祖ををろがめば不可思議あらはる」と師はのたまひき

掛替えのない出会いがあつた

(出光興産(株)人事部店主室勤務 大三輪 晃 38歳)

昨年に続き二度目の参加です。以後多少本を読み、占領政策、ウォーギルトインフォメーションプログラム、検閲、自主検閲ということを知り、愕然としました。

「蜜の光」の歌詞は三番まであり、「我は海の子」の歌詞は七番まであるということをも、この合宿で松吉順順先生から教えて戴きました。都合の悪い箇所は抹消し、知らせないという自主検閲は生きており、気を付けても気を付けようがない形で、今も恐ろしい力を発揮しています。こうした事に気付くことができたのは、先生と親しくお話をさせて頂いたお蔭です。

自分が掴んだものを後輩に伝えていきます。掛替えのない出会いがあり、参加して良かったと心から思つています。

全体感想自由発表にて

真情を吐露せんとする若人の言の葉強く我が胸を打つ

「何か」を掴めた

(株)山口銀行人事部人材開発グループ勤務 井上孝史 34歳)

初めてこの合宿に参加させていただいた。この合宿で実施された、講義後の班別研修による結論を求めない話し合いは、

是非我が社でも取り入れたい。

合宿に参加して、戦後の教育が占領政策によるものであるという事を知り愕然とした。その視点から考えると、成程と
思う事象が多くある。と同時に、これまで「何かおかしい」と
思っていた、その「何か」を掴めた事は非常に有益であつ
た。

今後は、物事の本質を捉え、正しい考えを持てるように勉
強をして行きたい。

友どちと熱き思ひを語らへば心にひびく もののか 武士の道

「心」のあり方を学んだ

(出光興産(株)人事部店主室勤務 古池勝義 37歳)

合宿に多数の若者が自主的に参加している姿に「我国もま
だ捨てたものではない」と感じました。素晴らしい事です。

「知」ではなく「心」を学ぶ事が、本合宿の目的であると思
いますが、殆どどの講義を「知」として学ばせて頂きました。
「事実を踏まえて、これを識者がどう自らの思いに転換する
のかを知りたい」という思いがあり、今後の我国のあり方を
考える上で大いなる「知」を重ねさせて頂きました。

しかし班別研修での班員、国文研会員の皆様との話し合い
では「心」のあり方を磨き直せたいと思います。特に結論を急
ぎがちな私に「焦らずとも大丈夫。皆同じ日本人の血が流れ
ているのですから」と和らげて下さった松吉基順先生には、
「心の持ち方」を示唆して戴きました。

世の人よなほざりにすな若人の國を憂ふる熱き思ひを
くだちゆく今の世なれど若きらに直き心の育ちてうれし
正道を独りたりとも歩みゆかむやがてはもろ人歩むと信じて

青年有志の爽やかな勉強会

(国立リトグラフ工房代表 田中光成 30歳)

早朝六時半起床、夜は十二時就寝といふ規則正しい生活は、
しばらくは縁のないものであった。班員との協力、友情を詳
しく書くには紙幅に余裕が無い。だから此の合宿で得た「最
大のお土産」について書かう。

一回のみの参加で大仰な事を言ふのは憚られるが、一言を
以つて表現すると本合宿とは「青年有志の爽やかな勉強会」
だらう。純粹に祖国の将来を考へ、互ひに意見を交換する。
祖国を愛する若者は多いが、これ程まで純朴に又真直ぐに自
己を表現できる場合は少ない。

私の言ふ「最大のお土産」とは、かういふ集まりが有るの
だといふ、一にその存在を知つた事であつた。

世を憂ふ若人多しと聞きつれど七沢の集ひにそをば見たりき

第二十四班——社会人——

歌を通じて先人の気持ちに近づく事を学んだ

(テクノペイト・コマツ(有) 重田憲克 24歳)

同じ班の佐々木さんは以前自衛隊におられ、PKOで派遣される教官を見送ったそうです。でも実際に見送るときは言葉をかけてこなんでできないし、ただお互いの目と目ではなくとかわかりあってもらうことしかできないんだそうです。

特に国の事を語ることがタブーとされている現在、英霊の方々と国を守られてきた方々の事を語っていかなければいけないと思います。小柳先生がおっしゃられたように、知識ではなく、歌を通じて当時の方々の気持ちに近づいていくことが、長年続いている日本人の本当の心の良さを知る最善の方法であることを学び、心から感謝いたします。

合宿を終へて

国のこと語らるる場はすばらしき友みな心一つになりて

明治天皇御製「暁」を読みて

ひたすらに国民の無事祈られし大御心はありがたきかな

日本の事を真剣に考える人がいることに少し安心した

(宮崎神宮 石塚和也 25歳)

私は広島県の尾道の中学校・高校に通いました。平和教育

にもものすごく熱心な教育者が多く、国旗の掲揚、国家の斉唱は一度もなかったと記憶しています。高校での政治経済の先生からは「天皇は元号によって時を支配している。だから私はいくら注意されても西暦で書く」と教えられました。なんとおかしい事でしょうか。この国はなんなのだろうか、と考える次第ではありますが、この合宿を通じ、日本のことを真剣に考える人が結構大勢いるんだなあと少し安心しました。日本を守ることを私は伝統と文化を守ることだと思っています。合宿に来て、古典、和歌などまだまだ勉強不足という事を思い知らされました。帰ったら少しでも多くの本を読み、この国を見つめ見守っていきたいと思います。

わづかなる間にも国民思はるる大御心はありがたきかな

慰霊祭にて

おごそかに静まり祀る齋庭にてかきはで打って行く末祈らむ

明治の人々の高い志に続きたい

(茨城県商工会連合会 佐々木徹 28歳)

今回の合宿で日本人としてのあり方、心の持ち方を考えさせられ、特に明治の人々の緊張感ある生き方、高い志に私も続きたい、続かねばならないとの意を強くしました。

しかし一般に社会改革や国家を語っていると、パティエのもの笑いのタネになるのがオチです。今回学んだこと、感じたことを、周りの人々に、これまでの社会一般での史観やイメージに対する疑問を宿らせる形で話して行きたいと思っ

ています。

特に岡倉天心の言葉には共感を覚え、更に詳しく研究してみます。今回の合宿、ほんとうにありがとうございます。また来年も参加させていただきたいと思えます。

夏雲や空に散りせしすらすらをおもかげがさす厚木のこかげ

山桜往く若者を清くして御国の盾をはげましつらむ

セミなきぬ夏の終りのさびしさを厚木の夜の清き輝き

「志」という言葉に強く共感を覚えた

(吉川建設 佐々木栄幸 29歳)

強く共感を覚え、励まされた言葉に「志」をもつという事がありました。大きなデッサンを描き、中心線が高くなれば本物と出会う。社会に出た時、志を持ち、毎日を過ごしていましたが、何年もたつと志が低くなり、今中心線も低くなってきていると感じます。もう一度志について見つめ直して行かねばと思えます。

実践していく事も必要不可欠です。どうしても言葉・観念が先行し、行為が伴わない自分です。何とか改め、志を実現して行きたい。一人の平凡な日本人として、その平凡さに誇りを持ち、欲を言えば、修身齐家治国平天下の一人として、毎日を生きたいと思えます。それが合宿でお世話になったすべての人に対する返答でもあると思えます。

慰霊祭にて

この国を守りしすらすらを思ふれば小さき我なれと思ひつがなむ

感想を述べられぬ仲間気づかひたる言葉を聞けばやさしさうれし
共に是れ凡夫といはれうなづくもすぐに破れし我が身のあさはかさ

一人でも多くの人に日本の素晴らしさを語りたい

(建設省中部地方建設局 河野剛士 28歳)

今の日本の最大の問題点は、国民があまりに自分の国を知らな過ぎる事にあると思う。これでは自分の国を愛せるわけがない。誇りも持てない。自分の国に誇りを持ってない国を誰が尊敬するのか。じっくりと我が国二千年の歴史と文化を研究したい。特にその根幹をなす皇室について考えたい。そして一人でも多くの人に日本の素晴らしさを語りたい。それが合宿に参加した人の使命のように思う。

日本が他国にはない独自の文化があるように、どんな人も自分しかないキラリと光るものがあるはずだ。それを伸ばして自分なりの「国のための仕事」を真剣に考えようではないか。人間は事を成す為にこの世に生まれてきたのだ。頑張っていくこう。

日本の美しき流れいざここに世界の海へ伝へむとぞ思ふ

友人との距離感を尊重したい

(タック株 石津隆宏 28歳)

開会式の際、代表で挨拶した学生が、「ここに来て本当の友人を得ました」と言うのを聞き、正直「ああ、こういうのは良くないな」と思いました。「本当の友人」という言い方

には、他の友人には「こいつは本当の友達じゃない」という
思いでつきあおうとする態度が読みとれてしまうのです。西
尾幹二さんは「最近の若い人は自分の殻に閉じこもっている」
と嘆かれていましたが、「この人達だけが分かってくれる」
というような閉じこもり方もあるのです。友人にもいろいろ
な人がいます。しかし全部「友人」には変わりないのです。友
人との距離感を尊重することが、友人への尊重になるのです。
合宿から帰った後、友人との距離感を考えてみたい所です。

国のため命捧げしつはものをただ悪となす輩許せじ
死を賭して御国守りしものふを歴史の汚辱と語る愚かさ
舞台立つ感想述べし若者のあぐねし言葉心に留めり

和歌を通じてここを働かせる

(住友電気工業㈱ 布瀬雅義 44歳)

三日目朝からの参加であったが、竹本先生のご講義の後は、
戦没学徒の歌から武士道を偲び、小柳先生のご講義の後は、
日露戦争当時の国民の歌と明治天皇御製を味はった。さらに
和歌創作を合計三回行ひ、まさに和歌を通じて学問を心がけ
た。知識的・概念的な話が多かったので、このやうに和歌を
通じてここを働かせる事を中心としたのであるが、班員諸
君の今後の学問がこれを基礎として着実に成長していくやう
期待し、また見守りたい。

班別相互批評

我が班の歌稿を見れば概念や掛け聲のみの歌の多し

まことなるころの様の見えすずいかにせむかと心惑ひぬ
一人一人ころのうを聞きゆけば我にも通ずる思ひの潜む
一人一人のころの様を素直なる大和言葉に映してしがな
二度目なる歌をし見れば言の葉は整はざれどもまごころ見ゆる
まごころを歌はむとむかふみ友らの勳みの様ぞうれしかりけり
ふしぎなる敷島の道の力にぞ友等のころ開けゆくかも

第三十一班 社会人

私の中に何らかの変化が確実に生じている

(社福岡県中小企業経営者協会 井上美由紀 23歳)

この研修の前と後で自分がどれだけ変化したかは分かりま
せん。しかし私の中の幾らかの、そして何らかの変化が確実
に生じていることを、熱く語って下さった先生方に御報告し
ておきたいと思います。

単に「歴史の一部であり、昔のこと」としか認識していな
かった戦争のこと、現代においては忘れられている愛国心と
日本への誇り、皇室への思い等々……。自分の中の何かが呼
び覚まされたような思いです。

それから、この研修のもう一つの収穫として和歌がありま
す。古文が嫌いだったはずなのに、その調べと趣のある味わ
いと人々の思いを美しく、たくましく表現できる力に感動し
ました。

我が胸に日本の心目覚むるをしかと感じつつ研修終へたり
山の端に燃ゆる夏の陽沈みゆき鳴く虫の音も涼しく聞こゆ

真の歴史を教えていくことが必要だと感じた

(尚綱大学就職課 安田留美 23歳)

毎日毎日が初めて耳にするような話ばかりで大変驚きもありましたが、講師の方々の熱弁を聞き、言わんとすることが少しずつ見えきたように思います。

私は教師になりたいという希望をまだ捨てずにおります。

これからの教育にはやはり真の歴史を教えていく必要があるように強く感じました。我々がこの合宿の言わんとすることに驚きや反発を感じてもおかしくない時代になっていると思います。幼少の頃からこの合宿のような話を学校の歴史で教育していれば、何の違和感もなく全ての青年が真の歴史を正しく理解し、また日本ということにも常に関心を持ち真剣に考えるのではないのでしょうか。これから教師を目指す私としてはこの合宿の経験を生かせることができればと考えております。

七沢に集ひし友と別れゆく時を迎へて寂しさ覚ゆ

少しは成長したような気がする

(尚綱短期大学事務局 酒井由希恵 20歳)

合宿が始まってみてまず驚いたのが、参加者の皆さん、国文研の方々が、ここまで日本のことを真剣に考えていらっ

しやるということでした。私は今まで割とのんびりと、どちらかというところ、自分と自分の近くの人の事ばかり考えて生きてきた様な気がします。そんな私に、先生方の御講義や班別研修での討論は大変な衝撃でした。

正直言って、最終日を迎えた今もまだ理解できない事や疑問に思う点もあります。しかし、この研修を通して様々な人の意見を聞いたり、共に生活したり、班友と語り合ったりすることで、私は合宿に来る前より少しは成長したような気がします。

七沢の木々の緑も吹く風も郷里ふるさとに似て心落ちつく

五日間共に過ごせし班友は何を思ひて家路に着くらむ

生き方の指針を示されたような気がする

(社福岡県高齢者能力活用センター 牟田奈津江 28歳)

私は子供の頃から祖父母たちと同居しています。祖父は陸軍で、戦地に赴く時に日の丸の旗にみんなが寄せ書きしてくれたものや軍刀、昭和天皇からいたゞいた勲章、金杯、賞状などを幼い私に見せてくれました。そして、その時に必ず「私たちはお国のために戦ったんだ。天皇様がいなければ自分たちはどうなっていたかわからない」と言いました。私はいつもそんな時「天皇は国の象徴なのになんでそんなに偉いのだろう」と思っていました。

また祖父母の部屋には天皇家の写真がいつも飾ってあり、祖母はお正月に天皇家のご祝賀に東京へ行くのを楽しみにし

ています。

私は今回の合宿に参加して、祖父母たちが伝えていこうとしていた事や気持が理解でき、自分がこれからどういいう生き方をしていくべきか指針を示していただいたような気がします。ありがとうございます。

幼な子に平和の意味を伝へんと語りし祖父の顔の浮びく

国文研の先生方の姿を心に焼きつけたい

(宮之城町立佐志小学校教諭 窪田実代子 34歳)

今まで何の学習もせず無関心である私達の世代に、国文研の先生方の言葉が通じるのだろうか、と不安に思う気持であつた。しかし、徳永先生の御体験から発せられる言葉は、頭で理解することを越えて私たちの心に迫ってきた。日本という歴史を断たれて共感できる体験を持たない私達の世代がしなければならぬことは、国文研の先生方の姿を心に焼きつけることだろう。その思いと願いを目に焼きつけ、心に焼きつけることが歴史を受け継ぐことだと感じた。

先人の、言葉や歴史や国家観や人生に対する感性を学び、自分の感性をとり戻さなければならぬ。そうしなければ国家の行く末どころか、教え子に教えることも、自分の子を育てることも、いや、自分の人生でさえ迷いつづけて漂うことになってしまふだろう。「ほんやりした人間ほど時代に毒される」。西尾先生の御姿もしっかり焼きつけておきたい。

日本の道伝へゆくを使命と思ふ心みがきて果たし行きたし

日本民族の素晴らしさを伝えられる人間になりたい

(日本青年協議会 島村恵美子 21歳)

小柳先生が紹介されたタゴールの言葉『すべての民族はその民族自身を世界に現す義務を持つてゐます。何も現さないといふことは民族的な罪悪ともいつてよく、死よりも悪いことであつて人類の歴史において許されないことであります。民族は彼等の中にある最上のものを提出しなければなりません。』という言葉聞いた時、ビビツといったような衝撃的な感じを受けました。でもその後、今の日本にはその位極端なことをしないと気がつかないのではないかと思ひました。日本民族の素晴らしさをもっと自分が体得して、伝えていかなければならない、心から心へ伝えられる人間になりたいと思ひました。

今回諸先生方との歴史観の断絶という言葉がでていきました。班付の徳永先生の思いをお聞きしながら、私達が先生のお心に少しでも近づき、そのお気持ちを偲ぶことができれば断絶は生まれなと思ひました。先生が心から伝えたいというお気持ちに私たちは応えていかなければならない。心と心のキャッチボールをしていく事が本当に大事な事だと気づかれました。

皆様と出会へしことのうれしさを家に帰りて家族に伝へむ

タゴールの強く烈しき言葉は私の心に衝撃与ふ

熱心に日本のことを心配している人達がいる

(市ヶ谷漢方クリニク 田中美由紀 26歳)

初めての参加で、始まるまで不安で一杯でした。一番感じたことは、諸先生方をはじめ、この合宿を運営している人達が熱心に日本のことを心配しているのだな、ということです。私たちは両親、祖父母とずっと昔から繋がっているのだなあと、戦争に行かれた先人たちも両親や妻、子供を守るため、日本を守るために戦地に行かれたのだということもわかってきた気がします。

和歌創作は私にとって難しいものですが、昔詠まれた和歌が現代にもその気持が伝わるということにも驚き、和歌ってすばらしいなあと思いました。

見上ぐれば上弦の月輝きて友らと歩けば楽しかりけり

第四十一班 高校生

日本に生まれてよかった

(修猷館高校 二年 中川原英和)

先生方の御講義をお聞きして、日本という国の独自さ、日本人というもの、日本人が大切にしてきたもの、武士道、文化、歴史というものを知りました。またそれは、小柳先生の御講義の中で、短歌という形で感じることができたよう

な気がします。特に、日本人の中での天皇という御存在が、子を思う母のように感じられ、今では日本に生まれてよかったと感じました。

この五日間で僕の人生観は大きく変わりました。ほんやりではあるが、思い悩んでいた自分の進むべき道が見えてきたような気がします。これからは、今の気持を大切にし、自分が日本人であることを誇りに思い、勉強にはげみたいと思います。

ますらをのみ魂鎮めつ我もまた日本の国憂ふ心持つ(ひのち)

自分が変わったことに驚く

(日本航空高校 一年 小林秀行)

日本という国が自分にとってどういう国かが確認できたことをうれしく思います。私は今まで、天皇や君が代、日の丸など観念的にとらえ、経済大国、GNP第一位がいい事だと思っていました。しかし、今回先生方の御講義を聞いて、日本という国の奥深さ、日本人としての生き方を学び、自分を振り返る事ができました。今まで自分は、何不自由なく物に恵まれ、親にも甘やかされて育って、やりたい放題だったのですが、この合宿教室で自分が変わったことに自分で驚いています。この合宿に参加できたことをうれしく思います。

日本に西洋人が来なければ日本の文化くづることはなし

一番いろんなことを考えた時間

(つくば秀英高校 一年 川井大和)

最初は御講義をきいても、それは正しいことか間違っているかとそのことばかりにとらわれた。聖徳太子の「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず」の言葉を知ってから、段々日本の文化というものに関心を持てるようになりました。

そして、日本文化にもっと関心を持ち、正しい歴史感覚を持たなければいけないと反省しました。

この合宿は、今までで一番いろんなことを考えた時間でした。自分を見つめた時間でした。頭を使いつても疲れたが、来てよかったと思いました。

四日前帰りたいと思へども日をかさねるに楽しくなりぬ

写真班

写真班としてだけではなく

(拓殖大学 政経 四年 小林貴由)

今回、写真班として合宿にやって参りました。ですから、写真だけを撮っていけば使命を果たすことはできたでしょう。しかし、せっかく合宿に参加しているのだから、何かを発見しようと心掛けました。そして、実際に発見があり、た

だ単に「お手伝さん」としての参加にならなくてよかったと思います。

いろいろとご迷惑をお掛けしたかもしれませんが、参加する機会を与えて戴き、ありがとうございました。

役目を終へ、フィルムも全て使ひ切ったあと

歌声に思はず胸へと手はいけどかまへるカメラはずでになきなり

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてしまつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様にはれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分階級の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に和歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば和歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、和歌を詠むことを人生の修業の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、和歌を歌ひ交すことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿三日目の午後、寶邊矢太郎氏（山口県立下松高校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後森林公園ハイキングを終へて夕刻までに各人が創作した短歌が提出されました。慌しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹れるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・ガリ切り作業を通じて翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに青山直幸氏（戸田建設株式会社）によつて、和歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は相互批評のあり方を自然に感得したのでした。

短歌創作と相互批評により互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において寢食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と深まつて行くことが確認されました。かうした短歌創作を通して展開された、日常生活にはまことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生々とした肉声が聞こえてきます。また心と心との架け橋としての歌がまさしく参加者に実現されてゐることを、御読み取り下さればと念ずる次第です。

短歌詠草（しきしまのみち） 合宿第一回目の創作作品

（参加学生の第二回目の作品）
（品は感想文の末尾に収録）

第一班

早稲田大第二文二 浦 義 勝

むしあつき山路あるきつつ下をゆくせせらぎ
みれば渴きの増しゆく

慶応義塾大商一 斎 藤 一 佐

ひぐらしの声を聴きつつ御友らと語りてゆけ
ば心楽しも

日本大文理二 山 内 暁 生

夏山にさしこむ日差しはつらかりしも時をり
ふく風心地よきかな

亜細亜大法二 森 田 了 導

夏合宿三日目の散策にて
おととひに合ひしばかりの人々と今は親しく
語りあふかな

福井工業大工二 海 津 貴 史

さはやかな夏風吹く中友どちと山道行けば心
楽しき

拓殖大商一 佐 藤 和 統

心開き友と交々語り合へば知らず知らずにあ
つくなりゆく

第二班

亜細亜大法三 西 村 敏 記

父母にありがたうとの言の葉を記せし男子の
み心うつくし

奈良大社会一 安 納 慎 人

真剣に講義を聴かむと誓へども眠気もよほし
口惜しく思ふ

拓殖大政経一 思 慈 国 典

照りつける日差しを受けてとめどなく汗をか
きつつ黙々歩く

高根大理三 小 西 秀 太郎

頂上にやうやく着きて思ふかなのどを潤す
ビールあらばと

東京経済大経営一 松 村 希 一

登り終へしばし木陰に入りたれば涼しき風に
疲れのいやさる

福井工業大工四 増 村 博 文

日をさけて木陰に入れば思はゆる幼き頃の夏
の日の事を

慶応義塾大法二 萩 原 俊 雄

緑葉のすきまゆ差し込む陽に向かひ登るにつ
れて青空広がる

第三班

九州大文四 井野口 武 志

長内先生の御講話をききて
あをもりのなまりことばはすなほにてやさし
きこころ通ひ来ること

立教大文二 上 村 隆 倫

山登りにて
友どちと楽しく語るひとときは疲れを忘るる
汗をかけども

北陸大法三 長 田 昇 大

照り返す強き光はまぶしくて木陰より出でて
まなこくらみぬ

拓殖大政経二 石 沢 興 二

どこまでも険しく続く山道を越えて見えるは
どんな景色か

関東学院大法二 稲津 利昭

暑さ耐え山道登りやすらへば流れる汗も心地
よかりき

中央大商一 八幡 雄

我思ひ語れど友に伝はず力の無さにくやし
さまさりつ

福井工大三 久保 博之

激論の終りて友らと語らへば話しはふくらむ
旧友のごとく

第四班

島根大理三 新宮 一

長内先生の講話をお聞きして

父母に正座しあいさつしなさいと言はれし言
葉に胸を打たれる

東北栄養専門二 金野 拓見

歴史を知る

サイパンに命をかけて戦ひし先人の思ひに胸
うたれたり

長崎大教育四 本多 康弘

散策の折りに友と語りて

父様に応ふる我になりたしと汗を流しつ君は
語らる

酪農学園大酪農四 南 邦彦

北海道を後にして
幾日も故郷離れて過ごせども人との出会いの
日々は楽しき

明治大文二 秋元 俊洋

三日間の勉強づくめの疲れ飛ぶ友らとともに
山に登りて

拓殖大外国語一 産方 弘二

山登りにて
ひたすらに蟬鳴く道を突き進み我らの顔も赤
くなりゆく

第五班

福井工業大工二 林 貴幸

山道を汗をかきつつ登りきて見はらす町の景
色美し

鹿兒島大農四 織地 孝幸

七沢に初めて会ひし友どちと笑み語りゆく山
道楽しも

東京大工四 松岡 勲

ファンパレル大佐の妻マリナさんの手記
を読んで

御主人をテロリストらに殺されし奥さんの悲
しみいかりなむ

奈良大社会二 赤山 幸満

七沢で友と語らひ武士道のわが心にもあると
感じぬ

日本大芸術三 結束 一成

疲れすぎ食べる気しないメンチカツ捨てるに
は惜し意地でも食べる

近畿大理工一 蔭山 武志

班別研修にて
胸内を友に述べたしと思へども言葉にならず
はがゆきろかも

島根大教育三 三島 明

名越先生とお話して

先生の御著書持ち来てお手づからサインいた
だかんと待ちに待ちたり

班討を終はりてすぐに先生のもとにかけつけ
思ひ述べたり

第六班

九州大法二 星野 大輔

木に止まる虫を取らむと網を持つ子どもらの
姿遠くに見ゆる

明星大人文四 高橋 幹人

我つつむ清き大空見上ぐれば熱くこみあぐる
胸の高鳴り

日本大文理三 阿部 友 則
部屋うちに差し込む光あふぎつ、心明るく生
さんと思ふ

東京大教養二 加藤 邦 夫
汗をかき坂道登ればいつもより強く聞こゆる
蟬の鳴き声

福井工業大工一 鈴木 慎 二
山登り額に流るる汗さへも風に吹かれて心地
よやかな

早稲田大政経七 田 中 裕 一
吹く風にざわめき揺るる森の木は泳ぐごと見
ゆ青空の下

東京工科大工四 石 澤 寛
先人の遺書に書かれし「ありがたう」の
一言の意に思ひをはせる

第七班

早稲田大政経二 伊藤 俊 介
見はるかす地平にかすむ家並のいづこの方に
父母の待つらむ

福岡教育大教育一 井 上 裕 介
真夏日の山路友らとうちとけて語りひ行けば
暑さ忘るる

亜細亜大経済三 前 原 隆 三
物事を追求すれば新しき疑問が生じまた精進
す

日本大通信四 石 井 信 博
み友らの語れる言葉にこめられし想ひに心を
寄せてゆきたし

金沢工大工三 浜 田 豊 富
山路をはしやぎつつゆく友見れば疲れし我も
力湧き出づ

佐賀大理工三 和 田 晃 次
散策の出発前
気づかひし昨夜の雨雲消え去りて空晴れわた
り心うれしき

福井工業大経営工一 東 山 敏 之
山道のわきを流るるせせらぎに耳を澄ませば
心なごめり

第八班

東京法律専門法律三 濱 田 和 彦
「天翔る青春」を見て

特攻でゆかれし人の素直にてけがれぬ心を我
も持ちたし

国民文化研究会 古 川 広 治
竹本先生の御講義を聴きて

乱れたる世の風潮を正さむと我らに向ひて語
りし師はも

富山大理二 塩 谷 芳 正
向きを変へ速さ変へつつ空を飛ぶトンボの姿
おもしろきかな

防衛大人文社会二 清 水 洋 平
木々のしげる山道に入れば四方より蟬の声し
きりに迫りくるかな

立命館大経営一 北 条 忍
「天翔る青春」を見て
突撃をひかへしつかの間戯れる若きらの笑顔
を神々しく見つ

早稲田大第二文一 松 下 文 彦
森林の中を歩きしときに詠める
虫の音を聞きつつたどる山道に幼き頃を思ひ
出しけり

第九班

福岡教育大教育三年 別 府 正 智
古川班長へ
花々のひとつひとつを吾がために教へくださ
るころのうれしき

大阪外大外国語三 原 川 貴 郎
参加者の名簿の中に原川の名前を見つけはつ

と驚く

国民文化研究会 小柳 志乃夫
ひぐらしのしきなく夕べ班室に若き友らは歌
をよみゆく

富山大人文四 山田 浩司
木の陰に涼みてあれば草原を吹きくる風の心
地よきかな

明星大人文二 小林 春輝
鳴きしきる蟬の声聞きひたすらに我は歩きぬ
友の後を追ひ

拓殖大政経一 鹿志村 裕
祖国への熱き思ひを語りゆく友の姿は武士
のごとし

九州大経済二 石井 英俊
西尾幹二先生のお話しを聞きて

特攻機の海に落ちゆく姿見て数多の拍手わき
起るとふ

いかばかり思ひをこめてゆかれしと先人の御
ころ思へばかなしも

第十班

東京大文二 楠田 大蔵
若き日に学びし姿を今知りて父への思ひさら
に深まる

学習院大文一 濱田 英毅

沖繩に散りし幾多の若人の皇國を思ふ心尊し
国民文化研究会 松井 哲也
竹本先生のご講義をお聞きして

おだやかに語りゆかるる師の君の声は次第に
厳しくなりぬ
「神風は文化を残した原爆に文化はあるか」
と語り給ひぬ

早稲田大商六 青木 雅弘
一人にて国を守るはできねども父母の幸せた
ただだ願ふ

法政大経済三 土生 直樹
二年前友と語りし同じ場で新たな友と語るは
嬉しき

帝京大法二 横畑 雄基

ひさびさに野原の上に寝ころびて空を見上ぐ
る一時ぞ楽し

第十一班

武蔵野音大器楽二 小林 祐子
ひぐらしの声迫りきて強き風吹きぬけてゆく
友らの中を
福岡教育大教育二 龍 雅子
緑濃き林の中ゆ聞こえくるひぐらしの声のさ

びしかりけり

宮崎大教育二 高尾 泰子
左にも右にも切り立つ尾根道を友らとともに
歩みゆきけり
愛知学泉大経営一 星野 望

帰り道の険しき坂を登りきて汗ばむ肌を涼風
の吹く

九州大農一 志賀 慈子
広々と澄みわたりける夕暮れの空にひびくは
ひぐらしの声

東北女子大家政二 新松 美代子
つかの間の憩へる時も友どちと心はずませ夢
を語りぬ

第十二班

東京女子大現代文化一 安東 直美
山道を汗かきながら登りゆけばひぐらしの声
聞こえてすがしも

麗澤大外国語三年 田中 美智代

ひぐらしとミンミンゼミの奏であふ声聞き
つつ森かけを行く
東京大文四 山口 花子
ビデオ「天翔ける青春」を見て
死してなほ国守らんとふ若人の熱き言葉胸

に響きぬ

国のため若き命をささげたる若人の思ひ尊しと思ふ

東北女子大家政二 松田 英里子

青々と草木茂りし山道を友と歩けば力湧き出づ

佐賀大教育二 橋本 さつき

大山広場の木かげにて

わが肩のかまきり見つけし男とも友の声きこえて
我はしばしとまどふ

とまどひて班員ともらの顔を見やれどもただ見守れりなすすべもなし

亜細亜大法二 斉藤 百合香

自然教室に向かふ

くねくねと曲がれる道は果しなく宿はまだかと
気持ちせかる

第十三班

熊本大文四 渡邊 愛

シヤッターを押してと頼む山道に心通ひて
笑みあふれけり

東北女子短大二 留目 郁子

山路にて

道の辺の人知れず咲く山吹に我の心はきよら

かになり

友がきと共に笑ひつ登る坂急な坂とて苦し
はなし

東北女子大家政二 伊藤 玲

木もれ日の中を友らと語らひて歩みてゆけば
楽しさまざれり

長崎大教育三 馬場 麗子

青山学院大国際政経二 武市 紫麻

夏空の大きな雲にも手が届くごとき思ひす友
がきとなら

竹林を過ぎゆく風に影はゆれかすかに触れる
心の琴に

学習院大文一 坂東 幸子

中村学園大家政四 前田 美幸

山登りにて
木をつかみとどまる吾は友どちのさしのぶる
御手に助けられけり

登り終へ喜びあひて友どちとの絆のますく
深まる心地す

第十四班

日本女子大人間社会二 青山 詩野

ありし日の祖父に似たる人の姿みてかのなつ
かしき面影を追ふ

長崎大教育三 山田 光子

班別研修の折、長内先生のお話をお聞き
して

天皇すめらみの御心語りゆかるるを聞きてぞ胸のあ
つくなりゆく

天皇すめらみのやさしき心を心込め語らるる姿に胸
せまりくる

早稲田大教育三 久保田 陽子

「こんにちは」初めて会ひし人にでもほほえ
み交せる心持ちたし

笑顔もて挨拶交せば自づから近くなりゆく互
ひの心

東北女子短期大生活二 中野渡 えみ

散策の山道友らと語りあへば心通ひて喜びあ
ふるる

中村学園大家政四 丸山 順子

みどり照る草むらの上舞ひとべる黒き蝶々の
めづらしきかな

福岡女子短期大秘書一 諫山 由紀

長内先生のお話しをお聞きして
先人のいかなる想ひで天皇すめらみを慕はれられし
か聞きたしと思ふ

国民文化研究会 星野 有佳子

レクリエーションの午後になりて
頭痛して保健室にて休みつつも午後の子定の

気にかかるなり

第十五班

防衛大人文社会四 横山 尚子
偶然に思ひの通じる人に逢ひ心は軽く足取り
軽く

福岡教育大教育一 相浦 佐知子
名のとほりみな日に向かふ向日葵の姿を見れば
ば力湧きくる

白百合女子大文二 磯貝 綾子
み友らと語り合ひつつ我が心潤ひのあるもの
とならばや

国民文化研究会 清水 久仁子
初めての講義にとまどふ友どちは精一杯の言葉
葉語りし

班別の研修終る放送はもう鳴りたるかとおど
ろきにけり
夏の日はまだふしきまでに輝きてひまはりの花
咲きはこりたり

東北女子大家政二 山田 美
初対面意見のたがふことあれど本気で語りあ
へしうれしき

福岡大薬二 秀島 里沙
知識なく不安に思ふ我なれど皆真剣に耳を傾

むく

第十六班

中村学園大家政二 松永 美香
重なれる山道見つつみともらと語りふひとと
き楽しかりけり

中央大法四 松浦 美枝
志定めしままにいさみ立つ松陰の生き様に我
感嘆す

長崎大教育聴講生 白石 由美子
小田村先生の開会式のお言葉をうけて
日の本を背負ひて立つは皆様の他にはなしと
師はのたまひぬ

我にむけかけられしものと思はれてこたへゆ
きたしと胸あつくする
東京都立大文一 小田村 明子

暑さ中の散策にて
たどりつきし公園^{その}にてもらひしウーロン茶一
気^そのめばただにうましも

慶応義塾大文二 山口 園子
ビデオ「天翔る青春」を見て
愛したる人守らむとひとすぢに飛びたつ姿に
心打たるる

ビデオ「天翔る青春」を見て

東北栄養専門学校二 福澤 果織
感動を和歌にたくさむといくたびも挑戦すれ
ど言葉いで来ず

日本短期大商経一 島村 裕美
ビデオ「天翔る青春」を見て
家族へのつよき思ひを胸にたたへ祖国に殉ず
る若人たちはも

第二十一班
国民文化研究会 村山 寿彦
ひぐらしのしき鳴く道を班友^{ともち}と順礼峠さし
登りゆく

木もれ日の沢の歩道を山風が木々をゆすりて
吹きぬけてゆく
小馬谷 秀吉

「天翔ける青春」のビデオを見て
わが国のために死したる若者のりりしき姿に
涙とまらじ

みどり汽船株式会社 白石 義器
幾つもの講義を聴きて疲れたる夕べうれしき
ひぐらしの声

小樽潮陵高校 本田 格
ひぐらしの鳴き継ぐ森の細道を汗をかきつつ
友と歩めり

友と歩めり

杉の木にとまる小さきひぐらしの透き通る羽
根見つめて居りぬ

(社)福岡県中小企業経営者協会

三村 佳行

ひぐらしの声を聞きながら山行くに喘ぎてゆ
くに気付きおどろく

国民文化研究会 松 吉 宣 和

このよびにみたままつりに仕へむと神籬立つ
ればせみのしき鳴く

七沢の緑ふかきにそよ風のすがしかりけり友
と語れば

第二十二班

国民文化研究会 山内 健生

ビデオ「天翔る青春」を見て

五十年にあまる年月経ぬれどもみたまを祭
るべ鳥の人々

特攻の若きわれらの同胞を五十年ののちも
偲ぶ民はも

ペリユリユー鳥の民のみ顔やそのみ声うつつ
の如くに臉に残りぬ

南の民のみこころせまり来て思はずわが
胸あつくなるなり

森村学園 林 宏之

み国思ふあまたの若人に出合ひてよめる
国のこと世界のことを学ばんと集ふ若きらた
のもしきかな

日々をおのが上のみこだはりし過ぎし日の
の思ひ出さるる

キャノン販売株 石黒 勝 己

沖繩の戦の話し身にしみてぢかに目にせんエ
イサー踊りを

国民文化研究会 山田 幸治

このたびもいやまし良き友得んものと期待を
胸に集ひ来にけり

坂道を登り来たりて吹く風のすずしき峠でし
ばしいこひぬ

国民文化研究会 眞田 博之

就職後初めて班に入つて勉強をする
班員の一人となりて討論に加はり学ぶはうれ
しかりけり

もろともに語り合ひたる師や友の言の葉聞け
ば時の短し

第二十三班

国民文化研究会 平 楨 明 人

友どちと険しき坂道のほり来て峠に着けば風

もすずしき

出光興産株 大三輪 晃

汗をかき山を歩きて思ひ出す夏待ちわびし幼
き日々を

国民文化研究会 服部 朋秋

ものなし

国立リトグラフ工房代表 田中 光成

夕刻の混雑かこつサラリーマン花火大会電車
の混みて

出光興産株 古池 勝 義

雑草なる草はなしとぞ先帝は草木愛するみ言
葉給ひき

国民文化研究会 齋藤 勝

長内先生のご講話をお聞きして
大子をば語ります師のみ言葉の強き調べの伝
はりて来ぬ

山口銀行 井上 孝史

猿ならばたやすく登らん七沢の山路険しく
遅々と進まず

第二十四班

(有)テクノベイト・コマツ 重田 憲克

長内俊平先生のお話をお聞きして

父母のありてぞ今の我もあり「ただいま」の挨拶続け行かなむ

茨城県商工会連合会 佐々木 徹

誠なるもののふの道この我もあゆみゆきたしはげまざらめや

タック(株) 石津 隆宏

美しき花を見るごと美しき国柄愛でよと師はのたまひぬ

吉川建設(株) 佐々木 栄幸

まぶたをば開くれば強き夏の陽のまなこに入りにて真白にぞ見ゆ

宮崎神宮 石塚 和也

杉こだち夕日さへぎり行く道にひぐらし鳴きて涼しかりけり

建設省富士砂防工事事務所 河野 剛士

我が国の歴史語るを自らの努めと思ひ合宿に望めり

日の本の永き歴史を貫くは我が皇室の御心と知る

第三十一班

(社)福岡県中小企業経営者協会

井上 美由紀

緑濃き七沢の山を仰ぎつつ未知の扉を開かむ

と思ふ

市ヶ谷漢方クリニック 田中 美由紀

やうやくにたどりつきたる山頂の前に広がるパノラマの世界

日本青年協議会 島村 恵美子

森の中汗をふきつつ登りゆけばすがしき風の心地良きかな

宮之城町立佐志小学校 窪田 実代子

班別討論にて徳永先生のお話をお聴きし

て

せつせつと願ひをこめて語らるる御言葉聞けば胸のつまりきぬ

尚綱大学就職課 安田 留美

流れゆく雲の陰映す七沢の山を窓辺に飽かず眺むる

尚綱短期大学事務局 酒井 由希恵

散歩道ふと立ち止まりひぐらしの鳴く声ききて暑さ忘るる

(社)福岡県高齢者能力活用センター

元氣よく夏山登る我がほほに風さはやかに吹き渡るかな

牟田 奈津江

第四十一班

修猷館高二年 中川原 英和

むし暑き林の小道友どちと語りつつ行けば汗にじみくる

日本航空高一年 小林 秀行

やっとなつきひとやすみだと思つたら「はい行きますよ」と指揮班はいふ

つくば秀英高一年 川井 大和

ひさびさに汗をかきつつ山道を登りてゆけば風呂の恋しき

国民文化研究会 國武 忠彦

目の前に緑の山は迫りをり白雲しづかに流れゆくなり

夏空をしづかにながるる白雲は山の彼方にかくれゆくなり

事務局

東京都立新宿高校一年 伊佐 直子

本を売るのを手伝って

特攻隊のビデオテープを皆とみて笑顔で死にゆく人に驚く

国のため命ささげし若人のビデオテープの売れてうれしき

慶応義塾湘南藤沢高校二山 口蝶子
夜、仕事を終へ部屋にもどる時に

見あぐれば暗闇の中輝ける無数の星に心洗は
る

きよらかにきらめく星のまたたきにひるまの
つかれしばし忘るる

事務局写真担当

拓殖大政経四年 小林 貴由
虹立つと慌ててカメラ取りいくも撮ることで
きぬにじのかけはし
写真撮り背中に向かひて感ずるは教へききい
る人らのひとみ

国民文化研究会短歌

(社)国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎
お二人の講師は共にお心の深き思ひを告げた
まひにき

明日はいかになりゆくらむか日の本の国の姿
を憂ひたまひき

わが憂ひ奇しくもお二人のみ心と共なるを知
り忝きかな

元・日特金属工業(株)常務取締役

加納 祐五

七沢合宿雑詠

ひととせのいたづきみのり七沢につどへる友
は二百有余名

若きらに老ひもまじりてつどひこし思ひはひ

とつ国を憂ふる

阿夫利山山ふところの学び舎は木々のみどり

の色濃きところ

思ふどち語るころのなごみつ、眼をやれば

木々のさゆらぎ

み空には白雲ながれ友どちにかよふいのちの

さましのばしむ

(二回目の作品)

合宿終りの日の朝に

朝まだきねやの中にて遠くたかく鳥のなく音

をさくがうれしき

鳥の音に目覚むることのさきはひもけふのひ

と日となりにけるかな

合宿にて最も痛感せしこと一つ

大御稜威かがふることは大御歌誦するに至極

すとせちに思へり

(株)宝辺商店・代表取締役 宝 辺 正 久

鐘嶽のいただきの杉に朝日さし空晴れわたる
さやけかりけり

山かすめて白雲いゆき高き木々に山鳩の声と
よむ朝廷

君が代の楽の音おこり若きらとならびて仰ぎ
ぬ昇るみ旗を

昇る旗を見つめし友を思ひけり共に生きこし

その友や亡し

朝露の夏草の野に相見てしその歳々のいやさ

かりけり

(二回目の作品)

小柳陽太郎さんの講義をききて

君と民と一つ心にたたかひし日露の役を友

は語りぬ

剣太刀清き光をあらはさむ時ぞとみうたよま

せたまひけり(明治天皇御集)

軍のにはに立たすとふ夢みそなはしし大み

ころろに泣かざらめやも

ながめます秋の夕の空にしづむみ国のとはの

いのちかなしも

胸さくる思ひに堪へていさましくみいくさに

ゆきぬ日本の民は(山桜集)

強きやさしき心そのまま歌ひいづるつはもの

あまたありき明治は

民族の精神を世界に表現せし明治遠しと胸う
づくなり

（社）国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎

病床よりの中田君のみ便りを読む

重き病の床ゆたまはりし一ひらのみたよりうれしあかずながむる

奥さまの制止も聞かず合宿に行くところあらがひしとふ君がかなし

たしかなる筆あとしるし神々のまもりかかくも癒えたまひぬる

合宿に送りましたまひし九人のめぐし子いかにしのびますらむ

病み床の窓辺はるかに合宿を偲びます思へば胸熱さかも

合宿地に君まさねば淋し早も病癒えませとただに祈るも

（二回目の作品）

間をおかず発言を求むる学生の熱気あふるる全体感想発表

己れの中にひそむ力にふれしよろこびを語る若きらの言葉うれしも

歴史の美しさを今さらに思ふと壇上に語りゆく若きらの面かがやけり

合宿を終へし今にして父と母と祖父を語りゆく若きらかなし

日の本のいのちのいぶきいまここによみがへりくるを正目にみたり

病ありて姿見せざるみ友らよこの若きらの姿見せたき

元開発電子技術（株）取締役・前国文研事務局局長 長内俊平

中田一義兄を偲びて
中田君文書くまでになりたりと告げる友の顔かんばせ明るき

手にとりて高志より賜びしわが友の文よみゆけば心安らぐ

合宿に連れられぬことを心より詫ふとふ文は涙ぐましも

たどたどしき夫の筆あと許しませと添へ書ありてなほむねあつし

よき友よみ心おだに奥様の言のまにまに養ひ給へ

あらむ

七沢の集ひの庭にさす月を君も越路に仰ぎて

（二回目の作品）

至らざるわれをも友と賞でくるる友らとすぐしし幾日こひしも

激論をたたかはしつつ更けゆくを忘れてすぐしし夜もありけり

至らざる我のことはを賞でくるる学生あまたあり寄りてきしかも

「先生！」と呼びつつあとを追ひて来て語る

をきけば吾子の如しも

生くる力また恵まれて父母のねむる故山に帰りかゆかむ

なゆる足ひきさずる友よ腰なづみ背まがれる友よさきくありこそ

朝夕に向ひ仰ぎし鐘ヶ岳に朝るし雲よ夜ぬし月よ

元・尚綱学園理事 徳永正巳
病床の中田一義氏を偲びて

いたつきの床ゆたばりし北陸の友の便りに胸つまりけり

こぞの夏若人あまた誘ひ来し君は来まさず心さみしき

御家族の篤き看護を享けまして病癒えかしと切に祈るも

（二回目の作品）

七十路のけはしき坂をも乗り越えて速き道のり進まざらめや

ただならぬ祖国の姿憂へつつつとめざらや一日を

年毎に乱れ行く世を正すべく力合はせてつとめざらめや

拓殖大学・総長 小田村 四郎
慰霊祭準備

ひぐらしにつくつくほうし啼きつぎて秋立ち

にけり丹沢の里

みまつりにはをかこみてさみどりのあけほ
のすぎは立ち並びたり

大空は青く澄みたりこのゆふべ星冴えわたり
さやけるべし

天がけるみたまのふゆを祈りつつみにのい
のち護りゆかなむ

(二回目の作品)

「夜の集ひ」の終了間際、第九班の鹿志

村裕君(拓大一年)急に倒る

樂しかりし集ひの終らんとする直前に突然君
は倒れ給ひぬ

たちまちに友らかけ寄り手当てすればやうや
く唇に赤味戻りぬ

救急の連絡とれずとり急ぎ車は病院さして出
でゆく

付添ひし服部(朋秋)君の連絡にて大事なし
と聞き胸なでおろす

治療終へ無事七沢に戻れりと報告を受け心安
まりぬ

「参加者による全体感想自由発表」(最

終日)

次々に思ひ述べゆく若き友らの言葉すがしく
わが胸をうつ

改めてこの合宿の尊さを教へられけり若き友

らに

株千代田コンサルタント・代表取締役専務

上村和男

齋庭^{ゆにば}べをつくりてをれば亡き友と共にはげみ

しありし日慰はる

み^{おや}おらと共に天降らむ亡き友にあふ心地し

て齋庭^{ゆにば}つくりぬ

友ら皆国の行く末憂ひつつ良き国にせむと力

あはせて

(二回目の作品)

中田一義君へ

加賀の地に病に倒れし友はいまやしき思ひ
にすぎしをらむ

リハビリにはげみをらむその姿まみゆるこ
としかなしきこらへ

リハビリにつとめはげみし甲斐ありき病いえ
ゆくさまを文に見つ

一日も疾く^と疾く癒えよまみゆる日待つももど
かし君に文をかく

神奈川県立平塚江南高校校長

国武忠彦

(二回目の作品)

三人の若き友らよこの出会ひ忘ることのあ
るまじと思ふ

素直にて雄々しき心もちつづけ学びの道をつ

とめ励めよ

日商若井(株)・ガス石炭本部副本部長

澤部壽孫

中田一義兄の便りの合宿地に着く(合宿

二日目)

床に付す友の手書きのみ便りの着きて嬉しき

高志の国より

力ある友の手書きの文字見れば癒ゆる日間近

かと思はれにけり

九人の友送りたる君なれば合宿に来得ずて口

惜しからむ

慰霊祭の齋場作り

み祭りの齋場^{ゆにば}につくれば風わたりひぐらしの声

たえず聞ゆる

吹き荒れし風和らぎぬ竹立ててしめ縄はりを

終ふる頃には

亡き友も天降りますらむ七沢の合宿の後逝き

ませし君

(二回目の作品)

合宿最終日

七沢の朝の空にうす曇りはや終らむとす合

宿教室

床に伏す友に告げなむ合宿はお蔭様にて無事
に終ると

壇上に立ちて思ひを述べくるる若き友らの姿

胸うつ

合宿の火は絶やすまじかかかる友国のをちこち
にあると思へば

今は亡き友の笑まふる顔浮び「良かったね」
との言の葉を聞く

新日本製鐵(株)プラント事業部機械製造素材部次長

今 林 賢 郁

リハビリ中の中田君を思ふ

突然の病に君が倒れしゆ三ヶ月過ぎゆき葉月
となりぬ

あまたなる学生を求めてひたぶるにこの
一年を生きこし君よ

無念なる思ひにゐますかさはあれど学生は来
りぬと君に告げたし

すみやかに記憶よ戻れふたびもまみゆる時
のひたに待たるる

(二回目の作品)

「参加者による全体感想自由発表」

若きらはあふるる思ひを次々に語りゆくなり
力にみちて

よしやよしこの若きらがまた一人生れいづる
を念じて努めむ

日本アムウェイ(株)ディストリビューター

古 川 修

竹本忠雄先生のご講義を拜聴して

「騎士道と日本」と題し師の君は我らに訴ふ
武士の道

乱れたるこの日の本を正さむと語りし言葉
の調べはつよし

若き友に託せし思ひは言の葉の一つ一にあふ
れ出てけり

(二回目の作品)

七沢の深き山脈うつくしく閉会式の迫りくる
かな

静かなる講堂に居て思ふかな一日一日のあま
たのことを

今日よりは思ひ新に伝へて行かむこの合宿
で学びしことを

(株)竹中工務店プラントエンジニアリング本部部长

稲 津 利比古

木の間より漏れくる夏陽の草に映えそよ風涼
しこ順礼峠

峠にて休みをとればをちこちゆ蟬鳴く声のに
ぎはしきかな

ひぐらしの鳴く声しばし聞きをれば自ずと疲
れ消えゆく心地す

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」を聞きて

うちつけに己が思ひを述べたまふ若き友らを
頼もしと思ふ

若きらの国を思ひて発言す熱き思ひに胸を打
たるる

(株)講談社宣伝局次長兼宣伝企画部長

磯 貝 博

吾娘のことを

間際までしふる娘にいひきかせ荷物ととのへ
家いでたちぬ

心こめ語る講師の一言を聞きのがすらむなさ
けなきかな

班友と笑み交しつづつ楽しげに語りゆく姿に心
やはらぐ

(二回目の作品)

止むを得ざる社用のため中途退出

うしろがみひかるる思ひあるものの力えられ
てすがしくかへりぬ

東急建設(株)東京支店建築部工務部次長

奥 富 修 一

幾度か準備のために通ひたる「自然教室」の
なつかしきかな

新たなる友を迎へて若きらの力とならむ合宿
なれかし

今の世を見捨てる力育ぐくみて歩きたまへと
切に祈るも

(二回目の作品)

バスに乗り帰る参加者らを見送りて合宿は今

無事に終りぬ

過ぎし日は風の如く去りゆきて今やうやくに
ひぐらしを聞く

福岡県立嘉穂高等学校教諭

小野吉宣

幾へにもつづく山並遠き御代に日本武尊のふ
みわけし道

青垣に影をおとして白雲の走りてゆけば緑か
がやく

(二回目の作品)

日の本の尊きものは尊しと伝はる世界有難き
かな

中島法律事務所弁護士 中島繁樹

西尾幹二先生の講義

交渉の成らず起これる戦争にあれば謝罪は不
要と言はる

米軍の空襲こそは人道に対する罪と人は知る
べし

(二回目の作品)

来年の阿蘇の集ひは青年の家なる場所に決ま
りしと聞く

国思ふ心ひとつに統べられてわれら集はむ阿
蘇の学びに

熊本市役所・企画調査局・情報企画部

折田豊生

戦ひに敗れしかの日俣ばする果てなく澄める
夏の空はも

くだちゆくこの世に念ひ遣しつ父は逝きに
きこのたび叔父も

正道に立ち返る日の世の様を想へど仰ぐ空の
虚しさ

師の君に導かれつつみ友らにたすけられつつ
行かざらめやも

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」の折に
新たななる友ら出でて遙かなる道にぞともに
連なるうれしさ

(社)国民文化研究会事務局長 山口秀範
娘三人と合宿に参加せり

出会ふ度に笑み返す娘のその笑みに慌たゞし
さを忘る、心地す

手慣れたる仕事なしく末の娘の大人びゆく
を面映ゆく見き(以上三女)

初めての合宿参加に戸迷ひも憂ひもあらむと
後姿追ふ

時折は鉛筆走らせご講義を聴く様見れば気懸
り晴れゆく(以上二女)

質問者のマイクに向かふ娘を見つ、何問ふな

らむと氣遣ふ父は

御講義を確と受け止め発したる問ひにしあ
れば頼もしく聴く(以上長女)

家に待つ母に語らむそれ／＼に心尽くして学
びしことぞ

「娘三人と挙りて合宿参加」てふ我が夢は
今叶へられたり

(二回目の作品)

内海勝彦運営委員長登壇
最終日の朝のならひぞ運営委員長は今壇上よ
り思ひ述べゆく

合宿の一コマ毎にたどりつつ皆の思ひを統べ
て行くかな

去年の初夏に「来年は君に」と請ひし日ゆ長
き月日を務め給ひし

語り尽きず終電時刻をやり過ごし我が家に泊
まりし事も幾度

一年の努力は実り今ここに心しむる集ひ果て
行く

熊本県立第二高等学校教諭 白濱裕

一歳をへだてまみえし教へ子のいそしみを
るを見ればうれしも

去年よりは理解もゆきしと語りくれし君の面
輪の輝きて見ゆ

学び舎に帰りしのも友どちをさそひて学び

続けたしとふ

(二回目の作品)

第七班の友へ

来年は阿蘇にて会はむこの縁ゆめ忘るまじ相
離るとも

住友電気工業(株)生産技術部・主幹

布 瀬 雅 義

丸太段のけはしき坂道み友らと語りつつ登れ
ば息切れ苦し

息切れの苦しかれどもうなづきつつ聞き入る
友に話し続けたり

(二回目の作品)

伊佐裕先輩の「体験発表」を聞きて

何事も中心線があるといふ兄の御言葉力あふ
るる

中心線を高く伸ばせば自づから人の心も伸びて
行くとふ

十年の御業貴とし現世に志をば高く掲げて

北村公一兄の「慰霊祭の説明」を聞きて
壇上に我が友の名大きくも張り出されたり我
も誇らし

しみじみと心をこめて語りゆく友の言の葉胸
にしみ入る

「山桜集」と明治天皇御製

親思ふますらをのこのまごころの上思はるる

大御心は

くだくべきロシアの仇にもいつくしむ事な忘
れそと示したまひぬ

大君の心を受けて道端の仇の屍に花置く人あ
り

ますらをやその妻の寄す草々の歌にて知らす

大御心は

班別短歌相互批評

我が班の歌稿を見れば観念やかけ声のみの歌
の多しも

まことなる心の様見えすしていかにせむか
と心まどひぬ

一人一人こころのうちを聞きゆけば我にも通
ずる思ひのひそむ

一人一人のこころの様を素直なる大和言葉に
映してしかな

二度目なる歌をしみれば言の葉は整はざれど
もまごころ見ゆる

まごころを歌はむとむかふみ友らの励みの様
ぞうれしかりけり

ふしぎなる敷島の道の力にぞ友らの心の開け
ゆくかも

(株)中央塩ビ製作所取締役会長

星 野 貢

朝の集ひ(初日)

さはやかに晴れ渡りたる青空に白雲しづかに

移りゆくみゆ

庭の辺の森の木立ゆさまごまの蟬の鳴く声き

こえくるかな

若きらの歌に合せつ、体操する軽き身ごなし

羨しく思ふ

(二回目の作品)

閉会式

君が代を唱ふ歌声たからかに明るくそろひて
場内に満つ

同信の友らと共に声のかぎり高らかにうたふ
思ひ一つに

つひの道行きつとくころ真心を折りにふれて
は詠ひ交して

不動産鑑定士 松 吉 基 順
ゆには 齋庭をば友らとつくれば夏の陽の照り汗ばむ

も風すがしけり
齋竹を四方に立つれば強き風吹きつけ小枝

はゆれ動くなり
夏の風つよく吹きつけ注連縄につるせし紙垂

の舞ひあがるかな
ひらひらと風に舞ふ紙垂真白にぞ輝きて見ゆ

夏の陽あびて

(二回目の作品)

足らはねど力のかぎり語りあひ今終らむとす

七沢の集ひ

七沢に集ひて学びしまさ道を忘れず生きませ
若き友らよ

市ヶ谷漢方クリニック院長 桑 木 崇 秀

自然教室からバス停まで

一月前速しと思ひしこの路も若きらと歩めば
忽ちに着く

教室に帰り着きて

孫の如き若き乙女らにいたはられ今日のコー
スを完歩し得たり

カナ／＼と鳴く声聞けば暑き夏も終らんとす
るかそぞろ悲しも

(二回目の作品)

慰霊祭にて

啾々の声の聞ゆる常闇の祭りの庭に頭垂る
れば

靖国をなほざりにする今の世を叱るが如くに
啾々の声する

今の世を嘆き給ふか英霊の声と思へば身の置
き所なし

偶感

後に続く者を信ずと言ひて逝きし戦友の心を
無にしてよきかな

元・法政大学人事部長 香 川 亮 二

慰霊祭のゆにはつくと夏の日のたじさす広

場に友ら集ひぬ

去ぬる日の集ひの中に逝きし友のみ姿ありし
と思ひ出らるゝ

いき／＼と立ち働きし亡き友よみ祭りの庭に
天降りますらむか

(二回目の作品)

葉月十日暮ちかくして西空はあはき茜の色に
染まりぬ

夕闇の迫る七沢この夜はみ魂しづめのみ祭り
を迎ふ

集ひ半ばやむなくいなむと車待つに小止みな
く 蜩の鳴く

四年前班長たりし女子のまなく交通事故に
たふれし思はゆ

そが班にともに学びし長崎の友に会ひえしこ
のたびの集ひも

時に涙し時に笑ひつ班長のつとめをつくす姿
ともしき

ともどもに心ひらきて語り合ひ心ゆたかに帰
りたまへや

舞岡八幡宮宮司 關 正 臣

慰霊祭場作りにて

先逝きし友らのみたままつるべきにはつくり
する午後のひととき

仰ぎ見るみ空にかかる細き月は今亡き友らも

仰ぎ見にけむ

若きらに願ひてやまず皇国の行手はるけく守
り行くべく

皇国の行手はいまし若きらの肩にかかれり頼
む汝等

竹本先生御講義

武士道は皇室のむた伝はると宣らす御言葉有
難きかな

みおやらのみたまを日毎まつりますわがすめ
るぎに仕へまつらむ

八月九日(合宿地にて)

半旗をば掲げて五十二年の昔のみたまを
偲びまつりぬ

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」を聞きつつ
みおやらのいのちに触れし若き等の言葉聴き
つつ涙にじみ來

元福岡県立若松商業高等学校校長

竹本先生のご講義

騎士道と武士道の歴史を歴然と示し給へり有
難きかな

道極めつくしてやまぬ先生の学問姿勢に心う
たれぬ

フランスの伝統教養を身につけて祖国日本を

憂ひ給へり

わが国の精神の危機適確に指摘しやまぬ憂国の人

(二回目の作品)

さねさし相模の里の七沢の合宿地はも杜かげ深し

講義室の窓ゆながむる杉山の緑豊けし心洗はれ

青空に白雲浮かぶ七沢の夏空の下われら集へり

年毎の合宿なれどあひ集ひ学ぶわれらの営み清し

元佐賀県立佐賀商業高等学校教諭

末次 祐司

遠く近く重なりめぐる丹沢の緑の山並に偲ぶ古里

山あひの杉の木立ゆ吹き来る風も涼しく心やはらぐ

班員と共に語らひ登りゆく山路に聞ゆひぐらしの声

(二回目の作品)

合宿地に寄せられし山田輝彦先生の御歌を讀みて

有難き友のみ歌をくりかへしくりかへし讀むみ心偲びて

いたつきの身をかへりみずひたぶるに国のゆく手を憂ひ給へり

み祖らの守りきたりし日の本の臣のまさ道いかで絶ゆべき

早や早やにみ病癒えてもるともに語らむ日をばただ祈るなり

元サンデン交通(株)・取締役 加藤 善之先帝の詠みましまするあけぼの杉繁れる庭に

たまたまつりする丹澤の山ふところの廣庭のあけぼの杉に

蛸のなく蛸のしき鳴く山の谷あひに時をりまじり法師蟬なく

(二回目の作品)

竹本忠雄講師の御講義を聴きて神風特攻隊は死して魂残しけり原爆投下は何

残せしやと大君の存在あらば武士道は又よみがへる永久

の生命にと日本の宝残せよと武士道は永久の生命と講師しめくる

元高等学校教諭・専門学校講師 関 口 靖 枝

竹本忠雄先生の御講義を聴きてすめらぎのいまして国のたもたると語れる

大人の言葉うれしき

(二回目の作品)

山内暁生君(日大・二年)を壇上に見て、三年前に急逝されし山内恭子さんを偲ぶ

「山内暁生」の名乗り聞くだに胸せまりあり、このお子がとまなこを凝らす

遠目には顔立ち見えねど素直にて明るき声はまさに君の児

にはかにも逝きにし君の愛し児は健やかにして爽やかなりし

航空自衛隊生徒隊 村 山 寿 彦

(二回目の作品)

全体感想自由発表を聞きて学生のこの道を信じ進まんと語る思ひをたのもしく聞く

この道を信じ真すぐに進まんと語る言葉に胸熱くなる

世代間のギャップを埋め得た喜びを語る乙女子美しく見ゆ

乃木神社宮司 松 吉 宣 和

七沢に二とせぶりに靈仕へむと神籬立つればせみの鳴きしく七沢の緑ふかきにそよかせのすがしかりけり友らと語れば

(二回目の作品)

班別研修

班員の心ひとつに発表はふたたび講義よみがへりけり

発表を聞きし心のむずかしさ我くち開きとどめゆかむに

本購入

本もとめ心もかるくペンをとりサインせし手も喜びたりし

キュービー株式会社 山本茂夫

ざわざわとこずあならして吹き上ぐる山風すゝし順礼峠道

ひとときの休み楽しみ友あまた思ひ思ひに集ひ語らふ

(二回目の作品)

朝まだき霞みに白くけむる峰にほととぎすの声高く響きぬ

合宿の流れをまるで絵のごとく言の葉たくみに語りかけをり

登壇しとつとつとした口調にて話しかけるは同信の友

歌つくらむと窓辺に座りて一人居ればセミ鳴く声のさやかに聞ゆ

気持をば素直に出せば自から歌となるとは聞きはをりても

心からほとばしりである思ひをば三十一文字に

表しかねつ

川崎重工業(株)環境装置第二事業部

山本博資

映画「天翔ける青春」を鑑て
気負ひなく帰するが如く死に給ひし若き先達の
のみたましぬばむ

靖国の庭で逢はうと認めし文の多かり胸に迫り来

(二回目の作品)

深夜のひとつとき
板床の広間に座して楽しくも日頃の思ひを語り合ひたり

寝ぬ前のつかの間のとき友ら集ひ語りつきなし夜のふくるまで

小田原市立足柄小学校教頭 岩越豊雄
くぐもれるおもひもなしやのびやかに夏の深山にうぐひす鳴くも

近き森にうぐひす鳴けば遠き山ゆこたふるごとさうぐひすの声

(二回目の作品)

起きいでてまづ空みれば朝あけの雲おほひたり雨つぶも落つ

あたたかき風も吹き来て一もとの紅の花
風にゆれたり

斎庭場のあけぼの杉の木末高くひときは輝く

夕づつのあり

みたままつりの時まつうちに三日月は山の端にかかれりはやしづまんとす

もえあがるかがりにあかく照されし真竹の斎庭神さびてあり

三菱重工業(株)監査役室長 島津正數
声をかけ手を取り合ひて乙女らは七沢のがけを上りゆきををり

すめがみの御楯となりて飛びたちし特攻隊員の遺書に涙あふれ来

聞きて

竹本先生の「騎士道と日本」の御講義を
慈悲深き心を持ちし武士の道は日本の文化なりとふ

武士の道を極めて生きたしと思ふ心のつり来るかな

(二回目の作品)

中田一義兄からの御便りを読みて
病床ゆ送り給ひし御便りの文字に力ぞあらはれてをり

一語一語力尽くして書き給ふ友の便りに嬉しさこみあぐ

神奈川県立秦野宮屋高校 原川猛雄

み友らと語りつつ登れば足どりも軽やかになりて峠につきたり

木々の間に吹きくる風は心地良く汗ばむ肌にはさやかに感ず

国立病院九州医療センター臨床研究部長

小柳 左門

(二回目の作品)

久々に会ひにし友と心なごみ語りつづけぬ夜の更くるまで

戸田建設(株)東京支店開発営業部

青山 直幸

竹本忠雄先生の御講義を聞きて

気品ある笑み浮かべつつ壇上に立ちたまひたる師の姿はも

尊き命投げ打ちてまで義に生きる騎士道ありしとふヨーロッパにも

悪徳と悪霊払はんと騎士団をひきぬ戦ひし聖ペルナールはも

病人や貧者救はんとみ命を賭して尽くせし騎士団尊し

騎士団の末路悲しもあらぬ罪に捕縛投獄せしめらるるは

(二回目の作品)

慰霊祭にて

夏の夜のしじまの中に朗々と歌のしらべの響きわたりぬ

祭壇を囲むが如く生ひわたるひのきのの上に星

一つ見ゆ

やみの中にはかにかがり火の燃え上り祭壇の様げざやかに見ゆ

祭文を読みゆく声のおごそかにしみ入ること胸に迫り来

燃えさかるかがり日の中に亡き義父のおもかげうつに見ゆる心地す

伊佐ホームズ(株)取締役社長 伊佐 裕

合宿の夜の日程を終へて

み友らは夜更くるまで各々の思ひのたけを語り給ひぬ

次々と話の主は変はれども友の心は一つつながる

(二回目の作品)

合宿四日目に仕事の為合宿地を去るに当たりて

心知る友どちと過しし合宿地を先に出しし我が仕事場に

大成建設(株)東京支店作業所長

川井 泰彦

笑顔にて僕は最後までいと言ふ吾子かがやきてたのもしく見ゆ

(二回目の作品)

馬にまで心を寄せる優しさを持ちし益荒雄この国護れり

是武士道と水師營の会见唄ひし亡父を思ひ出しけり

山口県立下松高校教諭 宝 辺 矢太郎

西尾幹二先生、男子班にお見えになりて終戦を迎へしかの日の夜は更けて母君は庭に

一人いでましき

月をあふぐ母の背みれば子の吾は近づきがたしと語りたまひぬ

月影の中に立ちます母君をおそれかしこむ子のころはや

母一人子らをはなれて縁側に行きて泣きぬとふ声ころしつ

(二回目の作品)

小柳陽太郎先生の御講義を聴く

もろこしのいづへのやまににひどしを迎ふらむかと妻うたひたり

すめろぎは名も無き民のうたごゑをみころふかくきこしめすらむ

二等兵の妻のよろこびいかばかりかしのべはこころしのにぬれゆく

くにたみをただにおもはずすめらぎをあふぐこのくにともしかりけり

久留米大学付設高校 教諭 名 和 長 泰
むらぎもの心の内をあるがままに語りぬ友は

目に涙して

(二回目の作品)

青空は高く澄めるにうづまきて風に流るる白雲まぢか

をちこちの木の間にひびくひぐらしの声なつかしき七沢の夏

班別短歌相互批評の折に

胸にある思ひかみしめ友どちと言の葉えらみ歌は生まるる

防衛庁調達実施本部東京支部検査第二課検査官

鏡 信弘

ビデオ上映

特攻に出撃するといふ少年兵の仔犬と遊ぶ笑顔美し

学習院大一年濱田英毅兄の語るを聞きて

ペリリユー島にて戦死をしたる身内のこと思

ひ出でしと君は語りぬ

外国の人がかくまでわが祖をお祭りさるるに胸打たれしと

(二回目の作品)

慰霊祭の折に

まさやかに澄める夜空に美しく数多の星のきらめきてあり

祭壇の上を見上ぐれば木星のときは明るく光りかがやく

かがり火に照らし出されし笹竹の間を火の

粉の舞ひ上がりゆく

降神のお声おごそかに響かひてみ霊は今し降りますらむ

われらが集ひの幸はひを祈る先輩のお声の響き力強しも

羽後信用金庫象潟支店渉外係長

須田清文

(二回目の作品)

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

うづもれる宝の山を掘りおこし見つめなほさむまなこあきらめ

日産自動車(株)・宇宙航空事業部

内海勝彦

厚木合宿に学生を迎へて

をちこちゆ集み来し友らひたすらに学び合はなむ四泊五日を

かかる世に有難きかな日の本の正道求めて

集ひこし友

国のため命ささげし先人の思ひ偲ばむ心澄まして

(二回目の作品)

合宿教室

二百十余人二人の集ひきて開く合宿は四十二回

時間割き来し甲斐ありしとふ有難き感想賜び

し西尾大人はも

的を射る質問多しと宣ひし竹本大人は嬉びまじき

合宿で自分に芯を得たりしと思ひを述ぶる男子たのもし

一つごと心尽くして学び合ふ集ひの力思はざらめや

らめや

福岡県立水産高校教諭 菅原亨二

休みつつ峠をめざす師の君を気づかふごとく

寄り添ふ乙女は

師の君と語りひながら登りゆく乙女の声の楽

しげに聞こゆ

(二回目の作品)

をちこちに虫の音聞こゆ七沢の終りの夜がし

づかにふけゆく

夜もふけて友らの寝屋を見上ぐればなほ語るらむ燈こぼるる

らむ燈こぼるる

防衛施設庁施設部施設企画課

(二回目の作品)

夜、宿泊棟で友と語りて

久々に会ひ得し友と夜更けて語りつくすも過ぎし日のこと

生業は異なりたれども学生に戻りたること思ひ述べるも

山根清

日産自動車(株)人材開発部課長

奈良崎 修 二

ビデオ「天翔ける青春」を鑑賞して

母君に涙は要らぬと説く君のふみ読みゆけば
涙あふるる

断ち難き思ひを断ちて散りゆきし若き学徒の
ふみぞ悲しき

ふみ綴りし若人達はとこしへの国のいのちを
信じて逝きし

南海の戦いに散りし英霊は異国の翁にまつら
れてあり

南海の島のをみなは日本の勇士偲びて歌ひ
たまへり

(二回目の作品)

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

すめろぎのみますかぎりは神々と人とのきづ
な絶ゆるなしとふ

国がらを思ひ起こしてその力世界に示せと師
はのたまひき

国の力世界に示すその姿命ある間に見たしと
のたまふ

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒 村 聰一郎

竹本忠雄先生の御講話をお聞きして

神々と人とのきづな断たれたる現在の日本を
嘆かるる大人は

日の本は天皇のましませばまたよみがへ
らむ武士道の精神

民族の血を断たれゆくチベットの民を思へば
悲憤湧きくる

(二回目の作品)

大日方学指揮班長の労をねぎらふ
もくもくと弱音もはず班長のつとめ果たし
ゆく姿貴し

合宿の終りを告げて参加者に礼述ぶるさに声
つまらしぬ

合宿を成功させんと励み来し日夜の苦勞の偲
ばるるかな

防衛庁航空幕僚監部防衛部通信電子課

神 谷 正 一

慰霊祭の意義を問はれて

ちはやぶる御霊慰む御祭の意義や如何にと
君は問ひしも

拙かる我が説明にうべなひし君の瞳のかがや
きうれしも

(二回目の作品)

途中で失礼する旨班員に告げし折に
次々に握手求むる班友の笑みし面輪の輝きて
見ゆ

安信住宅販売(株)新宿センター係長

松 吉 基 光

特攻の戦士たちの遺書聞きて真心の文に涙
流るる

真心の文残しつつ若くして散りにし花のみ心
いかに

(二回目の作品)

愛し子が携帯電話に「パパ早く帰って遊べ」
と伝言残せり

合宿の日程進むをりをりについてはからずも吾
子が験に

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して
敵味方かたみにその死を悼むとふもののふあ
りけりベルトラン・デュ・ゲ克蘭

全霊を祖国と民に捧げつくすいまはの言葉よ
なんぞかなしき

そのかみのヤマトケルのみ姿と重なる思ひ
にきくもかしこし

(二回目の作品)

閉会式終了後、指揮班よりの最終連絡の
折

事前より準備にいそむ大日方君のあまたの
苦勞しのびやまずも

指揮班の連絡をすべて終了せし君にたむける

大き拍手を

気を付けてお帰り下さいと涙ぐむ声にしのはるる君の思ひは

熊本県立天草高校教諭 今村 武人

戦ひに征かんとする先人の声を聞きてレコードに吹き込まれし先人の声うつし世によみがへりたり

(二回目の作品)

初めての「体験発表」

初めての発表前に我はただ椅子にすわりて原稿見入る

壇上より話すことばはつたなくも聞き入る友の目はかがやけり

「ごくろう」と友より声をたまふれば張りたる気持ちちやうやくいやさる

船橋市立法典東小学校教諭 竹内 孝彦
相模川の清き流れの川上の七沢の宿に友ら集

ひぬ
ひぐし

鯛のしき鳴く七沢教室の各棟めぐり友と行き来す

神奈川県立津久井高校教諭(東洋信託銀行にて研修中)

大日方 学

竹内先輩、垣迫兄、澤部兄、所用のあり

て合宿地を去る

指揮班の務めを共にせし友の帰りてゆくはさ

びしかりけり

(二回目の作品)

指揮班の皆さんへ

たまりくる疲れに耐へて友みなは励まし合ひて務めを為せしも

友みな力を得まして指揮班の重き務めを無事に果たせり

(株)神戸製鋼所資材部 北村 公一

朝まだき窓の外見れば思はずも山の端近く虹のかかれり

先輩を窓辺に誘ひうつすらとかかれる虹にしばし見とれぬ

ビデオ「天翔ける青春」を拝見して

征く人の遺文を聞けば後の世の吾れらに託さる思ひ知らるる

凜とした張りのある声ききればその人柄の偲ばるるなり

今は亡き人とはいへどうつしゑも声も残りて吾が胸をうつ

(二回目の作品)

合宿終了後、事務作業のお手伝ひをお願い

ひした地元・厚木のご婦人方をお招きし

た慰労会にて

それぞれの故郷の歌など披露して小さき宴は

なごみゆくなり

東急工建(株) 茅野輝章

指揮班の仕事につきて

指揮班のつとめにつきて偲ばるる四十二年の先輩のいたつき

さはやかにほほゑみかけつつ声かくる友としかへば力出で来る

友らみな思ひのたけを語り合ふ会になれとぞ我は願ふも

(二回目の作品)

合宿を終へて

えにしありてめぐりあひたる友なればまた語り合ふ時のまたるる

再会をちかひかはして友みなとわかれ惜しみつバスを見送る

国民文化研究会・職員 亀井 正弘

(二回目の作品)

真田博之兄と再会して

会はざりし年月を思へば長けれど言の葉交はせば心通ひぬ

日本青年協議会 松岡 篤志

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

中国にこびる姿を奴隸国家と激しき雄叫び胸

に迫りく

身を捨てて魂のこせしますすらをの歴史守れと

弘大使は述べ

古へゆ神と共にくらし来し父祖の歴史を仰ぎ奉るも

天皇のしらす御国に武士道はよみがへり続くと語りますかも

(株)東芝・製造システム営業一部

丹羽 冬紀子

(二回目の作品)

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

日の本に生を受けなば女として誠を至し生きなむ武士道

起立せし我らにさらに語らるる大人の願ひの胸にしみ入る

班別研修の折、戦争のご体験をお聞きして

後に続く我らを信じ国柄を説きたまひたるみどころ仰ぎぬ

国柄を語るる先輩の願ひにぞ応へ生きなむとせちに思へり

日本青年協議会 大葉勢 清 英

散策のをりに

あぶらぜみの鳴く声聞けば虫とりにあけくれし日々思はるるかな

班別討論のをりに

戦ひに散りし人々偲びつつよく戦へりと師は語られぬ

涙ぐみ胸つまらせて語られし師のみ言葉は胸にせまりく

長内先生の御講話の後の班別討論のをりに

言の葉はかはされずともしみじみと心の通ふこちするかも

(二回目の作品)

今日よりは辞書を手にして先人の尊き文を読みてゆきなむ

さぞつらき戦にありてもいつくしむ心忘れずか明治の大人は

「軍人ほどやさしき人はなかりし」とふ師のみ言葉を強く感じぬ

アサヒ飲料(株)守谷支店営業一課

澤部 和道

(二回目の作品)

神風に乗りにて行かれし先人の肉声聞きて目頭の熱くなる

合宿に寄せられた会員の短歌

元・福岡教育大学教授 山田 輝彦

合宿も近づくに、病みし身のもどかしく

て詠める

せめてわが祈りの心通へかし友らつどへる合

宿の地に

おぞましきことのみ起りひと日だに心安まる

時のなきかな

今にして起たずば永き日本の民のまさ道は

や絶ゆるべし

(七月二十六日)

あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。緑深き丹沢の麓・七沢で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や二ヶ月半が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを

基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文章の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「短歌」について

合宿では二回にわたつて短歌をつくりましたが、第一回のもは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくつていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入りました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました古川修、磯貝保博、青山直幸、藤井貢、小柳志乃夫、内海勝彦、大日方学、木村俊一

郎、秋山信之、亀井正弘、土井郁磨、田中光成、濱口和久、福富賢介、荒川雅之、松田裕幸、澤部和道、浦義勝、斉藤一佐、荻原俊雄の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は拓殖大学四年生の小林貴由さんにお世話になりました。

いろいろな皆様のご努力によつて出来上がった『感想文集』を、ご精読下さるやう切願ひしてやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思ひます。二ヶ月半前に七沢教室で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ致します。

(原川猛雄記)

〔資料〕

第四十二回 “合宿教室（厚木）” 感想文集

非売品

平成九年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七―〇―一八 柳瀬ビル

電話 〇三―三五七二―一五二六代

FAX 〇三―三五七二―一五二七

社団法人 国 民 文 化 研 究 会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 原川 猛雄・奈良崎修二

茅野 輝章・山根 清

